

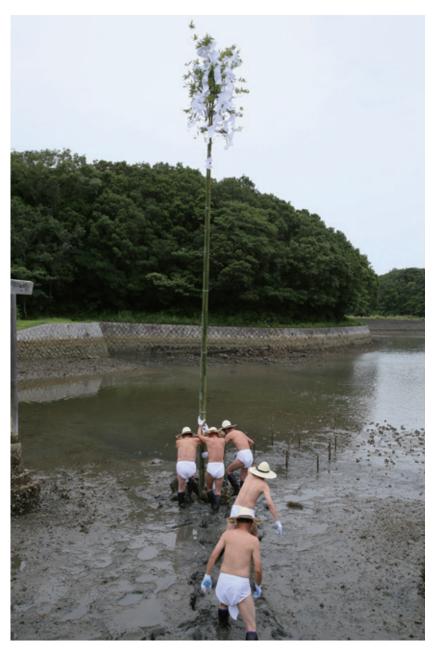
山梨県立富士山世界遺産センター 研究紀要

世界遺産 富士山

World Heritage Fujisan

第5集 2021

目次	
山外	
口絵・口絵解説	
〔論文〕	
新倉三ヶ寺と富士山 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 金子 誠司	7
伊勢志摩の富士信仰 ・・・・・・・・・・・・・・ 堀内 眞 2	25
付編1	
伊勢志摩に伝わる富士参り歌・浅間祭歌集成 ・・・・・・・ 7	'0
付編2	
「(伊勢国道者帳)」・・・・・・・・・・・・・・・10)7













東宮の浅間祭

□絵3









中津浜浦の浅間祭*□絵1~3 北出正之氏撮影

三重県度会郡南伊勢町(旧南勢町)

③剣ヶ峯



②浅間大社奥宮



①富士山頂を目指す登拝者



富士頂上繪葉書

個人蔵

(袋オモテ)

④御来光



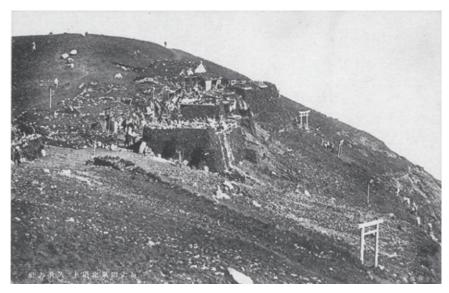
⑤銀明水



⑥久須志社



(袋ウラ)



「富士頂上絵葉書」 (富士山本宮官幣大社浅間神社頂上奥宮発行、1941年)





絹本著色准如上人御影 寛永13年(1636)

大正寺蔵



(背面)



(台座背面)



木造聖徳太子騎馬像 寛政8年(1796)





「御坂峠より見たる富士と河口湖」(『名勝富士』の一葉) (発行者不明、1936年頃カ)

個人蔵



「河口湖」(「国立公園 富士五湖」の一葉) (発行者不明、1936年頃力)

個人蔵

口絵解説

[三重県の富士信仰行事]

(二〇一八年)。 (二〇一八年)。

立神の浅間祭

と祭当番の「九人役」は、一座のうえオツトメ(御勤め)の床の間に「富士浅間大菩薩」の掛軸を掛ける。先達日に行われる。祭のヤドモト(宿元、当屋)となる家日に行われる。祭のヤドモト(宿元、当屋)となる家上に行われる。祭のヤドモト(宿元、当屋)となる家田に行われる。祭のヤドモト(宿元、当屋)となる家田に行われる。

あげる。その傍らに一二本の小竹を立て、一行は宿にえ、幣束を付けた大竹二本を一つに束ねたものを立ち先達と九人役の四名は、潮が引いた立石浜の立石に添帽子のつばの裏側には「南無浅間大菩薩」と墨書する。をして、潮時を待つ。白装束に麦わら帽子をかぶる。

2 東宮の浅間祭

戻る。

三重県度会郡南伊勢町東宮

る。その後、地内を道中し東宮川の支流に入って垢離に大幣・小幣やほかの梵天竹を立てて庭を左回りに巡東宮の浅間祭は、六月二十八日に行われる。寺の前

し、浅間さんの真言を唱和する。り返し垢離をとる。大幣を先頭に進んで浅間山に到着り返し垢離をとる。大幣を先頭に進んで浅間山に到着

3 中津浜浦の浅間祭

二重県南伊勢町中津浜浦

中津浜浦のセンゲサン(浅間さん)は五月二十八日 に集落の総休みとして行う。最初に浜に行き、海水に に集落の総休みとして行う。最初に浜に行き、海水に 手を浸し軽く口をゆすいでから、祈祷を済ませて浅間 とを一同で唱和する。山頂の基壇に安置された三体の とを一同で唱和する。山頂の基壇に安置された三体の とを一同で唱和する。山頂の基壇に安置された三体の とを一同で唱和する。山頂の基壇に安置された三体の とを一同で唱和する。山頂の基壇に安置された三体の

4 「富士頂上絵葉書」

個人蔵

官幣大社浅間神社頂上奥宮(富士山本宮浅間大社) 葉書)とする。一〇枚の各葉には「頂上16・8・26 武運長久登拝」のスタンプが捺されることから、 一九四一年の山仕舞のころに登頂した人が買い求め たものであることがわかる。

① 富士山頂を目指す登拝者

リートで固めているように見える。 の登山者を写す。山頂直下に二基の明神鳥居が立つ。 ここが大宮・村山口の入口とされた。手前の鳥居は地 ではを埋めて立てるが、背後の鳥居は沓石をコンク中に柱を埋めて立てるが、背後の鳥居は沓石をコンク

② 浅間大社奥宮

際し大日像を撤去して頂上奥宮に再編された。 根がわずかに見える。入口に木造の神明鳥居が、その根がわずかに見える。入口に木造の神明鳥居が、その根がわずかに見える。入口に木造の神明鳥居が、その根がわずかに見える。入口に木造の神明鳥居が、その根がわずかに見える。入口に木造の神明鳥居が、その根がわずかに見える。入口に木造の神明鳥居が、その根がわずかに見える。入口に木造の神典を でいると表大日と呼び換えられた。神仏分離に末近くになると表大日と呼び換えられた。神仏分離に 本近くになると表大日と呼び換えられた。神仏分離に 本近くになると表大日と呼び換えられた。神仏分離に 本近くになると表大日と呼び換えられた。神仏分離に 本近くになると表大日と呼び換えられた。神仏分離に 本近くになると表大日と呼び換えられた。神仏分離に 本近くになると表大日と呼び換えられた。神仏分離に 本近くになると表大日と呼び換えられた。神仏分離に 本近くになると表大日と呼び換えられた。神仏分離に 本近くになると表大日と呼び換えられた。神仏分離に

③ 剣ヶ峯

りの道は、この先で内浜道と外浜道に分岐する。剣ヶ峯と噴火口(内院)に残る万年雪を写す。お鉢巡奥宮からお鉢を巡ると最高所の剣ヶ峯に到着する。

⑤ 銀明水

りの途中で拝することができる。

彼方から昇り来る神々しい朝日を写している。富士山頂上から拝する日の出を御来光と呼ぶ。

雲海の

④ 御来光

みを施されて立つ。火口を望む道者や強力が写る。 登山者はここに登頂する。火口側、神明鳥居が立つと 登山者はここに登頂する。火口側、神明鳥居が立つと ころが銀明水の井戸にあたる。綿入の褞袍を着て金剛 大を持つ道者がいる。背後には須山口頂上の室が石積 大を持つ道者がいる。背後には須山口頂上の室が石積

⑥ 久須志社

立ち、道は階段状に整備されている。ここを鳥居御橋積み上げた山頂直下の登山道には二基の明神鳥居が士山東北頂上久須志社」が鎮座する。大規模に石垣を北(北口、吉田口)や東(東口、須走口)の頂上に「富北(北口、

まで駆け下る。
者が利用するスベリ(辷)の道であり、一直線に砂払下山道」の前方に神明鳥居が立つ。須走へ下山する道という。北東からの道者が到着する。手前の「須走口という。

5 絹本著色准如上人御影

大正寺蔵

(一六二二)には江戸からの 住類している。元和八年(一六二二)には江戸からの とでしている。元和八年(一六二二)には江戸からの を表している。元和八年(一六二二)には江戸からの を表している。元和八年(一六二二)には江戸からの を表している。元和八年(一六二二)には江戸からの を表している。元和八年(一六二二)には江戸からの を表している。元和八年(一六二二)には江戸からの を表している。元和八年(一六二二)には江戸からの とでしている。元和八年(一六二二)には江戸からの とでしている。元和八年(一六二二)には江戸からの とでしている。元和八年(一六二二)には江戸からの とでしている。元和八年(一六二二)には江戸からの とでしている。元和八年(一六二二)には江戸からの とでしている。元和八年(一六二二)には江戸からの

時期に存在していたのか判断に迷うところである。巨大な御影堂を再建したのと同年の寛永十三年の記巨大な御影堂を再建したのと同年の寛永十三年の記巨大な御影堂を再建したのと同年の寛永十三年の記し大な御影堂を再建したのと同年の寛永十三年の記した。

6 木造聖徳太子騎馬像

如来寺蔵

航路があった。

寛政八年(一七九六)

者の調子丸を木造で表している。太子が甲斐の黒駒に雲をあしらった台座に、騎乗の二七歳の太子と、従

乗り富士山に登ったという伝説をモチーフとしてい る。台座後部の刻文から、吉田御師の旦家である江戸 大久保(新宿区)の十三夜講中が奉納したものである ことがわかる。神田の鋳物師・藤原政時の手によるほ ば同じ姿の銅造も如来寺に伝来し、こちらも十三夜講 中の奉納である。銅造の方は富士山七合三勺の駒ケ岳 にある太子室(如来寺所持)に安置されたが、明治初 年に如来寺に降ろされた。

7 『名勝富士』および「国立公園 富士五湖」

個人蔵

ている。
「富士箱根国立公園」の指定は、昭和十一年「富士箱根国立公園」の指定は、昭和十一年中間で、この翌月には「特別名勝」となった。

①「御坂峠より見たる富士と河口湖」

いう。

帰途、三ヶ寺(大正寺・如来寺・正福寺)がある新倉(富

士吉田市)を訪れた。一説には富士山見物のためだと

くか、左手の尾根を乗り越して吉田へ向かった。る富士山を写す。富士に登山する者は湖水の左岸を行御坂峠の頂上付近から撮影したもの。河口湖と雪の残

② 「河口湖」

せた和舟が二隻繋留されている。対岸の船津とを結ぶ河口湖の北岸河口から撮影したもの。船着場に櫓を乗

二十一日まで長期の臨時休館を余儀なくされ、 や学会の中止・延期がありましたが、一方でオンラインでの研究会の実施など、新しい試みもおこなわれています。 及び人の移動をなるべく減らすこと等に注意を払う必要が生じ、調査研究活動におきましても困難が生じました。全国的にも、図書館や博物館の利用制限 昨年から続く新型コロナウイルスによる感染症の世界的流行は、各方面に大きな影響を及ぼしています。当センターも令和二年二月二十九日から五月 再開後も感染防止の観点から検温等、来館者の皆様にはご不便をおかけしております。また「三密」の回避

力をたまわった皆さまにあつく御礼申し上げるとともに、感染防止にご協力いただいた関係者各位に感謝申し上げます。 がりにもつながる問題と考えます。このほか、本研究報告では昨年に引き続き、西日本ことに伊勢志摩地方における富士信仰の展開について取り上げました。 本研究報告には、その成果の一部を掲載しました。第二回企画展では富士山の多様な信仰を養蚕との関連から考察しました。これは富士信仰の地理的な広 れた課題「下方斜面における巡礼路の特定」に対する研究成果として、第一回企画展では甲府盆地と富士山の北麓とを結ぶ「鎌倉道」を取り上げました。 今年度は「コロナ禍」の中、二回の企画展と五回の富士山講座を開催することができました。世界遺産登録時にイコモス(国際記念物遺跡会議)より示さ 当センターでは、基本テーマ「富士山文化の広がりに関する調査研究」のもと、継続して事業を実施し、その成果を企画展や研究報告等に反映していますが、 「コロナ後」を見据えて、当センターではよりよい調査研究のあり方をこれからも模索してまいります。末筆ながら本書掲載の調査研究活動に対し、ご協

令和三年三月

山梨県立富士山世界遺産センター 所長 秋道 智彌

凡例

よる調査・研究の成果をまとめたものである。本書は、令和二年度における、富士山総合学術調査研究委員会に

フ(堀内亨・金子誠司・堀内眞・根岸崇典)が行った。・本書の編集は、山梨県立富士山世界遺産センター調査研究スタッ

機関や各位に御協力をたまわった。

次の

正福寺 大正寺 如来寺

御殿場市教育委員会 富士宮市教育委員会

相賀浦区 切原浅間講 志島区 土路富士講伊勢市教育委員会 南伊勢町教育委員会 明和町教育委員会

有隻引舞 每日邓二日开始人

方座浦浅間講 海山郷土史研究会

田中保廣 永池健二 東成志 黛友明 右田嘉次伊藤昌光 上村莞爾 获野裕子 北出正之 杉本仁

村石真澄 山形隆司 米山芳子

味噌井拓志

(敬称略、順不同)

論

文

はじめに

を下り、川口(富士河口湖町)から吉田に抜けるルートについて考えた。明見(富士吉田市)に至るルートを取り上げた。そして本年度は鎌倉道の御坂峠町見(富士吉田市)に至るルートを取り上げた。そして本年度は鎌倉道についてはますみで、今和二年度の第一回企画展を開催した。鎌倉道については一」というテーマで、令和二年度の第一回企画展を開催した。鎌倉道については一」というテーマで、令和二年度の第一回企画展を開催した。鎌倉道については一」というテーマで、令和二年度の第一回企画展を開催した。鎌倉道については一」というテーマで、令和二年度の第一回企画展を開催した。鎌倉道について考えた。

立のルートは河口湖畔の通行が容易になる以前の鎌倉道で、蟻乗のような道者も大路に富士山の北方吉田口の町に入」った。つまり川口から新倉(富士吉田市)が開いた「不二孝」(不二道)に帰依していた。蟻乗は東海道を吉原(静岡県富士彦拝を果たし、「富士日記」を残した。蟻乗は食行身禄の系譜を引く小谷三志士登拝を果たし、「富士日記」を残した。蟻乗は食行身禄の系譜を引く小谷三志士登拝を果たし、「富士日記」を残した。蟻乗は食行身禄の系譜を引く小谷三志士登拝を果たし、「富士日記」を残した。蟻乗は食行身禄の系譜を引く小谷三志士登拝を果たし、「富士日記」を残した。蟻乗は食行身禄の系譜を引く小谷三志士登拝を果たし、「富士日記」を残した。蟻乗は東海道を吉原(静岡県富立のルートは河口湖畔の通行が容易になる以前の鎌倉道で、蟻乗のような道者も立る富士信仰の道であった。

く、また、「真宗と民俗」のあり方を年中行事の側面から検討した長沢利明氏や、の存在感が大きい地区である。この新倉三ヶ寺については『新倉の民俗』が詳し人」という俚諺があるように、浄土真宗の「三ヶ寺」(大正寺・如来寺・正福寺)川口側から峠を越えたところに位置する新倉は「新倉に過ぎたる三ヶ寺に利口

論

文

新倉という地区の大きな特徴となっている。の近世村の範囲に、三つの真宗寺院が隣接し合っているというのは非常に珍しく、三ヶ寺の成立と展開からその「先進性」を説いた犬飼顕澄氏の論考がある。一つ

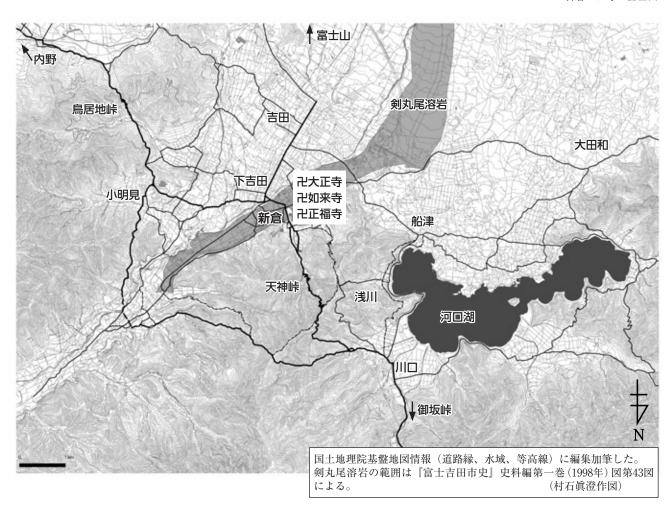
新倉を吉田方面へ行く富士信仰ルートの「御山の入口」としてとらえた場合、新倉を吉田方面へ行く富士信仰ルートの問題と、西本願寺門主准如の新ために、前提として真宗の祖親鸞の伝承ルートの問題と、西本願寺門主准如の新ために、前提として真宗の祖親鸞の伝承ルートの問題と、西本願寺門主准如の新ために、前提として真宗の祖親鸞の伝承ルートの問題と、西本願寺門主准如の新ために、前提として真宗の祖親鸞の伝承ルートの「御山の入口」としてとらえた場合、

親鸞と准如

(1) 親鸞伝承をつなぐ道

浄土真宗の祖親鸞は建保二年(一二一四)、越後から関東に移り、二○年にわる。まず、その伝承をもとに話を進める。内野の安養軒は、現在では同地区の臨る。まず、その伝承をもとに話を進める。内野の安養軒は、現在では同地区の臨る。まず、その伝承をもとに話を進める。

た。天野家には中身を見ると目がつぶれると言われていた先祖伝来の宝物があり、入ったところ、光を発している場所があり、そこを目指すと天野家の屋敷に着い親鸞が現在の静岡県駿東郡小山町か神奈川県足柄上郡山北町方面から甲斐に



てて守るようになった。その堂が安養軒というのである。家の老夫婦に、十字名号や六字名号などを与え、それらを後に天野一族で堂を建た阿弥陀如来の絵像の掛軸が出てきた。親鸞は天野家に滞在、弟子になったその開けたところ源信僧都(平安時代中期の天台僧、浄土の教義を大成する)が画い

の福源寺を一 会の 新倉を親鸞の伝承が結びつけているのである。 報恩講は現在では九月二十八日に行われ、 来様のお祭り」と呼ばれ、 を承天寺の客殿で三昼夜執り行う予定で、如来寺・大正寺、 渡辺幸内・白須太治兵衛が新倉村正福寺に宛てた「一札之事」には、 四月十五日付で、 トリコシ)を営む。そして新倉三ヶ寺も関わるようになる。天明八年(一七八八) このような伝承を背景として、 「法務」 日ずつ招待するとしている。 のために出向くことが確認されている。 内野村承天寺・米山善之進・渡辺弥五右衛門・天野半左衛門 露店も出て、 天野一族では親鸞の命日に安養軒で報恩講 新倉からも参詣者があったという。 正福寺の住職が導師を勤める。 近代以降は さらに親鸞の五五〇回遠忌 「阿弥陀堂のお祭り 下吉田 (富士吉田 正福寺が法 内 野 市 如

れも改宗したと伝わる。 城主遠山重正が本願寺の蓮如に帰依、 ある。8 総称される)、 源寺は行事などで新倉三ヶ寺に加わる場合もある寺院だが 新倉の宮ノ下に開い 寺では、 て改宗したという。 一年(一八一 倉の如来寺は安貞二年 大正寺は 文永年間 如来寺はそれまで救願寺という真言宗寺院だったが、 安貞年間 兀 (前身となる寺院については後述)、 成立の (一二六四 た草庵が前身と伝えられている。 正福寺も真言宗寺院の富北院と称し、 親鸞巡錫の具体的なエピソードは少ないながらも、 (一二三七 『甲斐国志』 (一二二八) に親鸞が留錫したと伝わる。 ~七五) 出家して乗欽と号して開いたとされ、 九 (巻8)では、正福寺と「同祖」としている。 に親鸞の高弟六老僧の一人である源誓が 親鸞の 新き 屋ゃ 真言道場だった下吉田 於富士之麓止宿之時」 (その場合は四ケ (富士吉田市) 「中古」に改宗したと 親鸞の教化を受け 「寺記」 内野 寺と の福 城 K

から下吉田、 新倉方面へと親鸞が辿ったルートを想定できる。

ける。 して、 がいくつかある。 兼帯」とある。この阿弥陀堂が如来寺兼帯であるとの意識からか、浅川は如来寺 に由来する。現在の阿弥陀堂より河口湖の岸寄りには、「阿弥陀堂」と刻まれた がある。その弥兵衛が阿弥陀堂を建て、 は新倉から浅川に抜けて外川弥兵衛宅に宿泊し、弥兵衛を弟子としたとする伝承 の門徒が少なくない。如来寺と浅川村の門徒との強い結びつきを示す近世の史料 近世後期造立の石碑が立つ。表の面には「親鸞聖人施化遺蹟」及び「新倉如来寺 の山越えルートには「祖志入」の地名が残り、 八月二十八日の報恩講には如来寺から阿弥陀如来の絵像、六字名号を持参して掛 報恩講の実施からみると、富士河口湖町浅川の阿弥陀堂が注目される。親鸞に 如来寺が親鸞から与えられた阿弥陀如来の絵像や名号を預かったという。 導師は如来寺住職が勤めるが正福寺も同席する。浅川地内から新倉方面へ 木像の阿弥陀如来を祀ったとされる。 祖師=親鸞が通行したという伝承

は西本願寺の直末となる。如来寺がまだ万蔵寺と称していた頃、 の本寺である万福寺に志を奉納、それを受けた万福寺が如来寺へ浅川門徒によろ 様ニ門徒衆へ頼入候」との記述がある。 万蔵寺に宛てた年未詳の書状には、「浅川村門下衆ゟ願志候、 しくと頼んでいる。 新倉三ヶ寺は当初、 、等々力村 (甲州市) の万福寺の末寺だったが、近世中期に 詳細は未詳だが、浅川村の門徒が如来寺 慥二致受納候、 万福寺風海から 宜

達について以下のように取り決めた。 りに費用もかかったらしく、 享保三年(一七一八)、如来寺は「飛檐」 如来寺門徒は前年の十二月に寄合を開き、 へと寺格が上がる。昇格にはそれな 費用の調

去年已来後住継目之御届二付、 談仕候へ共、 金子早速調可申様無之候、 何とそ飛檐列座ニ仕度存、 然所二大正寺御門徒衆俄二思立、 惣門徒中一同相

> ニハ存間鋪候、 尾能金子相調申候時分御上京可被成候、為其村々年寄旦那中連判如此上候 追付上京之由ニ候へ共、此方金子不調故延引ニ罷成候段、 此上随分精出し村切ニ金子集、 有次第御預ヶ可申候間、 惣門徒中迄残念 首

以上

享保二酉年十二月廿日

新倉村印

寄合之衆

下吉田村印 六郎左衛門四郎兵衛

松山村 不参

舟津村 小明見村印 五郎兵衛 平治右衛門 不参

浅河村 二郎右衛門

市左衛門

源五右衛門

小右衛門

善左衛門

権右衛門

喜右衛門

善兵衛

四郎兵衛 太郎右衛門

ら上京することを確認し合っている。この一札から、寄合には松山村(富士吉田市 入る。これを受け、 隣の大正寺の檀家も飛檐昇格のために同じように動き、 されるよう物門徒中が相談。しかし、 前年に住職の代替わりがあったことを機に、飛檐列座を本山の西本願寺から許 「随分精出し」村ごとに金子を集めて、首尾よく調達できた 金子が早速には調達できずにいたところ、 近々上京するとの情報が

〔表 1〕元文	[2年(1737	7)、浅川村	門徒の志納

〔表 1〕元文 2年 (1737)、浅川村門徒の志納						
甚左衛門内	12文	弥兵衛内	麻1つふり			
定右衛門	12文	勘之丞	50文			
勘五左衛門	7文	母親	麻3つふり			
与三左衛門	5文	次兵衛	12文			
角左衛門	12文	八左衛門母親	5文			
長兵衛娘	麻少	庄左衛門	10文			
小右衛門後家	麻3つふり・13文	八左衛門	16文			
藤右衛門妻	綿2羽	賀兵衛	3文			
弥左衛門妻	麻 2 つふり	重三郎	3文			
賀右衛門妻	3文	半兵衛内	麻2つふり・銭5文			
斧右衛門	綿2羽・麻1つふり	三右衛門内	麻2つ・銭3文			
喜兵衛	3文	与惣兵衛家中	麻2つふり・銭15文			
茂右衛門	綿4羽	仁右衛門	麻1つふり			
源三郎	麻1つふり	角右衛門	24文			
権兵衛	麻 2 つふり	戸右衛門	3文			
小兵衛妻・しも	麻少	平兵衛	麻 2 つふり			
九兵衛	麻3つふり	市右衛門	12文			
六兵衛	麻4つふり	利左衛門	麻少			
市兵衛	6文	弥五右衛門	麻8つふり			
六右衛門	12文	七左衛門	15文			
娘	4文	七左衛門妻	麻少			
清左衛門	13文	久左衛門	50文			
善兵衛	銭3文·綿3羽	太郎母娘	麻少			

「浅川村門徒志納帳」(如来寺蔵)より作成

だろう。

まつにとって如来寺は救済の砦だった。

は飛檐列座を許可された。 と船津村(富士河口湖町)が欠席、地元新倉村の寄合衆と下吉田・小明見両村はと船津村(富士河口湖町)が欠席、地元新倉村の寄合衆と下吉田・小明見両村はと船津村(富士河口湖町)が欠席、地元新倉村の寄合衆と下吉田・小明見両村はと船津村(富士河口湖町)が欠席、地元新倉村の寄合衆と下吉田・小明見両村は

を占める。銭ではなく麻や綿での志納も目立つ。そもそも仏教では女性は五障に一大文二年(一七三七)には浅川村の門徒が如来寺に対して持つ信仰のあり方の一端を知ることが出来る。これの一位の大学に対して持つ信仰のあり方の一端を知ることが出来る。これのは、浅川村の門徒は集団で如来寺へ志納し、二月十三日元文二年(一七三七)には浅川村の門徒は集団で如来寺へ志納し、二月十三日

を助けてくれたというから、事情は未詳ながら、よほど緊迫した状況があったの とで女性も往生できるという「転女成男(変成男子)」の考えを取り入れた。大とで女性も往生できるという「転女成男(変成男子)」の考えを取り入れた。大とで女性も往生できるという「転女成男(変成男子)」の考えを取り入れた。大とで女性も往生できるという「転女成男(変成男子)」の考えを取り入れた。大とで女性も往生できるという「転女成男(変成男子)」の考えを取り入れた。大とで女性も往生できないとされたが、親鸞は成仏する際に一旦男性の体を受けるこより極楽往生できないとされたが、親鸞は成仏する際に一旦男性の体を受けるこより極楽往生できないとされたが、親鸞は成仏する際に一旦男性の体を受けるこより極楽往生できないとされたが、親鸞は成仏する際に一旦男性の体を受けるこより極楽往生できないとされたが、親鸞は成仏する際に一旦男性の体を受けるこより極楽往生できないとされたが、親鸞は成仏する際に一旦男性の体を受けるこより極楽往生できないとされたが、親鸞は成仏する際に一旦男性の体を受けるこより極楽往生できないとされたが、親鸞は成仏する際に一旦男性の体を受けるこより極楽往生できないとされたが、親鸞は成仏する際に一旦男性の体を受けることで女性も往生できないというない。

げられる。『新倉の民俗』には以下のような口承が収録されている。(②) 浅川の門徒と新倉の如来寺を結ぶルートとして阿ノ山を越える「死人道」が上

越しに村と村との連絡をとってたっちゅう。
たり、それから、死人をこう担いで来たっちゅうこともあるだっちゅう。山て。浅川から人が死ねば、こっちのお寺へ飛脚っちゅうか、連絡に来たり行って浅川や長浜へ行った。最近は言わなくなったけれど、「死人道、死人道」せっこっちの山(阿ノ山)のとこ、浅川へ行ったり来たりした。ここの山を越し

それより南の天上山を越えるルートをとっていたとされる。(ミロ)また新倉と浅川の間には普段から往来する「カヤト道」もあり、「死人道」は

記してある。親鸞はこのルートで甲斐に入り、布教したとも考えられる。(2)と三国峠の間を通り駿東郡日向村(小山町)に抜ける籠坂峠を越えないルートが

から御坂峠を越えた巡錫ルートを伝えている。 (3)万福寺占三坂峠を御越、冨士山道中へ御懸り被成候て御通り被成候」と、万福寺方征寺は「古老ノ伝説」として、「むかし祖師聖人当国を経回の節、等力

て検討する必要がある。 道が信仰の上でどのように位置付けられるのか、富士信仰との関連も視野に入れ道が信仰の上でどのように位置付けられるのか、富士信仰との関連も視野に入れ今後は新倉三ヶ寺以外の親鸞伝承、そこから浮かび上がるルート、そしてその

(2) 准如の巡錫

か届く。以下に三通を載せる。 院建立と大きな事業を抱えており、 如は、 寺の教線拡大に努めた。その准如が元和八年(一六二二)八月に新倉を訪れてい 兄教如が東本願寺を起こす。その後、准如は大坂や江戸に別院を建立し、西本願 の命により本願寺宗主を継いだ。慶長七年(一六〇二)、徳川家康の支持により、 主となったのが、織田信長と戦った顕如の三男准如である。父の死後、豊臣秀吉 かけており、その文書は如来寺に伝来している。元和年間(一六一五~二四) 信濃・越後・佐渡の「坊主衆中」と「惣門衆中」に御堂の修復費用の奉加を呼び る。すでに准如は本願寺の宗主として慶長十六年の親鸞三五〇回忌にあたり、甲斐・ 近世初頭、 元和八年、新倉三ヶ寺に本願寺の御用人などから准如来訪に関する書状が何回 西本願寺焼失による諸堂の再建・移築、江戸浜町 浄土真宗の総本山本願寺は東西に分裂する。このうち西本願寺の門 京都と江戸を何回か往復したものと思われる。 (東京都中央区)への別 の准

人添、返々如何様思過候で、兎角談合申能様ニ可致候、早々以上① 返々申候、横田内膳様より我ニ一書指添人越申かへ被申候御状参候間則

懸ニ候、能様ニ御談合御申可有之候、急候間早々申候、恐々謹言申不可過之候間、併 尤与御返事候ハバ可然候、中之こんのふ通迄大宮と心様其元御越候、左様ニ候ハ、我之所 御一宿可被成御意ニ候、一代之名加与御門跡様江城中仙道迄御下向ニ候、依之御登其筋と被思召、彼井上神右衛門御門跡様江城中仙道迄御下向ニ候、依之御登其筋と被思召、彼井上神右衛門

行宗(花押

事	寺	七月十四日
有気	· 一	

参御同宿中

② 急候不具候、以上

許へ可被成御着候間、可被得其意候、委細者与左衛門可申候、恐々謹言態飛脚被差遣候、就者の御門跡様此地十二日ニ御立被成候間、十四日ニハ其

池尾主水佐(花押)

八月十日

万蔵寺殿アラクラ

同真念寺殿

③ 猶々此旨可申候、以上

御賄尤候、其元御礼衆なとも被罷出候様被相触候ハ、可然候、此等之旨被仰態令申候、然者御門跡様此地明後十二日ニ御立被成候間、被得其意、御中食

出候、恐々謹言

八月十日

八木長門守(花押)

横田内膳正

(花押

J 郡内 真福寺

万蔵寺

大宮と心懸ニ候」との意向を善福寺住職の行宗が知らせてきた(①)、宛は二つの寺になっているが、どこの寺なのかは未詳である。しかし如来寺に伝来した文の寺になっているが、どこの寺なのかは未詳である。しかし如来寺に伝来した文まで出て、途中、馳走をするべき由を書き送っている。さらに八月十日、池尾からは万蔵寺と「真念寺」に十四日にはそちらへ到着する旨(②)、重役衆の八木らは万蔵寺と「真念寺」に十四日にはそちらへ到着する旨(②)、重役衆の八木らは万蔵寺と「真念寺」に十四日にはそちらへ到着する旨(②)、重役衆の八木らは万蔵寺と「真念寺」に十四日にはそちらへ到着する旨(②)、重役衆の八木らは万蔵寺と「真念寺」に十四日にはそちらへ到着する旨(②)、重役衆の八木らは万蔵寺と「真念寺」に十四日にはそちらへ到着する旨(②)、重役衆の八木らは万蔵寺と「真念寺」に十四日にはそちらへ到着する旨(②)、重役衆の八本らは万蔵寺と「真念寺」に十四日にはそちらへ到着する旨(②)、重役衆の八本の寺になっている。さらに八月十日、池屋から、東京都港区)に宿泊し、「中之こんのふ通迄まずとり、「神田」と「海礼衆」の出迎えについて(③)知らまずと「東京都港区)に宿泊し、「中之こんのふ通迄」といる。

准如は八月十五日から十九日(もしくは十七日)まで新倉に滞在した。は准如への馳走のため正福寺に御座の間、四足の唐門などを寄進したとされる。八代・山梨)の真宗寺院は新倉まで挨拶に出たという。当時の郡内領主鳥居成次八代・山梨)の真宗寺院は新倉まで挨拶に出たという。当時の郡内領主鳥居成次、いざ准如が新倉入りするとそれ相応のもてなしをする。甲斐国の三郡(巨摩・いざ准如が新倉入りするとそれ相応のもてなしをする。甲斐国の三郡(巨摩・

うな裏書が背面に貼付されている。ちなみに「大正寺」の語句は後筆と思われる。大正寺には准如の御影が伝来する〔口絵5〕。表装は改められているが、次のよ大火で被災した御影堂の再建に取り組み、寛永十三年(一六三六)に竣工させる。准如の死後、次男の良如が本願寺宗主を継ぐ。良如は元和三年(一六一七)の

釈良如 (花押)

寛永十三期预八月三日

万福寺門徒甲州都留郡内新倉

大原庄新福寺常住物 大正寺

准如上人真影

願主釈西念

如御影の拝受はその一環としてとらえられる。 に連ばれた。そこで、三島まで来て受け取ってほしいと善福寺が「新念寺」に連 とがわかる。御影堂の完成により諸国より上洛する真宗寺院もあるが、准如の ので運ばれた。そこで、三島まで来て受け取ってほしいと善福寺が「新念寺」に連 とがわかる。御影堂の完成により諸国より上洛する真宗寺院もあった。大正寺の とがわかる。御影堂の完成により諸国より上洛する真宗寺院もあった。大正寺の とがわかる。御影堂の完成により諸国より上洛する真宗寺院もあった。大正寺の とがわかる。御影堂の完成により諸国より上洛する真宗寺院もあった。大正寺の

宮 世の編纂物には富士山を理由として上げているものもある。すなわち、 えられ、 が、富士山麓における親鸞ゆかりの地を巡るという意識が准如にあったことも考 を通ったという。親鸞伝承と近世前期の准如の巡錫を混同している可能性がある(ヨ) 力から三坂(御坂)を越えて、「富士山道中」を巡り、「ナカノこん野」 霊宝之記」(文化五年〔一八〇八〕)によると、一説に「祖師聖人」(親鸞)は等々 富士山を見るにはよいルートと考えられていたのだろうか。如来寺の「本山免許 を与えられたとする。注目されるのが、先の書状①である。新倉を発った後、大 の大正寺となる寺では「富士胎内之霊石」を献上し、准如の父である顕如の御影 を書き与えた。「富士山北面」を見ようと欲し托宿したといった記述である。後ඖ 戸からの帰路に「富士遊覧ノタメ」新倉に入輿・止宿し、如来寺住持に十字名号 (鳴沢村)から駿河の富士郡を結ぶ道で、大室山の南側など標高の高い所を通る。 さて、 (富士宮市) へ至るルートとして神野路を通ると言っている。神野路は大田 その場合の拠点は新倉三ヶ寺と認識していたとみられる。 准如はなぜ新倉を訪れたのだろうか。その真意は詳らかではないが、 (神野路 准如が江 後

御縁年と山小屋

1 富士山御縁年の由来

近世に入ると、伝説的宗教者長谷川角行の系統の四世月旺が、延宝八年(一六八〇) びとが登拝する。富士御室浅間神社に伝来した『勝山記』は、明応九年(一五〇〇) の御縁年に同行一四三人と登拝して、「八流」を残らず回ったという。 |庚申年に「此年六月富士へ道者参ル事無限」と、御縁年の登拝増加を伝えている。 六○年ごとに訪れる庚申の年は「富士山御縁年」とされ、平年よりも多くの人

御縁年は富士山誕生の縁起に由来する。新倉の正福寺が延宝八年に新刻した版 (正福寺蔵) は、 次のように富士山の略縁起を伝えている。

御山ゆしゆつのしだい おあわせたるににたる くにてけんそなし、のちいただきの上に五のばんじやくいで、、そのおち ゆしゆつなり、はじめハくもかすミとびきたりて、こくのあつまるかこと くだるあとたにとなる、こおりのなおとりてふじ山といふ、かたちれんけ 縁起ニ曰、孝安天王九十二年かのゑ申、ふじの山ゑだぎいわくからあん

後略~

い出た時も、自然に涌出した富士山が、孝安天皇の庚申年に雲霧が晴れて姿を現 した事を御縁年の由来としている。孝安天皇庚申年に富士山が誕生したという由(ホシ) また元文五年(一七四〇)の御縁年に際して、吉田御師が建札を寺社奉行に願

来は、吉田御師も正福寺も共通して伝えている。

登ることができた。そのため、 なお御縁年には、 通常は登拝が制限されている女性も、 御縁年には多数の参詣者が見込まれ、吉田口の権 四合五勺の御座石まで

論

文

益の問題が絡まるのである。

(2) 正福寺の版木

寛政十二年(一八〇〇)六月、正福寺は次のような願書を石和代官(谷村代官 川崎平右衛門の役所に提出した。

乍恐以書付奉願候

御免被仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候、 免被仰付被下置度偏 今年又前々之通下吉田村江罷出披露仕度候間、 新倉村正福寺奉願上候、 江罷出、富士山縁起并守等別紙建札之通、参詣之諸人信心之方江差出来候 : 付、 ニ奉願上候、 当寺之儀庚申富士山縁年之節ハ、上下吉田両村之内 仍之別紙建札之写相添奉差上候、 以上 両谷村并下吉田村\^工右建札御 右願之通

寛政十二年 庚 六 月

新倉村 正福寺

川崎平右衛門様 御役所

書上の「別紙建札」を示す文書を次に掲げる。 権利を持っていたことになる。現在も正福寺にはこれらの版木が伝来するが、 れたいと述べている。正福寺は御縁年には護符などを刷り出して、参詣者に配る 来通り下吉田村と両谷村(上谷村・下谷村〔都留市〕)にその旨の建札を許可さ 富士山御縁年の際、正福寺では富士山の縁起や護符を配札しており、 今回も従 願

弘法大師除消厄難御守

富士山八葉九尊来迎仏

富士三尊来迎仏

富士縁起并絵図

右什物者、当寺富士御山ニ付故有により往古より所持来也、 板行摩滅雖多、

全不加新 膨 任先例御縁年に限り摺出し、 遍く諸人之求に応するもの

也

寛政 Ť 一年庚申六月

新 正福山 知寺 事

富士縁起が上げられている。 とは近世には正福寺が所持していたのだろう。すべてにみられる弘法大師ゆかり えられる。 物・什物として書き上げられていないので、 御縁年の時 富士山八葉九尊図、富士山絵図と縁起が記されている。これが万延元年(一八六〇 法大師除消厄難御守」、 係があるからと言っている。現存する版木と照らし合わせてみると、〔図1〕が の富士山宝印と八葉九尊図の所蔵は確実といえる。 宝印、 (文政十一年〔一八二八〕) には正福寺の宝物として、弘法大師真蹟の富士山宝印 正福寺の くつかの史料から、 〔図3〕が「絵図」に相当しよう。 ここに上げてある護符等及びその版木の所持について、 三尊来迎図、 また絵図と縁起についても混乱がみられるが、 の如来寺の記録によると、「正福寺建札」として、 「寺記」では、什物として弘法大師真刻の富士宝印、八葉九尊仏尊像 富士山 近世の正福寺所持の版木を追ってみたい。 [図2]が「富士山八葉九尊来迎仏」、〔図4〕が「富士縁起 図、 三尊来迎仏の図は御縁年の建札以外では正福寺の宝 「富士三尊来迎仏」に当たるものが不明であるが 八葉九尊図とある。 (4) 版木は他で所蔵していた可能性も考 さらに慶応四年 現存しているというこ 正福寺では富士山と関 弘法大師筆の富士 「新倉山万亀鑑 (一八六八)



(正福寺蔵)



〔図2〕富士山八葉九尊図 (正福寺蔵)

彫刻

(版木)

は代々伝来し、

一日本

中山田あた

き、 四菩薩の像を建て、 子の道海に与え、道海は富北院 宝印と三尊・ 口に下向し新倉の里に至り、 真言の法を唱えて富士山宝印を描 名付ける。 富士山に登り、 ような内容である。 の縁起と関わっている。それは次の 弘法大師 É 諸 福寺) 人の厄難を救おうとする。 そして三尊来迎を拝 の富士山 九尊の像を彫刻して弟 を建立する。 山頂にそれぞれ五仏 弘法大師空海は 宝印は、 「八葉九尊」 その後、 正福寺 富士山 Ļ 北

> 山のぞうかし 次天医女人きろうのか

は他が治されるとないらし

それかないたくびをなるずかなかりかんほういつと

れ扱うとからほだらにおうとう

等ではずしかするれかありいてひからたる



〔図4〕富士山略縁起

一山の郷がタ 天代一覧よくよく大大 海紅天皇自先六年人月十つか

山北人角九十七年十二月ろうからしきとろうこかいろ

むらうぎょうちょう

みたんびい

(正福寺蔵)

〔図3〕八葉九尊図

(正福寺蔵)

一折山のあつべない 縁起町夢安天王九十二年からな中かられのあつるう

0

は富士山 符のように下吉田の 福寺にとってはきわめて大切な宝物として、 無類の霊宝」として、 でもあった。(3) まり正 宝印の護符に対する吉田御 福寺伝来の版木は空海作という由緒があった。 この点は後述する 「出張所」 諸人の求めに応じて刷って配布するようになったとい ではなく正福寺門前で配るとしている。 師の難色があり、 寛政十二年御縁年の際には、 谷村役所の命令に沿った措 中でも富士山宝印は、 ただこれ 他 0) ٠ ٠ ٠ ٤

護 正

III

 \Box

$\widehat{\underline{3}}$ 建札をめぐる問題

の場合、 月行) とめたものが 都千代田区) *費用、 場所に札を建てた。 御縁年の際、 であり、 より繁華な場所へ変えて建てることもあった。(4) 札の管理などが必要となり容易なことではなかった。 を例にとると、 〔表2〕である。 建札と管理には丸嘉講中も関与した。(5) 吉田御師はその旨を周知するため、 建札は寺社奉行をはじめとする各支配へ 町 年代が進むと場所が増える傾向にあり、 の月行事が富士講の大先達の宮田六右衛門 江戸を中心に近国 また麹町平川 その建札場所をま 0) 許 可 天神 願 0 江戸市中 往来が多 の手続き (行名 (東京

である。 (46) 以来「三国第 士山 建札の文面は、 が姿を見せたことに始まり、 四月から八月まで男女に限らず信心の輩は参詣することを呼びかけるも 山」と号したこと。 万延元年 (一八六○)を例にとると、 日本武尊が北口から遥拝して仮に鳥居を建 そして来る御縁年には大祭・ まず孝安天皇庚申年に富 神事を執行

許状 で、 起こっている。 万延元年御縁年の時は、 口は Ш 口御師の建札は「社格山例」をないがしろにするものだと批判したのである。(タチ 吉田 庚申縁年建札は上吉田村 御師支配であり、 川口御師が同じような札を甲府に建てたところ、 吉田: 文化年間 御師 と川口御師との間で、 (富士吉田市) (一八〇四~一八) より願うと明記され 建札をめぐるトラブ の川口御 吉田 師との 師 は、 出 いる ĺ 富

> 故に建札が許されると主張したが、 解を示し、 ることならば故障はないが、 御師側は従来、 結局は示談の方向に進んだ。 甲府勤番支配と勤番士、そして甲府市中へ 先例にないことは許可 寺社奉行は、 このよ しがたいと、 建 札 の内容が 、配札を行ってきた Ш 吉田御師寄り \square 浅間神社に限

0)

の支配的立場を示す重要な表徴だった うに御縁年の建札は吉田御師にとっては、 そこで前述した正福寺の護符配札の建札で [編日記] (50) 北 あ \Box

みてみよう。

寛政十二年御縁年

Ö 際の

建札

ていた。ところが建札の文面の草案を見た吉田 上吉田村役人・年行司の故障なきとの承諾を得 両 谷村の役人より書付を取り、 正福寺が 谷村役所 「古例」 「書上」を差し出すことになっ を吟味したところ、 下吉田村役人と 建札は

江戸 元文5年(1740) 寛政12年(1800) 万延元年(1860) 「御当地辻々」 江戸橋 江戸橋 麹町平川天神 麹町平川天神 両国橋 両国橋 市ヶ谷八幡 市ヶ谷八幡 永代橋 永代橋 深川八幡 芝田町四丁目札辻 芝田町札ノ辻 **→**辻御門外 山下広小路 高輪大木戸 高輪大木戸 浅草神明門前 浅草雷門前 新吉原入口 →芝新橋 赤坂御門外 赤坂御門外 四ツ谷大木戸 →京橋 神田明神 日本橋 青山久保丁 筋違御門外

〔表 2〕富士山御縁年吉田御師建札場所

その他									
	中山道口	日光道中口	水戸道中口	下総口	武蔵	相模	伊豆	駿河	甲斐
元文5年	上下板橋町	千住町	松戸町	行徳町	八王寺町	矢倉沢村	三島宿	沼津宿	石和宿
(1740)					拝島宿			岩淵宿	
寛政12年	上下板橋町	千住町	松戸町	行徳町	八王子宿	矢倉沢	三島宿	沼津宿	石和宿
(1800)					拝島宿			岩淵宿	
	板橋宿	千住宿	松戸宿	行徳町	八王子宿	矢倉沢村	三島駅	沼津駅	石和宿
万延元年					府中宿	大山町		岩淵駅	甲府
(1860)					拝島宿				大月宿
									谷村

「庚申縁年建札仕度につき願書」(『富士吉田市史史料編 第五巻 近世Ⅲ』富士吉田市、1997、史料番号107)、 山内取計方書上帳」(同、史料番号101)、「庚申建札御願扣」(富士吉田市文化財審議会編『富士吉田市の文化財 二十一)富士山縁年建札と女人禁制』富士吉田市教育委員会、1979)より作成 近世Ⅲ』富士吉田市、1997、史料番号107)、「富士

とられた。このように御縁年の建札は吉田御師の権益と関わるため、 と紛らわしいものは配札しないことを正福寺は誓わされた。弘法大師ゆかりの富 ことは確かだろう。 難色を示したというトラブルがあって、結果として正福寺側の主張が認められた 三尊の印形を捺し、 福寺の建札は 橋藤九郎から、 御師が一同相談の上、故障があると申し出る。六月十三日に谷村役所の掛役人高 谷村役所も慎重に調整する必要があったことが窺える は正福寺の主張が認められ、 すでに述べた通りだが、別に富士山宝印だけは神職の護符と紛らわしいというこ 士山宝印は大切な宝物であるので、 ついて吉田御師の差し障りがないか谷村役所の「御糺」があり、 いには慎重を期する必要があるが、建札について吉田御師が富士山宝印の記載に た。そして神職は故障なき旨の書面を出し、正福寺の建札が許可されて落着した。 除すると答えた。これを受けた掛役人高橋は「もっとも事也」と、神職を呼出し、 するように求めてきたことを伝えられた。そこで正福寺側は宝印が神職に関わる 之名所」は正福寺の所持であることを認めてくれるならば富士山宝印の部分を削 して認めてほしい。 ことならば削除するべきであるが、 「仏堂めく物」の他にも富士山の「仏名所」は正福寺持ちに相違ないと申し渡し **「建札願日記」は正福寺側の立場から作成された記録であるから、その取り扱** 下吉田の 「神職めき候而御師同様」で、特に富士山宝印の護符の部分を削除 新倉村名主と正福寺に呼び出しがかかり、上吉田村年行司が、 「出張所」で配ることは許されなかった。つまり、 道者も念仏を唱えている。ならば、これらを正福寺の権益と 「御縁年刷り物配布につき一札」によると、 富士山の初めは大日如来、山上には薬師如来、北口一山の 実際の配札は吉田御師へ配慮するという決着方法が 下吉田ではなく寺の門前で配るとしたことは 神職は三尊来迎の護符を出し、道者の行衣に 正福寺の建札に 神職が出す護符 建札への記載 正福寺側も 仏 正

(4) 正福寺の山小屋

そもそもなぜ正福寺は御縁年に札を建て、護符を刷って配るという権益が認め それは具体的にどのような「故」なのだろうか。寛政十二年六月付で正福寺から 谷村役所に出した願書の控では、浅野左衛門佐(氏重)と鳥居土佐守(成次)の 「御墨付」の所持が建札の根拠とされている。これより前の延享二年(一七四五) 「御墨付」の所持が建札の根拠とされている。 これより前の延享二年(一七四五) のこり のでして以下を上げている。

都留郡新倉村

京都本願寺末浄土真宗新倉山正福寺

略~

一慶長九年鳥居土佐守殿富士山大日向小屋役被下置候御免状所持仕候一文禄四年浅野左衛門佐殿富士山小屋役被下置候御免状所持仕候

一富士山絵図並略縁起所持仕候

右之通相違無御座候、以上

延享弐乙丑年三月

新倉村

正福寺印

谷村 御役所

表野左衛門佐氏重と鳥居土佐守成次は近世初頭の郡内領主である。豊臣秀吉政 を取る。成次は寛永八年(一六三一)に死去し、翌年に子の忠房が改易に処され の戦いの後、幸長が和歌山に移ると、翌年、鳥居成次が徳川家康より郡内を与え られる。成次は寛永八年(一五九三)、甲斐国は浅野長政・幸長父子に与えられ、郡内へ と、翌年、鳥居成次が徳川家康より郡内を与え られる。成次は寛永八年(一六三一)に死去し、翌年に子の忠房が改易に処され の戦いの後、幸長が和歌山に移ると、翌年、鳥居成次が徳川家康より郡内を与え の戦いの後、幸長が和歌山に移ると、翌年、鳥居成次が徳川家康より郡内を与え られる。成次は寛永八年(一六三一)に死去し、翌年に子の忠房が改易に処され られる。成次は寛永八年(一六三一)に死去し、翌年に子の忠房が改易に処され られる。成次は寛永八年(一六三一)に死去し、翌年に子の忠房が改易に処され られる。成次は寛永八年(一六三一)に死去し、翌年に子の忠房が改易に処され られる。成次は寛永八年(一六三一)に死去し、翌年に子の忠房が改易に処され られる。成次は寛永八年(一六三一)に死去し、翌年に子の忠房が改易に処され られる。成次は寛永八年(一六三一)に死去し、翌年に子の忠房が改易に処され られる。成次は寛永八年(一元九三)、甲斐国は浅野長政・幸長父子に与えられ、郡内へ

文禄四年に浅野氏重が下した「富士山小屋役」の免状は次の通りである。 (ヨ)

以上

富士山於上中宮、 弥左衛門尉次之小屋場壱間之分、 遣之者也、 仍如件

文禄四年

一月十六日 氏重 (花押

民部卿

ように保証した。 登山道に沿って上の方に立ち並ぶ山小屋の内、 「次」に当たる場所であったことが分かる。この権益は鳥居氏も慶長九年に次の 間 氏重が、 (軒) 正福寺中興の祖といわれる西円(「民部卿」)に富士山内で「小屋場 の権益を与えている。そこは「上中宮」、すなわち五合目の中宮から 「弥左衛門尉」が所持する小屋の

大日之向、惣小屋之上、 壱間出し遣也、 仍如件

慶長 長 九年

五月廿八日 成次 (花押)

西円

縫殿丞

の堂より上方に小屋が立ち並んでいる様子が描かれており、 軒の経営の権益を認めたものと理解される。〔図3〕には五合目の「中宮大日」 正福寺の西円と縫殿丞 (西円の子か)に宛て、「大日」の向かい側にある小屋 権益が認められた小

屋も、氏重の時と同じく、五合目中宮付近にあったのだろう。 定できる。「新倉山万亀鑑」所載の「法物記」には浅野氏重の位牌三本、 Ш .小屋の権益を認められたということは、浅野氏・鳥居氏との特別な関係が想

> 浅野・鳥居両氏が領主でなくなっても関係は続く。年未詳だが正福寺から浅野家 「富士海苔」を進呈した例もみられる。

をみてみよう。 さて寛政十二年御縁年に際して、浅野・鳥居両氏の末裔と正福寺とのやりとり

と連名で、浅野家人長坂儀右衛門と石原太右衛門に次のような請書を提出した。 ていたとみられる。七月、正福寺の前寺教正寺は、差添の下吉田村白須市左衛門 政の兄氏次の系統で、幕府旗本の浅野内膳氏象(二〇〇〇石)が氏重の菩提を弔っ 折り合いが悪くなり暗殺され、子の知吉も切腹している。寛政十二年当時は、長 浅野氏重は和歌山・広島と家老として主家とともに移ったが、主の浅野長晟と 聞候、 今度私共江御糺之上御再建御納被下難有奉存候、 御先祖左衛門佐様御位牌并外御位牌弐体都合三体、先年ゟ正福寺ニ有之候処、 御縁起等差上申度、 例庚申年富士山御影并縁起等差上来候二付、当年庚申年二付、先格之通御影: 倉山正福寺江富士山於中宮小屋場壱軒被下置候御墨付有之、右御由緒を以先 御当家御先祖浅野左衛門佐様、文禄年中、甲州郡内御領地之節、新倉村新 依之如此御座候、 使僧教正寺江白須市左衛門差添差上候処御受納被下、且 以上 右之段罷帰り正福寺江可申

寛政十二庚申年七月

役僧 教正寺正福寺内

下吉田村 差添 白須市左衛門

浅野内膳様御内 長坂儀右衛門様 石原太右衛門様

江戸まで使いを遣って「富士山御影并縁起等」の札を進呈していたことが分かる。 かつて中宮の山小屋の権益を与えてくれた浅野氏に対して、正福寺は御縁年に

る。法事は七月十七·十八両日に執行された。 体の位牌とは氏重とその室、嫡子とあり、それを氏象が再建して納めたとしてい体の位牌とは氏重とその室、嫡子とあり、それを氏象が再建して納めたとしてい正福寺に伝えることを約束している。浅野氏側から教正寺に与えた請書には、三正福寺に接野氏側からは氏重他の位牌三本を再建して納め、使僧の教正寺はその旨、

この時期、鳥居氏にも同様の動きがみえる。鳥居氏は成次の子の忠房の時に改るも、成次の系統は忠房の弟忠春から幕府旗本として存続した。寛政十二年当時の当主は鳥居久五郎成純(二五〇〇石)であり、御小姓組に属していた。正福寺では七月に成次の書付と位牌を鳥居氏の屋敷に持参、一覧の上、位牌料を受け取っている。そして、浅野氏と同じく、次のように位牌修復により法事を執受け取っている。そして、浅野氏と同じく、次のように位牌修復により法事を執受け取っている。そして、浅野氏と同じく、次のように位牌修復により法事を執受け取っている。そして、浅野氏と同じく、次のように位牌修復により法事を執受け取っている。そして、浅野氏と同じく、次のように位牌修復により法事を執受け取っている。そして、浅野氏と同じく、次のように位牌修復により法事を執受け取っている。

教正寺

正隆寺

専念寺

白須市左衛門下吉田村

森嶋利八 谷村

新倉村

渡辺仁兵衛

渡辺又兵衛

渡辺嘉藤次

之旨御書面ヲ以被仰聞被承届候、此段得御意候様久五郎被申付候之間若斯御并名前之者共致世話、任先例名前順ヲ以致焼香候由、猶又自今以後任古例度六月中再修復被致候ニ付、七月十七日・十八日法事御執行有之、其節右寺中右者当家先祖鳥居土佐守成次、郡内被致領知候ニ付、貴寺ニ右位牌有之、当

屋場を建てようとしたということは、山小屋が実際に機能していたかは疑問であ

座候、以上

中嶋文右衛門印鳥居久五郎内

寛政十二申年 石川伊右衛門@

永江弾右衛門印

正福寺 円海上人 中人

うか。文政十一年(一八二八)の出入の経過から、そのことを探ることとする。 符配布の権益と結びついている。 世後期でも正福寺は確かに、 を守るということで落着した。御師側に有利な形で出入は終結したのである。近 士山北面之儀者師職進退」として内済を命じ、結局は従来の仕来り通りに「山例」 人側も調査が十分ではなかったが、石和代官(谷村代官兼)吉川栄左衛門は「富 た。譲り受けた側の百姓は成次の「古筆」がある旨を言い立て、吉田御師と村役 ところ、隣の小屋場の持ち主が「新規」として、吉田御師も巻き込み出入りになっ て所持している地があり、それを譲り受けた上吉田村百姓が小屋場を建て始めた 利な扱いをしたことは、正福寺と幕府旗本との深い関係を考慮した可能性もある。 たことがうかがえる。山小屋の権益の「御墨付」はその関係の中で、御縁年の護 しており、史料中の「古例」「先例」の文言からは、両家との関係が継続してい 修復をうけて同時に法事を執行したのである。正福寺は氏重と成次の位牌を所持 富士山五合五勺の砂振に、正隆寺(正福寺の前寺)が鳥居成次の「書付」によっ つまり、 しかし、 山小屋経営の権益は近世後期の時点でどれほどの実体があったのだろ 寛政十二年七月十七・十八両日に正福寺では、浅野・鳥居両氏の位牌 「御墨付」による山小屋の権益を持っていたが、小 吉田御師の難色に対し、谷村役所が正福寺に有

論

になったといえるのではなかろうか。 るとは限らず、 る。そして、「御墨付」は実体としての山小屋経営には必ずしも効力を認められ 持ち続けていたことになろう。 御縁年の護符配札の権益の拠り所としての機能が強調されるよう 御縁年の面から正福寺は富士山と関わりを

聖徳太子の騎馬像

1 浄土真宗と太子信仰

置し、太子堂とも聖徳寺とも称したという。現在の境内ある太子堂は享保十年 教では太子を往生人として崇め、やがて親鸞などの讃仰を受けたのである。そし なったという。すでに奈良時代末期には太子を菩薩とみなす考えが生まれ、(®) 認識があり、それは太子信仰に結び付き、中世では東国に顕著にみられるように げ、その夢告に従って浄土宗の祖である法然のもとを訪れるという話である。 六角堂で百日の参籠をしたところ、九五日目に太子が夢に現れて救済の教えを告 は如来寺である の福源寺も太子真影を所持する。福源寺は古くは聖徳太子の自画自賛の絵像を安の福源寺も太子真影を所持する。福源寺は古くは聖徳太子の自画自賛の絵像を安 く。新倉三ヶ寺も聖徳太子と無縁ではなく、太子真影や太子伝が伝わる。下吉田(ദ) て各地の真宗寺院で太子の絵像や、それを安置するための太子堂が建立されてゆ のことから浄土真宗には聖徳太子を日本における浄土教の始祖として重要視する (一七二五)の建立で、 (一二〇一)、比叡山を下った親鸞は、 天台僧の親鸞が浄土の教えに目覚める重要なエピソードがある。建仁元年 太子真影の他、 聖徳太子が創建したと伝えられる京都の 木像も安置される。さらに注目されるの(66) 浄土

限があった時代には、 富士山駒ケ嶽遥拝」の地とある。境内には太子堂があり、 太子像、 「本山免許霊宝之記 いずれも騎馬像を所蔵する 女性はここから駒ヶ岳を拝んだという。そして銅造と木造(%) 如来寺は、昔、 救願寺と号し、 富士山の女人登山に制 「聖徳太子駐馬の勝跡

(2) 太子騎馬像と如来寺の山

一つの太子騎馬像はほぼ同じモチーフで造られている。 〔図5〕の銅造の台座

大久保十三夜講中江戸

御鋳物師 西村和泉守

(一六八八~一七〇四) より代々 西村 (藤原) 政時は元禄年 間

背面には次のような刻銘がある 藤原政時作 〔図5〕銅造聖徳太子騎馬像

(如来寺蔵)

という。この騎馬像は、江戸大久保(東京都新宿区)の月待講である十三夜講が(8) 座背面に寛政八年(一七九六)八月と彫られ、 奉納したものである。 政時を名乗る鋳物師の家で、 [口絵6] の木造も同じ所の十三夜講が納めたもので、 江戸神田鍛冶町に住んだ。梵鐘製作に定評があった 講員三四名の銘がある。 台

黒駒伝説を詠ったものがある。 国的に語り継がれるようになった。 伝略』 地方を回ったという話である。この伝説は十世紀に成立したとされる『聖徳太子 が、舎人の調子麿を伴って雲の中に消え、三日間で、富士山の頂上、信濃や北陸 ちなむものである。推古天皇六年(五九八)九月、甲斐の黒駒に乗った聖徳太子 騎馬姿の太子像は、聖徳太子が甲斐の黒駒に乗り富士山に登ったという伝説に や、 十一世紀成立の『扶桑略記』に記され、後に絵伝や絵像も描かれて全 親鸞の「聖徳太子奉賛」にも、 太子と甲斐の

話である。 に入った。 思しき菩薩と対談した。地主神の本地阿弥陀三尊に誘われ、 さらに太子の富士山登頂に対して様々なエピソー 富士山と聖徳太子はこのような伝説から関係を深める 霊窟から地下に入り地獄を見て、 大日如来と問答した。といった類 ドが加わる。 麓の地獄を見に宝池 太子が地主 神と

如来寺は太子の伝説と結びつく形で富士山の山小屋に権益を持つに至ったといえ 屋地」一ヶ所が如来寺に奉納され、「小屋」を再建した際に、 氏が紹介している寛政五年(一七九三)の「書付之事」では、かつて駒ヶ岳の「小 説をふまえ、駒ヶ岳の「小屋場」を修復して太子像を安置したとある。髙橋晶子 子をいさめた。また駒ヶ岳は「太子駐馬の勝跡」である。「小屋場」は年を経て の旦家「大久保同行中」が十三夜講を結成、「聖徳太子之尊像」を納めたという。 を思い修復を加え「太子の尊像」安置したとある。この縁起には、太子の登頂伝 朽ちていたが、 至ったことが始めである。そこでは諸仏・菩薩が影向して浅間大菩薩を迎え、 のような話が載る。 天明四年(一七八四)六月付で如来寺が出した「富士山駒嶽略縁起」には、 明和元年 (一七六四) 「富士山践頂」は聖徳太子が甲斐の黒駒に乗って「嶽上」 の秋、「奇異の霊夢を感し」太子の「洪恩」 吉田御師刑部伊予 に 太 次

岳

における「小屋」は一軒で、 後に「七合五勺ヨリ上ニ小屋三軒」とされており、(瘂) 来寺の「兼帯」とある。 岳に「小屋」があり、「聖徳太子ノ像」と「銅馬」が安置されていて、そこは如 小屋ということになる。 その後の展開をみると、文化十一年 『甲斐国志』の記述では続いて、 それは奉納された太子騎馬像を安置する如来寺所持 (一八一四) 成立の 同書が取り上げている駒ヶ岳 太子の登頂伝説、 『甲斐国志』には その 、駒ヶ

ことになる。「太子堂」は嘉永三年に写された「富士一山北口明細御絵図面 別に万蔵寺 所駒ヶ岳太兵衛 七合目の「小屋」 しかし万延元年(一八六〇)刊の 江戸の行者長島泰行が嘉永元年 室 (如来寺)持ちの「太子堂」の存在が記されている。太子像を安置す と如来寺持ちの は九軒で、 聖徳太子像 駒ヶ岳には「銅馬ヲ安置ス小屋」 銅馬ともに室の内に安置す」とあり、これとは 「太子堂」と、 『富士山道知留辺』には、「七合三勺 (一八四八) に著した『富士山真景之図』 太子由来の山小屋が二軒あった 」があると述べる。 (元) (元) 室一ヶ 大全

> 軒の「小屋」が見える。 岳」の室と思われる。 やや上方に七合五勺の烏帽子岩と身禄嶽を描き、その下方に一軒、 方には「駒ヶ岳」と注記された石室が見える。 個人蔵、 以下「絵図面」と略す)に描かれている。亀岩の西に当たり、 この二軒が「絵図面」に描かれている「太子堂」と「駒ケ 『富士山真景之図』では亀岩の西側 さらに下に一

ŋ か、 納の像は、 には銅造の太子像を安置する山小屋が二軒あったことになる。銘から十三夜講奉 とになる。この二軒の関係や、正徳四年当時に 講」の銘があるという。すなわち、近世後期のいずれかの時点で、富士山駒ヶ岳 寺兼帯」との二軒の山小屋が記載されている。前者は「別室」に 銅黒駒」 万延元年の御縁年に際してまとめられた「如来寺関係雑記録」には 検討すべき課題は多いが、後考を俟ちたい それには正徳四年(一七一四) 上町伝右衛門持 は後に太兵衛や上町伝右衛門持ちとなる山小屋へ納められたというこ 如来寺持ちの「太子堂」「太子室」と呼ばれた山小屋へ、正徳四 新兵衛・幸右衛門」と「太子室小屋守坊屋常右衛門 五月二十三日の年月日と「江戸本飯田町 「銅黒駒」 がどこに納められたの 「銅黒駒」 「七合目 が 方人 如

窺える。 等々力の万福寺から伝来した「太秦太子伝」、 士山縁起などの霊宝も見せた。 太子騎馬像、 は らか未詳だが、十五夜の「お座」に住職が登って勤行した。万延元年の御縁年で 如来寺の太子室では、古くは太子の絵像を祀っていたともいわれ、 「太子堂」で霊宝を開帳する。その際に建札し、 駒ヶ岳の古尊とする薬師如来像を夏中開帳すると記した。その他 富士山と聖徳太子を信仰に取り込んでいることが 上野坊 文面に大久保十三夜講奉納 (河口御師) 累世伝来の富 いつごろか

つを展開したのである。 太子富士山登頂伝説をさらに結びつけて、 このように如来寺は浄土真宗と結びついた太子信仰、 富士山を舞台とした信仰のあり方の それに甲斐の黒駒による 論

今まで述べて来たことを簡単にまとめてみたい。

必要なのではないだろうか。

心要なのではないだろうか。

御縁年に配札を行うためにも必要だった。 「御墨付」を配札の根拠とした。護符の発行という正徳寺の宗教的行為は、山小 「御墨付」を配札の根拠とした。護符の発行という正徳寺の宗教的行為は、山小 「御墨付」を配札の根拠とした。護符の発行という正徳寺の宗教的行為は、山小 原申の富士山御縁年には、正福寺が建札の上、護符を出していた。建札や護符

山との関係はそれで保持されたのである。駒に乗った太子の富士山登頂伝説をふまえ、山小屋の所持にもつながった。富士駒に乗った太子の富士山登頂伝説をふまえ、山小屋の所持にもつながった。富士山とのつながりという点で如来寺は太子信仰と結びつく。それは甲斐の黒

それを歴史的な変遷としてとらえることが課題である。ていた。多様な富士信仰の解明のためには、他宗派や神道、富士講などとの関連、富士山を取り巻く多様な信仰世界の中で、真宗寺院もそのあり方の一角を占め

註

- 図書館山書を読む会、一九八三)に一部翻刻(1)「富士日記」(国立国会図書館蔵)。『江戸期山書翻刻叢書六(富士日記・木曽採薬記』(国立国会
- 一九八七)25頁(2)富士吉田市史編さん室編『市史民俗調査報告書 第六集 新倉の民俗』(富士吉田市、
- 浄土真宗寺院の成立と展開」(同7、一九九二) (3) 長沢利明「門徒の年中行事とその周辺」(『富士吉田市史研究』3、一九八八)、犬飼顕澄「近世
- (4) 『新倉の民俗』、『忍野村誌 第二巻』(忍野村、一九八九)
- (5)『新倉の民俗』19~19頁
- (6) 『忍野村誌 第二巻』 529頁
- 藤八郎校訂『大日本地誌体系46甲斐国志 第三巻』雄山閣、一九六八])43頁 歳寺と改称(同)54頁、さらに正徳三年(一七一三)頃に如来寺と改めた(『甲斐国志』巻89[佐蔵寺と改称(同)54頁、さらに正徳三年(一七一三)頃に如来寺と改めた(『甲斐国志』巻89[佐東立図書館、一九六八)七月「都留郡新倉村如来寺由緒書」(『甲斐国社記・寺記 第四巻』山梨
- (8) 慶応四年七月「由緒書」(『甲斐国社記·寺記 第四卷』)54頁
- (9) 慶応四年七月「由緒書」(『甲斐国社記・寺記 第四巻』)54~54頁
- (『甲斐国社記・寺記 第四巻』) 34頁 富士吉田市教育委員会、一九九○) 23頁。福源寺への改称は蓮如の教化を受けてのこととする「富士吉田市教育委員会、一九九○) 23頁。福源寺への改称は蓮如の教化を受けてのこととする
- (11) 『新倉の民俗』187頁
- (12)富士吉田市史編さん委員会編『富士吉田市史通史編 第二巻 近世』(富士吉田市、二〇〇一)
- 644 頁
- (13) 「万福寺風海書状」(如来寺蔵
- 享保四年に飛檐への昇格を果たしている。(4)犬飼顕澄「近世浄土真宗寺院の成立と展開」13頁。正福寺は寛永十二年(一六三五)、大正寺は
- (15)「如来寺飛檐列座の儀につき金子調方連判状」(如来寺蔵)
- 市史史料編 第四巻 近世日』富士吉田市、一九九四、史料番号80) (16)「如来寺惣門徒名代上洛につき入用金子の件連判状」(富士吉田市史編さん委員会編『富士吉田
- (17)「如来寺飛檐列座の許状」(『富士吉田市史史料編 第四巻 近世Ⅱ』史料番号76)

- (18) 「浅川村門徒志納帳」(如来寺蔵
- (19)「如来寺へ女人駆込み世話うけ礼状」(『富士吉田市史史料編 第四巻 近世Ⅱ』史料番号88。
- (20) 『新倉の民俗』 267頁
- (21) 『新倉の民俗』 41頁
- (22)佐藤八郎校訂『大日本地誌体系45甲斐国志 第二巻』(雄山閣、一九六八)37頁
- 因は如来寺二○世で、文政九年(一八二六)七月十五日没(『新倉の民俗』)18頁の記録は襖の下張りに使われていたものを、「大原山隠士浄因」が書き写したものという。浄(23)「万蔵寺と改名の由緒他記録」(『富士吉田市史史料編 第四巻 近世Ⅱ』史料番号55)。なおこ
- 番号74) (24)「親鸞三五○回忌につき御堂修造奉加要請状写」(『富士吉田市史史料編 第四巻 近世Ⅱ』史料
- (25)「本願寺准如当地立寄りにつき連絡所綴」(『富士吉田市史史料編 第四巻 近世Ⅱ』史料番号
- (26)「新倉山万亀鑑」(正福寺蔵
- (27)②の宛所は真(新)念寺、③は真(新)福寺になっている。両方とも大正寺の前身とされているが、宝永三年(一七〇六)の「大正寺寺領・由緒書上控」(『富士吉田市史史料編 第四巻近世Ⅱ』史料番号73)によると、当初は「新念寺」と称したが、文禄三年(一五九四)の検地から数年後に「新福寺」と改めた。そして寛永四年(一六二七)に焼失して、郡内領主鳥居土佐寺成次の代に再興し、寺号を「大正寺」としたという。成次は寛永八年に死去しているので、「大正寺」への改称は寛永四~八年となる。近世後期になると、例えば『甲斐国志』(巻89)では文明年中(一四六九~八七)に新倉に真宗道場が開かれ「真福寺」と号し、寛文年中(一六六一~七三)に「大正寺」と改めたという(『大日本地誌体系46甲斐国志 第三巻』)43頁。このように大正寺の前身とされる新念寺と新福寺については混乱がある。同日付の文書に両方の寺号がみえることについて、犬飼顕澄氏は新念寺と新福寺が同時期に並立していたとみている(「近がみえることについて、犬飼顕澄氏は新念寺と新福寺が同時期に並立していたとみている(「近がみえることについて、犬飼顕澄氏は新念寺と新福寺が同時期に並立していたとみている(「近がみえることについて、犬飼顕澄氏は新念寺と新福寺が同時期に並立していたとみている(「近がみえることについて、犬飼顕澄氏は新念寺と新福寺が同時期に並立していたとみている(「近かみえることについて、犬飼顕澄氏は新念寺と新福寺が同時期に並立していたとみている(「近かみえることについて、大飼顕澄氏は新る。同日付の文書に両方の寺号がみえることに対していている。
- (28) 「万蔵寺と改名の由緒他記録」

世浄土真宗寺院の成立と展開」)9頁。このことは今後の課題としたい

- (29)「新倉山万亀鑑」
- 番号45) (30) 「開山(親鸞)・准如御影お渡しにつき連絡書」(『富士吉田市史史料編 第四巻 近世Ⅱ』史料
- (31) 『甲斐国志』巻89(『大日本地誌体系46甲斐国志 第三巻』)33頁

- (32) 『甲斐国社記·寺記 第四巻』 54頁
- 『甲斐国社記·寺記 第四巻』58頁

33

- (34) 『新倉の民俗』 21万
- 『山梨県史資料編6 中世3上 県内記録』(山梨県、二〇〇一)22百
- 岩科小一郎『富士講の歴史』(名著出版、一九八三)24頁

36

35

- 近世Ⅲ』富士吉田市、一九九七、史料番号107) 「庚申縁年建札仕度につき願書」(富士吉田市史編さん委員会編『富士吉田市史史料編 第五巻
- 「御縁年につき配布刷り物の建札願書」(正福寺蔵

38

- (3)「御縁年につき正福寺建札下書」(正福寺蔵)
- (4) 「万延元年縁年如来寺関係雑記録」(『新倉の民俗』)
- (4)「由緒書」(『甲斐国社記・寺記 第四巻』)54頁(2)「山福書」(『甲斐国社記・寺記 第四巻』)54頁
- (42)「正福寺由緒下書」(正福寺蔵)
- 「御縁年刷り物配布につき一札」(正福寺蔵

 $\widehat{43}$

- の二十一)富士山縁年建札と女人禁制』富士吉田市教育委員会、一九七九)16頁ないのならば然るべき旨を返答された。(富士吉田市文化財審議会編『富士吉田市の文化財(そも繁華になった場所へ建札の振替の可否を寺社奉行所へ伺っており、掛役人から場所の増減が(44)「庚申建札御願扣」によると安政六年(一八五九)三月、吉田御師の惣代は先の御縁年の時より
- (45)「庚申建札御願扣」(『富士山縁年建札と女人禁制』) 58頁
- (46)「庚申建札御願扣」(『富士山縁年建札と女人禁制』) 17頁
- (47) 「庚申縁年建札記録」(『富士山縁年建札と女人禁制』) 82頁
- (4) 「庚申縁年建札記録」(『富士山縁年建札と女人禁制』)85~86頁
- 「庚申縁年建札記録」(『富士山縁年建札と女人禁制』)10頁

 $\widehat{49}$

- 号⑴) 「庚申縁年建札願方につき新倉山正福寺日記」(『富士吉田市史史料編 第五巻 近世Ⅲ』史料番(5))「庚申縁年建札願方につき新倉山正福寺日記」(『富士吉田市史史料編 第五巻 近世Ⅲ』史料番(5)
- (51) 前掲註(43
- (5)「富士山御縁年につき建札御免願書控」(『富士吉田市史史料編 第四巻 近世Ⅱ』史料番号88、
- 「正福寺境内地・文書等につき差上一札」(正福寺蔵

53

- (4)「浅野氏重判物」(正福寺蔵)

「鳥居成次判物」(正福寺蔵

55

- (5) 「富士海苔受納につき鳥居家人永江弾右衛門礼状」(正福寺蔵)
- (5)「位牌再建につき請書」(正福寺蔵)
- (8)「富士山御縁年につき浅野家位牌再建請書」(『富士吉田市史史料編 第四巻 近世Ⅱ』史料番号
- (9)「法事執行につき浅野家人書付」(正福寺蔵)
- (6)「書付・位牌一覧につき鳥居家人永江弾右衛門書状」(正福寺蔵)

79

- (61)「法事執行につき鳥居家人書付」(正福寺蔵)
- 二〇〇四)41~42頁 二〇〇四)41~42頁
- 亀鑑」、「如来寺関係雑記録」(『新倉の民俗』)21頁資料の研究-」(『同朋学園佛教文化研究所紀要』第七・八合併号、一九八六)34頁、「新倉山万(4)織田顕信・小島惠昭・蒲池勢至・渡邉信和・青木馨・小山正文「共同研究-真宗初期遺跡寺院
- (6) 「共同研究-真宗初期遺跡寺院資料の研究-」31頁
- (66) 『下吉田の民俗』 233・23頁
- (68) 『新倉の民俗』 18頁

67

『新倉の民俗』216頁

- (9) 香取秀真『日本鋳工史稿』(甲寅叢書刊行所、一九一四) 86頁
- 〔初出、『大谷女子大学紀要』 12-2、一九七八〕) 27頁(70)中村宗彦「聖徳太子の駒」(蒲池勢至編『民衆宗教史叢書32 太子信仰』雄山閣出版、一九九九
- 中村宗彦「聖徳太子の駒」276~27頁

71

- 文科大学国文科論考』34、一九九八〕)29頁(72)渡邉信和「聖徳太子の富士登山説話について」(『民衆宗教史叢書32 太子信仰』(初出、『都留
- (7) 「富士山駒嶽略縁起」(『富士吉田市史史料編 第五巻 近世皿』史料番号84
- (74) 髙橋晶子「富士山七合目如来寺太子堂の由来」(『MARUBI 富士吉田市歴史民俗博物館だ
- (75)『甲斐国志』巻35(『大日本地誌体系45甲斐国志 第二巻』)11~13頁
- (76)岡田博校訂『江戸時代参詣絵巻 富士山真景之図』(名著出版、一九八五)19~11頁

(77)「富士山道知留辺」(『富士吉田市史史料編 第五巻 近世Ⅲ』史料番号30]

78

- よる「銅黒駒」は現存しているのかどうか未詳。4頁)、妥当であろう。なお、正徳四年の江戸本(元)飯田町(東京都千代田区)の万人講にの「上町伝右衛門持」を「同じ施設」と推測しているが(「富士山七合目如来寺太子堂の由来」、新倉の民俗』24頁。髙橋晶子氏は『富士山道知留辺』に載る太兵衛の「室」と「如来寺関係雑記録」
- 室は蓬莱館の付属屋付近にあったとみられる。八月三日、如来寺では三の母に「聖徳太子富士登山法要」を執行している。かつての太子んだ。以後、同寺では毎年この日に「聖徳太子富士登山法要」を執行している。かつての太子んだ。以後、同寺ではこの像を富士山八合目(旧七合三勺)の蓬莱館まで持ち上げて法要を営業育の民俗』185頁。なお太子騎馬像は明治初年に如来寺へ降ろされた。平成二十一年(二〇〇九)
- (8)「如来寺関係雑記録」(『新倉の民俗』)21頁

論

伊勢志摩の富士信仰

堀内 眞

はじめに

どのようなものであったのか、そのあり方を改めて考えてみたい。富士山を対象とする信仰について明らかにしたい。この地に展開した富士信仰が州)にまで及ぶ現在の三重県から到着した道者(登拝者)と、彼らがもっていた州)にまでは、明在の三重県から到着した道者(登拝者)と、彼らがもっていたのよりでは、手始めに、伊勢志摩から伊賀、さらには熊野の一部(東紀)のよりなかった西国の富士信

の一二ヵ所を列記したうえで、伊賀分として、島ヶ原と霧生(ともに伊賀市) 柿(ともに松阪市)、 堀氏は前掲『三重の文化伝承』(以下『文化伝承』と略記)の中で、三重県内 同郡南伊勢町)、 (浅間講) について、 棚橋 間弓み (度会郡度会町)、切原・中津浜・相賀・道行・古和 (同郡大紀町)、 四ヵ所の調査事例を報告している。横野・上仁 布施田・迫子・檜山 以上、 志摩市 。 以 を

取り上げる。

佐藤氏は旧南勢町五ヶ所湾の奥手に位置する切原と、田曾浦の富士講を紹介しての中で、西国の富士講の研究を大きく牽引した岩科小一郎氏は『富士講の歴史』の記録などを紹介し、荻野氏は方座浦の浅間山のあり方について考察している。の記録などを紹介し、荻野氏は方座浦の浅間山のあり方について考察している。ので、江戸富士講の研究を大きく牽引した岩科小一郎氏は『富士講の歴史』の中で、西国の富士講の研究を大きく牽引した岩科小一郎氏は『富士講の歴史』の中で、西国の富士講の留士信仰について論を進める。野村氏は答志島(鳥羽市)の中で、西国の富士講との違いを述べるために、志摩答志島の富士講を紹介しての中で、西国の富士講との違いを述べるために、志摩答志島の富士講を紹介している。

カレ、 て、 これは出発した日から帰るまで続けられ、「カロカレ、カロカレ、 ほとんど漁民だから、富士へは船でいく。登山する者は出発前にミソギをし というが、十二年目ごとの申年に富士詣でをするのがきまりだった。 ここの富士講は大正九年の庚申年を最後に中絶。 ユカタを着せて葬る (大谷忠雄氏報)。 行衣も着ない。山ユカタというものを着る。 に村の広場に集まって、太鼓を叩いて念仏踊りのような群舞がおどられる。 部落の前の浜に砂を盛って富士塚をつくる。お山へ行かぬ残留組は夜間 お山もカロカレ」というような歌で舞う。 島の男が死んだときは、この 昭和三十九年に再興され お歌揚げも御文句もなく、 足もカロ 島民は た

添上郡石打村(旧月ヶ瀬村〔現奈良市〕)からの参詣を紹介している(【図2】参をおからと、また、西国からの参詣例として、伊賀と境界を接する大和国とが固定化していたこと、そこに繰り広げられた富士参りの背景をうかがい知るこが固定化していたこと、そこに繰り広げられた富士参りの背景をうかがい知るこ研究仲間から寄せられた情報に基づく記述だが、一二年ごとの申年に富士参り

のよい た。ここでは西国に展開し、 後述する富士参り歌の歌詞にもあるように、 登山口に到着する形をとり、 なおかつ海の認識を持った富士山の信仰行事につ 多くは駿河表の登山口を拠点として登頂して 道者たちは地理的にアクセス

史料にみる大宮の道者場

て考えてみたい

めた れらのうち伊勢(志摩を含む)・伊賀からの道者に関する記述を【表1】に整理し、 在の三重県域を含む西国からの道者の到着について記録している(①-④)。こ がある。昭和六年(一九三一)に大宮の浅間神社 ことを ついでこの表に基づき【図1】を作成した。なお、大宮では、富士山の得意先の 伝承以前の富士信仰の広がりを物語る史料に、大宮(富士宮市) 『浅間文書纂』 「道者場」と称していたようである。 に収載されている「道者付帳」のうち、少なくとも四冊が現 (富士山本宮浅間大社)がまと 0) 「道者付帳

拠点といえよう。 については、 町しん大夫」「しん大夫」、桑名市太夫ほか、実は桑名郡)、赤水(「あこう川」「あ 者を「諸国之導者接待之帳」に取りまとめていて、こうした帳面 に御炊坊という道者坊が存在し、これを営む八木縫右衛門は、大宮へ到着した道 こう川七郎左衛門尉殿」、 Ŧi. 炊坊道者帳写」が最も古い。「大宮導者坊記聞」と題する文書によれば、 |冊所持していたという。①は「伊勢之国之分」(志摩を含む)として、「ようた」 ①~④のうちでは、①永正九年(一五一二)の「古帳」を写したと註記する .田)をはじめとしてのベニ七ヵ所を記載するが、朝明郡の新太夫(「せんた それぞれ二回ずつ書き上げている。これらは、 四日市市赤水町)、 宇治 (「うぢの」「宇治い」、 いずれも富士信仰の (道者付帳) 伊勢市) 中宿町 御 を

それを示す②「導者付帳」は、慶長十七年(一六一二)より元和九年(一六二三) 世末から近世初頭にかけて、 富士山は一 大参詣ブームを引き起こしている。

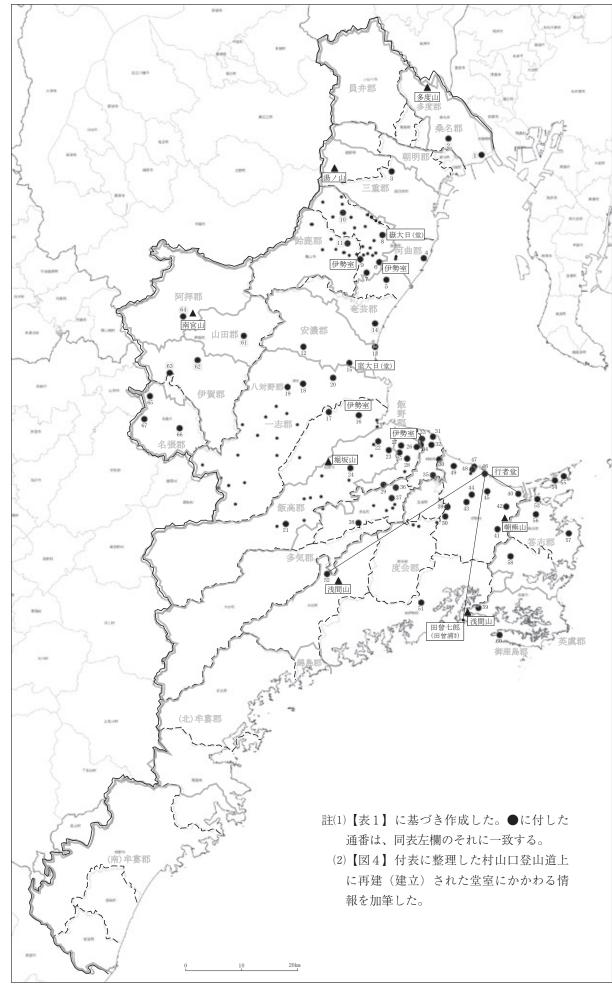
> 大淀・浜田 村は空っぽに近い状態になったものと推測される。 認められる。 までを中勢、 の男たちがやって来てしまえば、年寄や女性・子どもたちが残っているだけで、 五 長十八年の九七人というのは圧倒的な数である。立利村の寛延年間(一七四八~ のは飯野郡の立利で、 田 のうち元和六年は庚申縁年にあたる。伊勢は、河曲・鈴鹿郡以北を北勢、 に及ぶ一二年間の道者の到着を記録する。これをもとに【表2】を作成した。こ ・河崎に加え、二見からの富士参りが盛んであった。継続してやって来ている 頃における家数は四三というから、(6) (多気郡) と三所に限られ、 北勢は奄芸郡の稲生村が唯一で、中勢まで下っても、立利に対している。 度会郡を南勢と三区分するが、同帳の記載には、 慶長十九年と翌元和元年を除いて大宮へ到着している。 中心は南勢の度会郡である。 枝郷の斎田を合わせたとしても、 地域による偏り (飯野郡)、 宇治と山 慶

詣者は、 うよりは、 考えられる。 間神社はこの地に定着した富士信仰の名残といえよう。 と八人の二組都合一五人が来ており、慶長十七年の山田の先達一人はその下見と に限って富士にやって来ていたことがわかる。宇治から二七人、山田からは七人 元和元年の到着は、まったく記録されていない。宇治と山田 伊勢御師の系譜を引く者たちと考えられる。 むしろ富士の庚申信仰に基づいた参詣であろう。 紀州熊野からも四人の到着が確認されるが、これは通常の登拝とい Щ 田町の一 宇治や山田から からは、 角、 奥折町 庚申 の浅 -縁年 0

なお、 夫袈裟下の二人も到着している。この年に限っては、 和四年には、 志摩については、鳥羽・加茂・浦 浦村からの到着は、 鳥羽から先立三郎大夫に引率された五〇人が到着した。 継続的に認められる。 (以上、鳥羽市) からの道者が記される。 加茂からも参詣があった。 元

年 山小屋・ 図 (一六七六)の「富士本宮導者帳」に見ていこう。鈴鹿郡に関して、 [4】の付表に整理したように、寛文年間(一六六一~七三)には、 · 室 (石室) が相次いで整備されている。 これに続く状況を、 ③延宝四 村山

0



【図1】大宮道者坊道者の出身地

*国土地理院ウェブサイト(https://www.gsi.go.jp/top.html)掲載の「地理院タイル」(白地図)に加筆した。

この伊藤氏は、 (市) :藤筑前正が大宮道者坊のひとつ清長坊に宛てた書状が残るが(⑤、年未詳申年)、(8) (鈴鹿市) と峯 道の五合・九合・頂上嶽大日の三地点の堂室建造に関わっていた鈴鹿郡の者た 「拙者支配之村々」として小社村を含む三八ヵ村を書き上げている。 七人の講親の姓名と五六人が参加した旨を記録している。 (一六八九) の野辺宮太夫抱の伊東六太夫に連なる者だろう。 寛文五年に九合所在の伊勢室再建に名を留める鈴鹿郡平田村 (峯川崎=川崎村、 の「富士大宮本宮導者帳」には、 亀山市) からの到着を記す。 国府村 伊藤筑前正は、 (鈴鹿市) 峯川崎村の大先達 降って、 のみが記さ 村山口登 先の書状 **④**元禄 鈴鈴

中勢の安濃・河曲両郡の実態は判然としない。

ち

の動向が注目される。

の諸村との結びつきが強かったのだろう。 一志郡内とおぼしき村々に関する③の記述については、慎重な検討が必要となっま郡内とおぼしき村々に関する③の記述については、慎重な検討が必要となっまでは、「表土」では「はたの、郡岡村」を一志郡岡村、すなわち現在の津市白山町の諸村との結びつきが強かったのだろう。

雲出川の中流域= 称で、 散見され るいは滝野村が注目される。川俣谷とは松阪市飯高町に属す櫛田川の上流域の総 で信仰域が広がったことが確認される。一志郡についても同様の傾向が認められ 滝野もこれに属す。 (元禄二年) 現在の津市白山町、 に登場する飯高郡内の地名としては、 松坂城下 (松阪市) とその周辺部から、 同川上流域=現在の津市美杉町域の地名が 「川役谷」 内陸部深くま (川俣谷) あ

される。前者は宮川の最上流部の支流大内山川に沿った山間地、後者は熊野灘に度会郡では、③帳(延宝四年)に野尻村(野後村)・押淵といった地名が確認

十七世紀の半ばころということになろうか。の特徴である。ともに道中歌を伝える土路や西条に富士の信仰が広まったのは、れも伊勢市)といった宮川河口部の地名が見られるようになるのも③帳・④帳沿岸部に信仰圏が拡大していったものと考えられよう。大湊・土路・西条(いず面する五ヶ所湾の西岸に位置する。多気郡あるいは度会郡北部を経由して熊野灘面する五ヶ所湾の西岸に位置する。多気郡あるいは度会郡北部を経由して熊野灘

鈴鹿 御座村の名が伝わった先志摩半島付近かと思われるが、 した同じ 郡ぐん 伊勢国の最南端で、 の記載があることから、 を うち河曲・鈴鹿・飯高の三郡を除く一○郡の名が見え、春長坊が安濃郡など四郡、ぁのぐん 度郡」は多度山の南麓すなわち桑名郡北部に比定できよう。 御炊坊分として「御座嶋郡」、 もしれない。⑥帳には、このほか春長坊分として伊勢国の「多度郡」「錦嶋郡」、 鎖是氏から春長坊に移っていたらしい。権益として売買の対象となっていたの に権益を保持していた。⑥帳とともに春長坊に伝来した①帳(元禄二年)には、 御炊坊が多気郡など三郡、 に関わるデータについても【表1】に加えておいた。伊勢国を構成する一三 を営む宮崎氏のもとに伝わっていた(⑥年未詳「(道者国分并郡分控帳)」)。これ 士参詣の道者を対象とする各坊の権益について記録したとみられる帳面が春長坊 これを構成する四郡のうち、 ところで、 3 「春長分」とする記述があった可能性は残る。 江戸時代には紀伊国牟婁郡に属した。伊勢・志摩・紀伊三ヵ国の境界に位 ・飯高両郡の道者が載る。 ・④両帳に記録される志摩国内の地名は少ない。また、伊賀国については、 .浦を、 大宮に到着する道者は国および郡ごとに把握されていたらしい。 錦嶋郡」 紀伊国と境を接する錦浦が想起される。 と表記したものであろう。 元禄二年以前に両郡にかかわる権益は、 内記 伊賀郡を除く、 内記分として「志州亀嶋郡」 ⑥帳は冒頭を欠いていたというから、 (鎖是氏) が一志郡、 山田・阿拝・名張三 しかし、 「御座島郡」 頼母坊が桑名・三重の両郡 同半島は志摩国英虞郡 ④帳に多気・一 「錦嶋郡」については、 がそれぞれ載る。 中世には志摩国英虞 は 一郡の地名が載る。 御炊坊なら 御座岬 同帳に両郡 志両郡 がに

帰属しており、なお検討の余地を残す。「亀嶋郡」は、伊勢湾口に浮かぶ神島か。

江戸時代には、

志州答志郡に属した。

先述した「八対野郡」を含めこうしたいわば非公式な郡名を用いた理由が問題となろう。後述するように、明治三年(一八七○)に「表口本宮浅間社人宮崎芳雄」となろう。後述するように、明治三年(一八七○)に「表口本宮浅間社人宮崎芳雄」となろう。後述するように、明治三年(一八七○)に「表口本宮浅間社人宮崎芳雄」とある。(吾長坊)がまとめた⑥帳と同趣旨の帳簿の表題には⑦「国分并郡分控帳」とある。(第)けられた郡名と考える。

①帳(元禄二年)以降、大宮に到着した道者に関する記録は残されていない。①帳(元禄二年)以降、大宮に到着した道者に関する記録は残されていない。

は、 共通する。下村在住の西川氏五名による奉納と理解されよう。 納している。 寛保元年 灯籠脚部にも治兵衛ほか二名の西川氏の姓名が刻まれている。 田市上吉田)の下浅間(現北口本宮冨士浅間神社)の参道両側に石灯籠一対を奉 ところで、飯高郡には、江戸の「村上光清同行」に連なる富士講中が存在した。 御師の大小沢坊で、 (一七四一) 十一月、下村 参道西側に立つ灯籠の脚部に治兵衛ほか都合三名の西川氏、 合わせてその名を刻んでいる。 (松阪市)の西川治兵衛らが、吉田 奉納を仲介したの 治兵衛のみ双方に (富士吉 東側の

吉講の系譜を引く講中が組織化されていった。 後述するように、 とされるが、 食行身禄である。 戸富士講において光清の村上派と双璧をなす身禄派の「元祖」と仰がれるの 身禄自身も一志郡川上村 身禄の死後、 その師匠にあたる月行割忡 飯野郡西黒部村 (旧美杉村、 (松阪市) (森太郎吉) 現松阪市) には、 は伊勢松坂の出身 で出生している。 江戸富士講の山

文

論

けたことが記録に残る。

「吉田改所」(登山人改役所)で登山改を受出河口湖町河口)経由で吉田に至り、「吉田改所」(登山人改役所)で登山改を受工八名は、天保十二年(一八四一)に北口(吉田口)から登拝している。川口(富工人名は、天保十二年(一八四一)に北口(吉田口)から登拝している。川口(富工人名は、海田川の北岸に所在する飯野郡深津村(現松阪市飯南町深野)の一行また、櫛田川の北岸に所在する飯野郡深津村(現松阪市飯南町深野)の一行また、櫛田川の北岸に所在する飯野郡深津村(現松阪市飯南町深野)の一行

富士講(浅間講)と講行専

二十五日条に「京師」の行事として「富士垢離」の項を立てている(巻三下)。 毎日山麓の修行場で水垢離をとり、 の山開き前の陰暦五月下旬 して実施するところもあって、一様ではない 開きの準備をした。富士講が主催して行うところもあれば、 説されるように、東海地方や近畿地方では、二十五日ころから垢離を開始して山説されるように、東海地方や近畿地方では、二十五日ころから垢離を開始して山 きにともなう富士垢離の開始を、 は駿河不尽郡にあり、 日より六月二日に至る、山は駿河・伊豆・遠江・甲斐の国に幡根 ゴリ(垢離)・富士ゴモリ(籠)を行った。『諸国図会年中行事大成』 富士の山開きは六月一日である。 浅間神社又富士権現と号す」と書き起こす。ここでは山 (一説に二五日から六月二日まで)、富士講の行者が 五月二十五日と説明する。富士垢離は、「富士 心身を浄めて富士権現を遙拝すること」と解 西国から富士参りする道者は、 地域の祭礼の一 〔蟠根〕す、 事前に富 は、 部と 五月 社 士

い出し、 事 阪市与原ほかの浅間祭 ある。『三重県の祭り・行事』 に、 実態について、堀氏が記録した『文化伝承』 このような富士垢離をともなう富士講行事が展開する西国の一 ただし、 (富士講)、 行事の内容を概観してみたい。以下、とくに断らない限りは同書に拠った。 北勢から南勢、 同書には北勢の事例は少ないので、 志摩市阿児町立神の浅間祭 (堀坂山の浅間まつり)、 志摩、 註 伊賀、 (2) ④書、 紀州 (浅間さん)、 (三重県分を「東紀州」と括る) (註 (1) 以 下 他書に載る報告を援用する必要が 伊勢市東豊浜町土路の富士講 『祭り行事』と略記) ①書 尾鷲市三木里町の御 の中から事例を拾 角、 三重県内 は、 Ш 0) 松 順

外洋の熊野灘に面した南伊勢町 している。なお、 志郡より南方、 「南勢町・ 『査』と略記)、 (お山まつり) について報告している。三重県教育委員会では、これに先立ち、 南島町山漁村習俗調査報告書』 その中で富士信仰に即した祭礼行事や浅間祭歌についても報告 東紀州の三木里に及ぶ浅間行事の分布が示されており、 『祭り行事』には「浅間行事」 (旧南勢・ を刊行し 南島両町) 図が挿入されている。これには、 註 の山村・漁村調査を行 2 ①書、 以 下 多くの 『習俗

*

行事が南勢に伝わっていることが見て取れる。

(浅間講)

の日、 上げる。このうち伊勢国内の(5) 社浅間神社が編纂した叢書 名市多度町御衣野) 志に曰く、 章中に「異称富士」の項を設けている。三重県分としては、(31)「伊賀の小富士」、 るさと富士」と呼称される)の存在が注目される。 北勢に富士講の調査報告がほとんど見られない中で、「異称富士」(現在では 「伊賀の富士山」、 此の地に御遊息ましく~て此名ありと云」と記すから、 富士山、 按、 の北方に聳える多度山に該当しよう。 溝野村にあり。 <u>42</u> [富士の研究] (42)については、「伊勢国桑名郡にあり。三国地 「伊勢の富士」、(43)「伊賀の富士」 是日本武尊駿州富士野にて夷を平げ凱旋 の 一 # 『富士の歴史』 『浅間文書纂』同様に官幣大 これは溝野村 は、 の四山を取り 「憧憬」 ふ **(桑** 0)

のような山名は記述されていない。有するものとは言いがたい。現行の国土地理院の二・五万分の一地形図には、こ市関町)といった称が知られるが、ともに近年に付された通称で、歴史的背景をこのほか「菰野富士」(湯ノ山、三重郡菰野町)や「関富士」(旧鈴鹿郡、亀山

して山村(旧朝明郡、四日市市)がある。集落北部に氏神富士権現が鎮座するが、四方の眺望一点の障りな」い地に鎮座したという。朝明川の北岸、朝日丘陵に接される。旧桑名郡上野村(桑名市)の富士権現は、員弁川の北岸、「地面最も高く、桑名・員弁・朝明の三郡が接する付近には、「富士権現」を称する神社が散見

わずかにその片鱗を伝えている。 朝明郡、同市)にも、富士権現が祀られる。北勢の富士信仰は、このような形で朝明郡、同市)にも、富士権現が祀られる。北勢の富士信仰は、このような形で同社は式内社の布自神社であるという。南岸の台地の一角に位置する大矢知村(旧

には、 する。 れた。 権現の幟旗を持って出発する。 当番である。後者は各小字が順繰りに務める。オハケ番はオハケの大竹と堀坂大 伊勢寺・勢津(ともに旧飯高郡、いせでら せいづ ハケ竹を携え、 大権現の遙拝所であることを示す石碑が立つ。ここに幟を立てると、そのままオ イ けて執行されてきた祭礼も メートルの高峰で、 た 『祭り行事』による)。富士山に擬えた行場といえよう。 「堀坂山の浅間祭」が著名である。 「堀坂山の浅間祭」が著名である。 中勢では、 (御松明)を焚いて豊作を祈る。行事を先導する修験 要所ごとに大日、 伊勢寺で祭事に臨むのは、一〇ある小字の代表者と、オハケ番という祭礼 旧三ヵ村が、それぞれが担ぎ上げた根付きのオハケ竹を山頂に立て、 富士信仰が盛んである。 山頂目指して急峻な山道を辿っていく。 「伊勢富士」の称がある。 山の神、役行者など、種々の神仏が祀られている (現在では六月の最終日曜日)、「浅間さん」 堀坂峠には、 同市) 同山は、 伊勢平野の西方に聳える堀坂山を舞台にし の旧三ヵ村の村境にある標高七五七・四 石造の大鳥居とともに、 六月三十日から七月一日の朝に 与原 (旧一志郡、 堀坂峠から山頂への途上 (山伏)は伊勢寺に居住 松阪市) 同所が堀坂 と通 (以上、 および オタ 称さ

国宇陀郡へ通じるのが伊勢本街道 総員が大峰山に詣でた。当地では、 Щ には富士講があって、 峰山に年一 をした。これとは別に山上講 櫛田川の上流部に位置する横野 回それぞれ登山した。ここから櫛田川の支流仁柿川沿いに遡り、 講中が積立をし、 (大峰講) (旧飯高郡、 富士講と山上講が併存している (初瀬本街道) である。 夏の山開きの後、 があり、 松阪市飯南町) こちらは旧盆の八月十五 先達が先導して富士登 街道上の上仁柿 では、 富士山と大 同 日

後村のノジリサン(野後さん=滝原宮、度会郡大紀町滝原)に参詣する滝原神宮|櫛田川本流を遡上した宮前(旧飯高郡、松阪市飯高町)にあっては、度会郡野

させたのは、八郎兵衛の後裔である可能性が高い。西村八郎兵衛がいたことが知られている(【図4】付表)。滝原神宮講を組織発展講があった。野尻村(野後村)には村山口登山道の行者堂の再建に関わった先達

五月二十八日には浅間日待を行った。間大菩薩を祀った。大紀町の間弓(旧大内山村)では組ごとに浅間さんを祀り、各戸より一人ずつが当番の家に集まって宴を催し、御幣竹を山上に立てて富士浅各戸よりの浅間講は、五月二十八日の総垢離に宮川で沐浴したのち日待をした。個氏は度会郡の七地点について富士講にかかわる事象を書き留めている。棚橋

三本伐り出して幣束を付け、一番竹・二番竹・三番竹として浅間社まで担ぎ上げ 来の石像を安置している。 とも)がある。平生から掛金をして富士山下の浅間神社 間さん)という。 休みとしてセンゲンサン (浅間山) に登って祭事を行う。これを「センゲサン」 (浅 講員がセンゲンサン(浅間山)に登頂し、般若心経以下を唱えるオツトメ りの道中歌に合わせて四本の竪杵を使って餅搗きを行う。午後四時ころからは、 選ばれる。二十八日の夜中から翌二十九日の午後にかけて、当屋の庭先で富士参 東方の切原から順次見ていこう。 よりも、 道行の浅間講では、 小山町)に参詣する。共有山で最も高い山を「浅間山」と呼んで、 る。当地の事例については、次章で再説する。中津浜浦では、五月二十八日を総 から精進を行い、 古和浦以下の五ヵ所は、いずれも熊野灘に面し、 を催行する。 、地域の祭礼として、盛大に行われている。五月二十八日に執行される 浜石を祀所 富士登山 相賀浦には、地内の一〇軒ほどの家が構成する富士講 別火して垢離をとる。 五月二十八日に遙拝所に集まって海水で身体を清め、 (浅間祠) 毎年五月二十八日には、 (浅間参り) は隔年で行い、 村の中に浅間講が編成され、当屋は同月十五日 に供える。古和浦においては、 講員の中からショウジンド 現在は南伊勢町に属している。 山頂まで登って祭事を行う。 四人の若者を代参に立て (須走浅間神社、 講の行事という 山頂に大日如 (精進人) 駿東郡 (浅間講 大竹を 御勤 「浅 が

黄・赤・青の五色の幣を吊下げる。形の美しさ、数の多さが特徴とされる。参加するが、講員が中心となって進められる。梵天には大幣と小幣があり、紫・緑・間さん」は、六月十四日の「祇園さん」とともに、当地を代表する祭で、各戸が

用いていた。 る。 呂の傍らには小川が流れ、その水を焚火で熱した石にかけて生じる蒸気を垢離に 下浅間には、 で、「サンゲーサンゲ 下浅間に参集して垢離をとった。それから行列を整え浅間山に登る。 各家の戸主は竹の梵天と神酒・洗米・大根の酢漬 に編入されている。同地では毎年交替で二名の「浅間番」を決め、 (タケさんの日) に先立ち、 志摩分についても見てみよう。 各家で大きな竹を一本切ってきて御幣をたくさん吊り下げると、祭日の早朝、 かつては石風呂があった。 六根清浄」と唱え、山上の浅間祠でトキの声を三度あげる。 前日二十七日にムラの浅間山の登山道の草刈りをす 檜山 (旧度会郡、 現在でもその台石が残されている。 (赤漬)を持ち、 旧磯部町)は、 麓の遙拝所 五月二十八日 現在は志摩市 この途中 石風

牛の神とされていたため、祭日には牛にも水浴させた。姿となって幟を地内の浅間山に持ち上げ、神酒を供えた。当地では、浅間さんは道子(旧浜島町、志摩市)では、五月二十八日に水垢離して身体を清め、山伏

た柱を区の境ごとに建てた。山上講もあり、大峰山に講員全体で参詣した。霧生士講を開いている。二〇年に一度、全員で富士参りを行う。下向後には、生木を削っ上げている。島ヶ原では、一年に二度、米ドキと麦ドキに収穫物を持ち寄って富最後に、伊賀である。堀氏は、島ヶ原と霧生(ともに伊賀市)の富士講を取り

十二月十五日に集合して、 Ш \Box 旧白 Щ 町 津市) 食い放題に餅を食った。 に通じる要衝に位置する。 フジ講 (浅間講) の講中は

び

中勢、

堀坂山以北に伝承される富士参りの歌は、これら二つに限られ

会郡にあることがほぼ明らかとなった。 前章までの検討により、 伊勢では富士講 (浅間講) に基づく祭行事と富士参り=富士登山が盛んだった。 その中心が、 中勢の一志・飯高・飯野の三郡と南勢の度

Ξ 富士講 浅間講行事と富士参りの祭歌

と略記)をはじめとする諸書より、 礼にとどまらず、 した芸能色豊かな伊勢志摩における富士信仰のあり方を立体的に示してみたい。 「浅間祭歌」として計二六編を集成した。これに基づき論を進めたい 三重県教育委員会が編纂した『三重県の民謡』(註 本章ではさらに踏み込んで、 各地に伝えられた「富士参り歌」(道中歌)や「浅間祭歌」は、地元での祭 富士参りの過程においても踊りをともなって奉納された。こう 行事の詳細や富士参りの様子について見ていきた [付編1]に伊勢志摩に伝わる「富士参り歌 (2) ②書、 以 下 『民謡』

採集されている その南側に平尾 三重郡の赤水 (同市) (付編1-No.1、 (四日市市) は が所在する。 、第一章で見たように大宮の古い道者場の一つで、 以下「付①」と略記する)。 同所では「吉田通れば」の道中歌の断片が

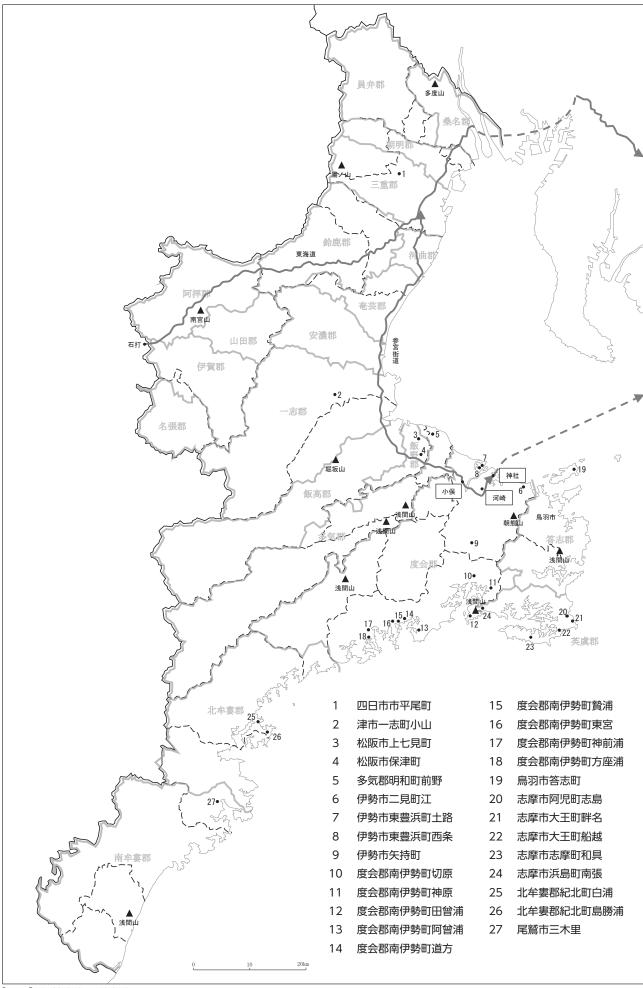
峰の先達が、 を祈って踊ったもの」と註記する。「はつ山上まいり」(初山上参り) 伝承されるが 小おりま 「身内の者が富士山や大峰山に登っているとき留守番の者たちが登山の無事 村山大鏡坊を宿所として登拝している(表3)。当地には 大峰参りの留守番の者たちが歌ったものであることが知られる。 (津市一志町) 富士の先達をも兼務するような形態だったと想定される。北勢およ (付②)、道中の光景を歌い継いでいく形式はとっていない。 『民謡 からは、寛文四年(一六六四)に先達阿弥陀坊下の一六人 「御山待の歌」 の歌詞から 当地では大 が

> ている。 は、 富士講があって、 伝わっている。先達が音頭を取り、 さんの宿=トウヤ 大木の傍などに碑や石像を建てて祀っている」と、中勢地域の富士信仰をまとめ そこに浅間さんを祀っている(『県史』)。なお、『県史』は「伊勢平野の各地から と略記)。旧三雲町上ノ庄(松阪市)では、住宅地の一角にある樹木に幣竹を立てて、 めた写真が『三重県史』〔別編民俗〕に掲載されている(註 る 気郡明和町) 中勢の飯野郡に属した上七見町や保津町の旅客なななりょう。ほうづちょう 「富士山を遠くに拝むことができた。小高い所も少ないので、寺社の境内や森 (付3)~(5)。 には、 上七見町の浅間祭は、ノアガリ(野上り)後に行われる。 数珠を懸けた講員の一団が幣竹を持って祭場に向かう光景を収 (頭屋) 「浅間さん」の行事が存続し、 の座敷に設えた祭壇で唱和する歌と、 講中が続けて歌う (『民謡』)。下七見町にも (ともに松阪市)、 そこで富士参りの歌が歌わ (2)⑤書、以下『県史』 あるいは前野 道中歌の二つ 浅間 (多 n

信仰地 講の山吉講に再編され、対岸の東黒部 郎兵衛) ら江戸富士講の拠点となっていった。 田川河口に位置する西黒部 北に隣接する。 を講屋勘兵衛ほか四名とともに再建している(【図4】付表)。立利と大宮田は南 (松阪市)の先達綾笠太郎五郎は、寛文七年(一六六七)に村山口三合の伊 上・下七見町に隣り合う立利 (道者場)を形成し、 が、 前野近傍の大淀 大宮田の太郎五郎は、立利の四郎兵衛の系譜を引くのだろう。 (旧飯野郡、 富士へ檀那 (明和町)には弥右衛門先達が、古くからそれぞれ (松阪市立田町) (旧多気郡、 松阪市) (道者)を引率していた。また、 には、 は、 松阪市)などを取り込みなが 後述するように、 綾笠先達 (彦左衛門、 江戸 兀

から ふし 前野の富士講が「浅間さん」に歌う「カーアルカーレのうた」 「権現松」(富士権現の松)まで練歌で移動し、松の周囲を踊り(富士踊カ) と 「踊りのふし」 の二通りの曲が伝承される (付⑤)。 には、 若屋 「ねり歌 頭屋カ

0)



【図2】伊勢志摩の道中歌

いる(『民謡』)。中の安全と豊作を祈念する道中歌では、府中(静岡市)から富士川までを歌って中の安全と豊作を祈念する道中歌では、府中(静岡市)から富士川までを歌っての節で歌い踊った(輪踊)。歌と踊りを済ませて、祓川へ入って垢離を取る。村

ている。 行った。土路や西条、二見町 どでも富士参りが盛んで、近代に入ると、参詣する年(干支)を固定して代参を に行った者も 止めたという。 行たもんこず」の伝承だけが残されている。 市)へ通じる航路が発達していた。 度会郡に属した有滝 (志摩市) では、 (二重遭難により) 戻らなかったことから、 かつて東豊浜町の土路や西条、あるいは大湊 丑年の参詣が多かった。こうした慣習は、 (伊勢市)は外城田川 (同市)方面では、申年とした。 同地には、かつて富士講があったが、「(富士へ) 富士参りに行った者が帰らず、 の河口に近く、 富士山への信心を取り 吉田湊 (以上、伊勢市) 小ぱた 俣た 今日もなお存続し (同市) や志 (愛知県豊橋 探し な

おまん茶屋まで見送った。 た。ここでは、 は浅間講という。 催行してきた。旧暦や新暦の五月二十八日に講を開催する。「浅間さん」、あるい 小俣では、 女性や子どもたちは地内の明野まで、 (神社港) ジゲ まで、 富士講(登山者)を歌と踊りで見送っていた。船立するときは、 富士参りをするのは青年で、登山を済ませて一人前とみなされ (地下 = 集落) ごとに小祠を祀り、一定の干支年に富士登山を 参宮街道を徒歩で行くときには、 若連中・中老たちは明星 小俣地内の新出にあって (明和町) 0

それぞれなる道中歌が伝えられている 歌う (付⑦)。二見の江 で輪踊を繰り広げる わせた行事(御山待)にのみ歌われるもので、通常の祭行事に歌われることはない。 (「蓬莱山」と呼ぶ) 土路では、 富士講が登山している間に、 の周囲で、 (後述)。その際、 (伊勢市) には全二六番から、志島には全二七番から、 留守番の祖母や母親たちが歌に合わせて普段着 全二八番からなる「道行唄」 (付 ⑥· 地内の浅間さんに臨時に築造した小山 <u>20</u> これらの道中歌は登山に合 (道中歌) を

祀った(『文化伝承』)。
一人ずつが当番の家に集まって飲食し、浅間山頂には御幣竹を立てて浅間さんを五月二十八日の浅間総垢離には、宮川で垢離を取ってから富士講を開いた。各戸五月二十八日の浅間総垢離には、宮川で垢離を取ってから富士講を開いた。各戸番がが伝えられている(付⑨)。その北西方の棚橋(度会町)には、浅間山があって、

浅間さんが祀られ、五月二十八日に日待が行われた(『文化伝承』)。といった高山を対象とする祭がある。同町大内山の間弓には、クミ(組)ごとにこのほか、大紀町滝原の浅間山(七三三・五メートル)や、同町阿曾の浅間山

を註記しない記述は、現地調査の成果に基づくものである。以下、旧度会郡に伝承される行事について、それぞれの概要を記述する。典拠

人の道者が大宮春長坊に到着したとの記事で始まる(【表1】参照)。は、五月二十七日に孫右衛門に導かれ、大湊・土路村・西条の三所から都合四四【土路富士講】第一章で引いた元禄二年(一六八九)の④「富士大宮本宮導者帳」

記述している。 月二十三日の講行事に加え、 事』は、 壬申)、平成十六年(二〇〇四・甲申)と申年に富士参りを行ってきた。 んとも) に数度は富士山を望むことができるという。海岸に近い松林に浅間さん 土路 (伊勢市東豊浜町) は、 「富士講」の名のもとに取り上げている。例年五月十五日の宮飾り、 の小祠を祀る。現在でも富士講が維持され、近くは平成四年(一 申年の富士登山に付随する女性たちの行事につい 宮川の河口に近い漁村で、そこから東方遙かに年 『祭り行 九九二: (大日さ 同

世話をし、最終年に富士参りを行ってきた。する。このような男子のいる家の一軒が講元(宿)を務めて一二年間にわたって新たな該当者のいる家に出向いて、「講を結んでくれ」(加入してくれ)とお願い解散し、次の二歳から一四歳までの年少者に引き継ぐ形をとっている。世話人は、富士講は一五歳から二七歳までの男子によって構成され、富士参りを終えると

を掻く。 由此、 切り吉田湊へ到着する。そこから東海道を東に、二川、 月三十日、登山の一行は、まず蓬莱山の上で「蓬莱山由来」と祝詞を唱え、 四台分の赤土を運び込んで小山を築き、完成後には僧侶が開山法要を行った。 を道中歌を歌いながら輪になって踊る。 に到着する。留守宅を預かる祖母や母親たちは浅間さんに集合し、蓬莱山の周り で講宿(その年は区長が講宿を務め、町民会館を当てた)の前で「ありがたやナー」 日に蓬莱山を築造した。浅間さんの境内に移植した黒松を芯に据え、軽トラック 平成十六年の参加者は三五名で、そのうちの四名は五○歳前後の世話人であっ 富士スバルライン経由で、吉田口を登頂した。登山の一 土路から両宮に詣でてタケ 蒲原、 岡部と過ぎて、駿河の富士浅間を参拝する。丸子、駿河府中、江尻、 山内の御室(室大日)を通り、八丈(八葉=頂上のこと)で御来光を拝し、 (ササオドリ・笹踊)を行ってから出発した。夕方には一行が富士山 そして富士川を越え、岩本、大宮 (朝熊山) に登る。富士山を遙拝し、 道中歌は富士参詣の道すがらを歌ってい (本宮浅間大社) 新居、見付、 週間前、 へ到着して垢離 金谷、 伊勢湾を横 七月二十四 清水、 島田、 次 七



八丈巡り

(御鉢廻り)、砂降り

下山

ののち、

帰り着くまでの道中を全二八番

伊勢市東豊浜町土路

でも富士参りに行ったという。 でも富士山に出かけ、 帰省したというが、無事に帰り着くまでは て途中で登山を断念し、 元が一体化する。この年は、台風の接近によっ 女たちが歌い踊ることによって、 孫や息子が下山する翌朝まで踊り明かす。 の歌詞に乗せて踊り抜いていく。女性たちは、 「蓬莱山」を残しておいた。 その一週間前 お台場に廻ってから 同じ日、 富士山と地 には西条 二見町 彼

世 話 人の父親たちも、 昭 和 \equiv 十 年

る。

て踊ったという。下山後には行楽を楽しんだ。 浅間神社では、 線から御殿場線に乗り継いで、 ら直接登山道に踏み出したか、馬返までの登山バスを利用したかは定かでない がなかったので、吉田口登山道を登り上げた。参宮線で名古屋へ向かい、 (一九五六・丙申) に富士参りをしたが、当時は有料道路 笹踊を踊った。 路線バスで吉田へ向かった。北口本宮浅間神社か 次いで五合目、 さらには頂上でも噴火口に向かっ (富士スバルライン) 東海道

浅間祭 勢町誌』 時記 れる浅間祭について、それぞれ記述している。 浜浦 に、 のは、平成十七年(二〇〇五)のことである。その南勢町は、昭和三十年(一九五五) 【神原の浅間さん】南勢町が西方に隣接する南島町と合併して南伊勢町となった 五ヶ所町と宿田曾 (以上、五ヶ所)・押淵 の項では、 (宿田曾)、六月二十八日に神津佐・泉 は、 「神祠」として唯一、船越(五ヶ所)の「浅間」を掲げ、 初浅間(一月二十八日、 ・神原・南海・穂原の四ヵ村が合併して成立している。 (穂原)・礫浦 宿浦) (南海)の浅間祭、 以上、 と、 五月二十八日の切原 神原)・ 押淵などで催行さ 五月末日の田 「南勢町 曾浦 中 津

ŋ う。 時の声を三度発した(『文化伝承』)。かつては旧神原村を構成していた檜山だが 竹の梵天とともに、神酒・洗米などを持って浅間山に登山する。 南島町成立時には、これに加わらず、 は 檜山はこうした旧神原村の山間部に位置する。 「タケさんの日」と呼び、 その山頂には祠があり、 かつてはそこに石風呂があった。この石風呂が垢離に用いられた。 大日如来の石像を安置している。毎年六月二十八日 祭日である。村落の中央部に下浅間として拝所があ 現在は志摩市に属している 地内の一番高い山を浅間山 の祠の前で、

る。 した木の葉に赤飯を配って回る。 神津佐川の下流に神原の中心、 浅間さんは、六月二十八日に行う。大竹を切ってきて、集落中央の橋に立て 鉦を合図に住民が浅間山の下に集まると、 その後、 神津佐がある。 太鼓を叩いて浅間山に登り、 役員は銘々が取り皿代わりに持参 四〇戸ほどの家々が講を構成 大竹を立

ているから、「やっと登った」先の「浅間神社」は、須走口頂上の久須志神社のた登山を歌い継ぐ形式の「富士登山道中歌」が伝承されている(付⑪)。「神社かた登山を歌い継ぐ形式の「富士登山道中歌」が伝承されている(付⑪)。「神社かた登山を歌い継ぐ形式の「富士登山道中歌」が伝承されている(付⑪)。「神社かた登山を歌い継ぐ形式の「富士登山道中歌」が伝承されている(付⑪)。「神社かた登山を歌い継ぐ形式の「富士登山道中歌」が伝承されている(付⑪)。「神社かた登山を歌い継ぐ形式の「富士登山道中歌」が伝承されている(付⑪)。「神社かた登山を歌い継ぐ形式の「富士登山道中歌」が伝承されている(付⑪)。「神社かた登山を歌い継ぐ形式の「富士登山道中歌」が伝承されている(付⑪)。須走口を拠点にしているから、「やっと登った」先の「浅間神社」は、須走口頂上の久須志神社のた登山を歌い継ぐ形式の「大田神社」は、須走口頂上の久須志神社のた登山を歌いという(「南勢町誌」)。須走口を拠点にしているから、「やっと登った」をいる。

の過程で歌われる歌については明らかでない。てから浅間山に登る行事が伝わっていたが、途絶しており(『南勢町誌』)、行事なお、神津佐に隣接する泉にも、「こんだぶち」で「ヨイヨイ」(水垢離)をし

ことだろう。

「宿田曾の浅間さん」宿浦と田曾浦を合わせて宿田曾という。両所とも小型・中国の壁船によるカツオ漁が盛んで、田曾浦には「日本一かつお村」のモニュメントと記念碑が立つ。カツオの水揚日本一を誇り、昭和バブルの絶頂期には、富士山原奥宮に尾頭付のカツオを奉納する人が何人かいた。ブルドーザーでの運搬が可能になってからのことである。同地の運輸関係者は、平成十三年(二〇〇一)で、田曾には、富士山に登頂した。九人分の「家内安全」「海上安全」の祈祷を奥宮に依頼している。

行事がある。 名により造立された。水原秋桜子の「俄かにもふじのきりはれ星月夜」の句を、 月二十六日の 山」と表記される。 した神明鳥居が立っている。 (一九八九) 六月の紀年銘をともなう石碑は、前年昭和六十三年 (一九八八) 七 ・田曾浦両集落の境には浅間山があり、二・五万分の一地形図にも 浅間山には、 「富士山頂浅間大社」 標高一八一・九メートルを測る。 宿浦漁業協同組合が「村中海上安全」を祈念して奉納 祠には石造の大日如来坐像を祀っている。平成元年 への参拝を記念したもので、 宿浦には浅間さんの信仰と 漁協組合員一六 「浅間

> 浦では、 うじ ちようらい さんげさんげ は、 業関係者が、この山に「大漁満足」と「航海安全」を祈願してきた。 てオツトメ(御勤め)をする。 預かる家族たちは、カトブネ(鰹船)の出航時や航海中に、浅間山に真言を唱え てた祠には「オダイニッァン」(お大日さん)の石造立像を祀っている。 合わせて刻んでいる。調査時には、「波切不動」の赤旗も奉納されていた。 「浅間神社おつとめ」を記した奉納額が合わせて納められている。「きみよう いちにだいはい 浅間山の入口に 大漁ごんげ」と続く(昭和五十一年六月奉納)。 「冨士浅間神社登山口」と刻んだ石柱を立てている。 ろつこんしようじよ おしめにはちだい こんごど 浅間山は魚見台にもなっていた。 田曾浦が 留守を 祠内に 田 漁

地下垢離力)、登山垢離、登山祝出、 竹が並んだ。 あたっては、 の巡行に合わせて道中歌を歌い踊る。 マユカタ(山浴衣)を着て、首からズズ(数珠)を下げて日の丸扇を持つ。 てられる。その際には、ホラ貝が吹かれ、締太鼓も叩かれる。講員はズボンにヤ 行事が展開する。祭に用いる村竹は、 に水を張って、そこで垢離を取る。朝垢離、オツトメ(御勤め)、オチネ垢離 てきた。実際に富士へ登山する者が、浅間祭に参加して歌い踊る。センゲンサン 以降は、旧五月晦日に山本家をヤドモト(宿本)として浅間さん(富士講) (浅間山)にムラダケ(村竹=幣竹)を立てる行事をする。ハンギリ(半切=磯桶) 田曾浦には、浅間さんの行事と道中歌が伝わる(付⑫)。昭和二十九年(一九五四 道中歌は船主たちの座興歌として歌われることもあった。 先達の家などに、 オハケ竹を立てる。 登山出立、下山垢離、 桟橋から倒すことなく山頂まで運ば 全四四番を歌い継ぐ。富士山へ登拝するに 宿本の家の周りには、 御勤め、 精進落の順に、 を行 オ

の寺田氏と浜口氏の二名は、北口本宮の崇敬者リストにも記載されている。かけにして富士講員でもある船主たちが毎年詣でるようになったという。代表者講は、北口本宮冨士浅間神社にも参拝するようになった。漁業組合の旅行をきっ富士講の最後の講元を寺田氏が務めた。平成の初めころになると、田曾浦富士

藤原治俊 富士講は文書を所蔵し、 大竹を見ることができる。五ヶ所には、浜方と山方、二つの富士講がある。 [五ヶ所浦の富士講] 旧五ヶ所町の中心、 五ヶ所富士) (吉田御師佐藤備前) が聳える。 祭礼に下げる富士山版図を表具した掛軸を伝えている。 麓から見上げると白い神明鳥居と山上に立てられた の原画に拠っており、 五ヶ所浦の背後にセンゲンサン 北口吉田で頒布されたもの (浅間 山方

総休みに浅間山 五ヶ所湾に突き出た半島上に位置する中津浜浦のセンゲンサン に登り、 唱えごとをしながら、 浅間祠の周囲を左回りに何回か回 (浅間山)では、 と知られ

る。 がある。 所川の中流域で、支流との合流点に立地する。集落の南方にセンゲンサン(浅間山 年代後半の祭事の様子がわかる。 [切原浅間講] 五ヶ所川を遡ると切原に至る。 五ヶ所浦北方の内陸部にある。 五ヶ **「文化伝承」** 山上の御堂には大病を煩う者の家族などが、 山頂に大日如来の石像を二体納めた祠 は、 切原の浅間講について、次のように記録していて、一九七○ (切原浅間神社)と籠もり堂があ 病気平癒を祈願して籠もった。

える。富士登山 は米1升、 5月28日が浅間大祭。浅間講の当屋はその月の15日から精進を行ない、 して登山 して垢離のミソギをした。 た。午後4時ごろから講員一同 餅米1升5合をもちより、 御山では (浅間まいり) は隔年に行ない、代参4人をたてる 『南無サマンダ 28日夜半より午後にいたるまで講員および精進者 (女性を除く)大幣2本、 当屋宅で四本杵で歌に合わせて餅をつ 浅間ダラニ ノーマクサンダラ』 小幣2本を持参 を唱 別火

間講) 当地は旧南勢町の中でも耕地の開けたところであり、稲作と結びついた富士講(浅 未明から餅搗き行事が行われる。 浅間山に登拝する行事が浅間大祭で、 行事といえる。物忌と精進、 これにともなう水垢離が今でも厳重に行われ 餅搗きと登拝が、 その途上で道中歌を歌う 浅間講の行事を構成する。 (付⑩)。 祭日

聖域に擬して浅間山のお鉢を巡るもので、

お

火をして、 ている。 その年の行事を担当する当屋役は二週間前から部屋に籠もって日替= 神棚に灯明を上げたりすることを繰り返す。 别

が道中歌を歌い、搗き手が囃していく。そして、 は丸い黄粉餅にして登拝した者たちに配る。 きといって杵を大きく右に回しながらこねるような搗き方をする。 餅搗きには竪杵を用い、 四人がこれにあたる。 最初は小搗きをする。 仕上げとなる本搗きである。 歌い手(音頭 次に 餅

ない結界となっている。 人はここで草履を脱ぎ、ここからは素足で登っていく。 きな声で歌い、一同が下の句を歌い返し、「南無浅間大菩薩」の合いの手を入れる。 小幣各二本を担いで、 前を出発する。御幣は、事前に切り出した青竹に白い幣束を付けたもので、 の中腹には、 水垢離を済ませた講員や精進人が、大きな忌竹、 石の階段がある。二本の小幣を、 道中歌を歌いながら登っていく。 石段の脇に揃えて立てる。 四本の御幣を担いで公民館 土足では入ることのでき 音頭がマイクを持って大

Ш

る。 几 くと、 ヤマノウタ られる。 菩薩に対する呪祷、真言などが繰り返し唱え には薬師如来と、二体の石像が安置されてい 「首の歌で四周する。 (御勤め)をする。 浅間山の頂上は平地になっており、 ながら、祠の周りを右回りに四度周回する。 般若心経、 登拝の講員一同は、 二本の大幣を小祠の両側に立てる。小祠には、 御勤めが終わると、 (御山の歌) 消災呪、 講元と当屋の主導によっ 富士山の頂上=八葉の 大日・不動・浅間大 =お鉢廻りの歌を歌 小祠の前でオツトメ 当屋を先頭にオ オハチ (お鉢) と呼ばれている。 向かって右に大日如来、 お鉢に着



度会郡南伊勢町切原

左

東方は竈方(農村)の集落に分かれる。竈方は相賀竈とよばれ、 を隔てて宿田曾と相対している。相生橋を境にして、 (V 士登山よりもむしろ、餅搗きと御山登拝行事が富士講 登拝者は順次そこを巡っていく。下向後は、公民館で直会をする。現在では、 鉢巡りの作法を移したものといえよう。浅間山頂を胎蔵界曼荼羅に見立てる。 日如来を中心とした聖域で、同尊を中央に、八葉蓮華の上に八尊の仏が配されて、 [相賀浦の浅間祭] る。この行事は、 相賀浦は五ヶ所湾入口の最西端に位置する。 歌で御山 (浅間山) に登る行事 (御山登拝) といってよい。 西方は浦方 (浅間講)の中心となって 東方約四キロ海 (浜方=漁村)、 富 大

区内の有志10軒ぐらいで構成。平生から掛金をして富士山の浅間神社に参詣。 安置されている。毎年5月28日にはこの山頂に登り祭事をする」と記述する。 『文化伝承』は、当地の富士講について、「浅間講」の称があるとしたうえで、「地 相賀では共有山の一番高い山を浅間山とよび、その山頂に大日如来の石像が 中

から八組までが浦方である。浅間祭は、竈方・浦方が合同して行う。

つに数えられる。「竈方」の称は塩を焼いた窯に由来する。一組は竈方で、

南島八ヵ竈の一

二組

き継いで、実行委員会の形をとって存続させたという。土曜日は魚市場が休みな て実施してきた。 かに二名、計三名からなるが、区長以外の二名のうちの年長者が実行委員長になっ ので、六月第三土曜日に日を固定して一日で行う形にした。 高度経済成長期ころから後は浅間講が立ちゆかなくなり、 区の役員は区長のほ 区が祭を引

オオダケ(大竹)・ナカダケ(中竹)・コダケ(小竹)を用意し、大竹一本、 竹は事前に切りに行く。 に行う。この年は六月十日に行った。 委員長が幣を切り、 草刈りと道作りを済ます。 平成三十年 (二〇一八) 六月十六日の浅間祭を見学した。 流し札を作る。 今は北に隣接する迫間浦の個人山の竹をもらい受ける。 登山道の草刈りと階段の保護柵等の整備である。 惣代長・惣代が、旗二枚を合わせて準備する。 区の役員三名、 組からの七名が、午前中に 祭の準備は 週間前 中竹

> 二本、 小竹三本を御幣竹に整える。

張る。 平石を置き、 行委員長、漁業関係者三名、 間 念する。 一三名が大竹を持って登っていく。 て行く。ホラ貝を吹き、太鼓を叩きながら登る。先発の二名が先に登り、 を拾う。 が参加した。朝九時を目途にミズゴリを行う。浜に二本の中竹を立てて注連 ブルブル」という。垢離取り役を委員会が決めて担当者に依頼する。 祭当日は、まず浜でコオリ(垢離)、ミズゴリ(水垢離)をとる。この垢離を「浅 (大漁)、オカは豊年万作、 海の神に「ダイリョウ(大漁)をお願いします」と祈念する。 銘々が二、三個拾い、 米・小豆のほか小魚を刻んで供え、唱えごとをする。 クミガシラ ムラ繁盛」を三回繰り返し、水に入る。 小さいポリ袋に入れて分配して浅間山の上に持 山頂の神祠に「家内安全」「大漁満足」を祈 (組長、 一組から七組まで) 「浜はダイリ 竹の手前に のうち五名 同年は立 浜で小石 本体の 実

ない。 の印になる。 三回繰り返して唱和する。その後、 勤め)を実行委員長が主導して行い、「きみよーちよ来浅間々々」(懺悔の文) 「値打ちもの」とされ、 山頂に大竹を立てる。小竹は浅間祠の右側に三本並べて立てる。 終わると一同下山して、 保存しておき、 日の丸扇を奪い合う。 会館で直会を行う。ここでは道中歌は用 船や神棚に供える。 「家内安全、 日の丸の赤い部分が オツトメ 御

几 志摩の富士講と行

次いで、 志摩地方の行事を取り上げる。

いは いた を記録したとみられる① [答志島の富士講行事]鳥羽沖に浮かぶ答志島は、 「もゝとりかしま」といった記述が見える。これが、答志・桃取の両所を指 (現在はともに鳥羽市)。一章で見た大宮の道者帳のうち、 「御炊坊道者帳写」に、 「とうせんか嶋」 答志・桃取の二村からなって 十六世紀の状況 「とうし」ある

帰ってくるまで夜ごとに続けられる。「カルカレ、カルカレ」(軽かれ、軽かれ)帰ってくるまで夜ごとに続けられる。「カルカレ、カルカレ」(軽かれ、軽かれ)原ってくるまで夜ごとに続けられる。「カルカレ、カルカレ」(軽かれ、軽かれ)原ってくるまで夜ごとに続けられる。「カルカレ、カルカレ」(軽かれ、軽かれ)原ってくるまで夜ごとに続けられる。「カルカレ、カルカレ」(軽かれ、軽かれ)帰ってくるまで夜ごとに続けられる。「カルカレ、カルカレ」(軽かれ、軽かれ)帰ってくるまで夜ごとに続けられる。「カルカレ、カルカレ」(軽かれ、軽かれ)帰ってくるまで夜ごとに続けられる。「カルカレ、カルカレ」(軽かれ、軽かれ)帰ってくるまで夜ごとに続けられる。「カルカレ、カルカレ」(軽かれ、軽かれ)帰ってくるまで夜ごとに続けられる。「カルカレ、カルカレ」(軽かれ、軽かれ)帰ってくるまで夜ごとに続けられる。「カルカレ、カルカレ」(軽かれ、軽かれ)帰ってくるまで夜ごとに続けられる。「カルカレ、カルカレ」(軽かれ、軽かれ)帰ってくるまで夜ごとに続けられる。「カルカレ、カルカレ」(軽かれ、軽かれ)帰ってくるまで夜ごとに続けられる。「カルカレ、カルカレ」(軽かれ、軽かれ)帰ってくるまで夜ごとに続けられる。「カルカレ、カルカレ」(軽かれ、軽かれ)帰ってくるまで夜ごとに続けられる。「カルカレ、カルカレ」(軽かれ、軽かれ)帰ってくるまで夜ごとに続けられる。

[上五知のセンゲンさん] 五知は志摩半島中央部、伊雑ノ浦に注ぐ野川上流部の「上五知のセンゲンさん」(浅間さん)の称がある経塚について、『伝承文化』が記述ある「センゲンさん」(浅間さん)の称がある経塚について、『伝承文化』が記述ある「センゲンさん」(浅間さん)の称がある経塚について、『伝承文化』が記述をともいわれる。室町時代のものと伝承される。山上参り(大峰山参詣)を終えまる。 正五知のセンゲンさん」五知は志摩半島中央部、伊雑ノ浦に注ぐ野川上流部の「上五知のセンゲンさん」

という歌を歌いながら踊った。

などとある。 薬師堂に奉納した板額には、 酒量や金員について定めている。 決めで、その第一六条では、「旧五月廿八日」の 郡志島村節倹概報」と題する文書が伝わっている。村内の諸行事にかかわる取り 阿児町)には、集落ごとに富士講が存在した。明治十八年(一八八五)の [志島富士講] の催行であることがわかる。また、 このほか、 志摩半島南東部の太平洋に面した海浜部に位置する志島 昭和十二年(一九三七、 「奉誓富士当山、 現在は、 同二十二年 六月二十八日を祭日とするから、 諸願成就、 丁丑 (己丑) 「富士様村内総垢離」に要する 0) の富士登山を記念して 村中安全、 「富士日待人名帳」と 子孫長久」 (志摩市 「英虞 月遅

論

文

題する帳面(横帳)も残る。

は、 た。付近には岩礁が存在し、 は三分の一ほどの広さだった。 移していく。それを九回繰り返す。つぎに「不動の呪文」(真言)を唱えて、 えていく。 丁で参加する。ステテコをはく者もいる。行事を先導する者 なった。 の岩をヤマと呼び、それを的にして行っていた。しかし、岩が沈んでわからなく を沈めて以降のことという。川の河口に若干の砂地があり、その左側に旗を立て ではなかった。小石混じりの渚に黒砂混じりの磯で、 加者全員が、「ヨーヨーヨー」と三回繰り返して唱える。直会をして終了する。 を願い、漁業大漁、農業豊作、 石を左から右へ戻していく。これも九回繰り返す。呪文のあとに、「志島の繁栄 士講の呪文」を先唱し、全員が唱和する。一回繰り返すごとに小石を右から左 く。導師は小石九個を拾って細長い砂の基壇の傍らに置いて準備する。一礼後、「富 の泥を掬って三本の竹の下に置く。 を清める。 に三本の竹を結わえ、その下に泥の山をつくる場所を準備する。総垢離には褌一 大菩薩」と記した四本の旗を立てた。現在では竹を七本、幟旗を五本立てる。 六月二十八日の祭礼当日、砂浜に砂を盛って細長い旗立の台を設け、 いる。行事の中心となる総垢離には、志島の各戸が参加する。「ヨーヨー」ともいう。 **垢離は漁業者が主体で、漁協が主催するが、行事の進行は志島区に引き継がれて** 当地では、 行事を執行する浜を「広岡の浜」と呼ぶ。しかし、かつては現在のような砂 北側の布苔浜や、隣接する甲賀の浅浜、南側の市後浜などでギョクミュののはままった。 砂浜に埋もれてしまったという。祭に用いる小石は磯で拾った。 それを三回繰り返す。そこに神酒と削り節を供える。つぎに波打ち際 全員が波打ち際で小石六個を拾って細長い砂の台六ヵ所に一つずつ供 ソーゴーリ (総垢離) 突出した岩の上に三本の竹を組んで行事をした。 白砂の浜の出現は、 商売繁盛、家内安全を願いまする」と唱える。 銘々が三回繰り返して泥の山を盛り上げてい や富士登山、 富士日待などを行っていた。 昭和三十年代にテトラポット 白浜は存在しなかった。 (導師) は海水で身 「冨士浅間 現在で (漁組 浜 小 別 総 浜

まとめて置く。の人が祭に間に合うように事前に拾っておく。祭当日は浜の波打ち際に一ヵ所に

りとも)があった。 る申年参りと、その間の丑年に補完的に行う丑年のヌケマイリ(抜参り、抜駆参る申年参りと、その間の丑年に補完的に行う丑年のヌケマイリ(抜参り、抜駆参志島に生まれた男たちは、一五歳を過ぎると富士参りを行った。申年に参詣す

す。 から二人で北口 船が宿田曾 が、 て、 士参りをしていた。観光バスを手配して集団で登山した。四〇人ほどが一緒に登っ 富士参りをするためのヒマチ 祭礼役員の一人は、 掛軸を床の間に掛けて日待をする。 漁協でも参加者を募集した。漁協のメンバーや海女の家、 一二年ごとに富士登山をしていた。 (南伊勢町) にあり、それに乗っていた。焼津まで船で行って、そこ (吉田口) カツオ船に から登山した。 (日待) (見習いのとき) 登山では、 という集まりがある。 富士山に一緒に行った一五人のメンバー 金剛杖にハンコ 乗っていた。 漁師の関係者が富 五人が日待をし 小型のカツオ (焼印) を押

申 に登」った。 中学校の知り合い などで登山したという。 オハチメグリ スバルライン経由で五合目に行き、 山した。最初は富士講に加わって、高校二年の夏休みに登山した。昭和四十三年(戊 一〇一九年の自治会長 のことである。 ウラとは北面の山梨側のことをいう。 (御鉢巡り)をし、 一五人ほどが一緒に登った。そのときは、 「成人になったら一回登れ」といわれ、 (昭和二十七年〔一九五二〕 下山後に東京見物をして帰省した。 宿泊しないでそのまま登頂した。 河口湖の旅館で仮眠して富士 生まれ) 漁協の募集に応じた。 「ウラの方からヤマ は富士山に三回登 次には家族 朝の七時に

歌を歌い ちは夜間 女性たちが、「足が軽く、 昭和五十五年 オミヤサン ほ かの者たちは団扇をもって海の方角を向い 甲申 (氏神) や昭和六十年 山の上まで登れるように」と一晩中歌い踊った。 の境内で踊った。 (Z) 丑: にも富士参りが行われた。 年配の女性が音頭を取って道中 て歌いながら群舞した。 女性た



【写真3】道中歌で踊る留守宅の女性たち 志摩市阿児町志島 1980年(庚申) 上村莞爾氏提供

【写真4】道中歌の音頭取り

志摩市阿児町志島

1980年(庚申) 上村莞爾氏提供

いては、 があり、 番が一人、 た者が務める。 組長が当番となって、 [立神の浅間さん] その石を的にして祭 『祭り行事』 祭に参加する。 宿に掲げた掛軸の前で祝詞をあげる先達が一人、 英虞湾に面 が詳しい。 妻とともに祭に奉仕する。 (浅間さん) が行われる して立神 立神では、 (志摩市阿児町) 集落は東西南北の四組に分かれ、 ヤドモト (口絵1)。この行事に がある。 (宿元) 「九人役」 は家を新築 立石浜に立 0)

る。線香を立て灯明を点す。の床の間には「富士浅間大菩薩」の掛軸を下げ、供物の餅と飯、菓子などを供え一二本の小竹を準備する。閏年は一三本にする。宿の入口には注連縄を張る。宿抜き取り、幣束を付けた新しい大竹を調えて準備する。それ以外に浜に立てる抜き取り、幣束を付けた新しい大竹を調えて準備する。それ以外に浜に立てる

の妻は着物で、 の潮時を待っ と四組長は白装束に着替え、 当 日 の朝に九人役と先達がお参り て、 頭にユリ 大竹を立てる。 (曲物)を載せて出発する。 白足袋に草履をはき、 四人は二本の大竹を一 同でオット 麦わら帽子をかぶる。 ユリの中には、 本に結わえて担ぎ、 (御勤め) をする。 供え餅と浜 立石 先達 宿

農協、真珠組合、立石、大日祠、氏神、薬師堂の順に廻る。立石浜に浅間さんのに流す桑の葉を入れる。一二本の小竹を持つ者もこれに従う。宿を出て、漁協、

大竹と一二本の竹を立ててから宿に戻る。

[布施田・和具の浅間さん] 布施田は志摩半島の最南端、先志摩半島のほぼ中央「布施田・和具の浅間さん] 布施田は志摩半島の最南端、先志摩半島のほぼ中央「一方をはいる。「伝承文化」には浅間さんの行事がある。日中は登山姿ではをなでてもらうと病気に罹らないといわれる。その後、富士参りの唄を歌いな体をなでてもらうと病気に罹らないといわれる。その後、富士参りの唄を歌いながら浅間神社に参拝する。『伝承文化』によった。同書は行事の内容についてはがら浅間神社に参拝する。『伝承文化』によった。同書は行事の内容についてはがら浅間神社に参拝する。『伝承文化』によった。同書は行事の内容についてはがら浅間神社に参拝する。『伝承文化』によった。同書は行事の内容についてはがら浅間神社に参拝する。『伝承文化』によった。同書は行事の内容についてはがら浅間神社に参拝する。『伝承文化』によった。同書は行事の内容についてはがら浅間神社に参拝する。『伝承文化』によった。同書は行事の内容についてはがら浅間神社に参拝する。『伝承文化』によった。同書は行事の内容についてはがら浅間神社に参拝の代表がある。

中歌の形をとっている。
士垢離を取る行事が中心で、「富士参りの唄」(お精進)が歌われる(付⑳)。道士据離を取る行事が中心で、「富士参りの唄」(お精進)が歌われる(付㉑)。道勝接する和具ではオショウジ(お精進)をする。オコリ(御垢離)すなわち富

(『文化伝承』)。 日には水浴をして身を浄め、山伏姿で幟を地内の浅間山に持参し、神酒を供えた町)。ここでは浅間さんは牛の神とされ、五月二十八日に牛の水浴をする。この町)。

という(国参り)。 (同町)、富士講がある。水垢離の行事を「ヨーヨーダッポン」という。富士講は峠を越えて伊勢まで行き、内宮と外宮を参拝して垢離を取り、帰るものだったは峠を越えて伊勢まで行き、内宮と外宮を参拝して垢離を取り、帰るものだったは峠を越えて伊勢まで行き、内宮と外宮を参拝して垢離を取り、帰るものだったは手では、「一切をはいる。「「「「「」」という。富士講に関いている。「「」」という(国参り)。

*

いたことが知られる。留守居の女性たちが、歌で踊り明かす姿は、印象的である。志摩地方においても、伊勢湾岸と同様の富士登山にともなう行事が伝承されて

論

文

五 熊野灘沿岸の浅間祭

南伊勢町)や東紀州に属す地域を対象とする。本章では、熊野灘沿岸地方に伝わる祭行事について見ていく。旧南島町域(現

易に見分けられるのが「浅間山」である。 一学湾岸に限らず熊野灘に面した地域にも浅間祭が数多く伝承されており、現 の場合、村の背後の小高い山にあてられる。港を出入りする船からも容 で行う行事についても「浅間さん」と呼称する。とりわけ、漁村で盛大に行われ で行う行事についても「浅間さん」と呼称する。とりわけ、漁村で盛大に行われ る。多くの場合、村の背後の小高い山にあてられる。港を出入りする船からも容 る。多くの場合、村の背後の小高い山にあてられる。港を出入りする船からも容 る。多くの場合、村の背後の小高い山にあてられる。港を出入りする船からも容 る。多くの場合、村の背後の小高い山にあてられる。港を出入りする船からも容 る。多くの場合、村の背後の小高い山にあてられる。港を出入りする船からも容 を迎えて行う行事に限らず熊野灘に面した地域にも浅間祭が数多く伝承されており、現

河方き 座浦、 成果によったものについては、 成果を基本に、その折の聞書きの内容を組込みながら順次記述していく。 平成十六年(二〇〇四)に方座浦の浅間祭を見学した。ここでは、上村氏の調査 は、 起点に西行し、古和浦までの各集落の富士信仰についてまとめてみたい。筆者は、 上げている。このうち⑮~⑰は調査を行っていないという。本稿では、 の報告に詳しい。以下、同稿に従って見ていく。第三部(%) さて、 西端の①新桑竈を起点に、②棚橋竈、③古和浦、④栃木竈、⑤小方竈、香いくわがままでいるがまますがある。 ⑦神前浦、 ⑤大江、⑥道行竈、 南島町の富士信仰については、『伊勢民俗』三三号が収める上村芳夫氏 ⑧村山、⑨東宮、 註記を加えた。 ⑩奈屋浦、⑪贄浦、 迎慥柄浦、 「町内各地の浅間祭」で (3)道方、 阿曾浦を 既存 ⑥ 方 (14)

複)。縁起の奥書には、「右安政五年戌五月補入也」とある。享保九年(一七二四)士御垢離記録」と題された帳簿四冊が伝来する(帳簿四冊のうち二冊は内容が重【**阿曾浦**】地内の竜淵寺に「富士浅間大菩薩由来」の表題を持つ縁起と「歳々富

(一七五〇)、明治三十一(一八九八)、大正四(一九一五)・同八・同十・同味深い。富士参り(富士登山)については、享保十三年以降、同十六、寛延三申間鋪事」の条文で始まる「冨士精進垢離之内定ノ法度」が掲げられていて興の記事から始まる「記録」の一冊目冒頭には、「腹中用心ニ御座候間、大めし喰

IJ

(垢離)

を取るのは四日前からで、「ソーラ、ヨイ」のかけ声をともなう。

(浅間祭歌)が歌われる(付⑬)。そして、浅間さんのコリトリ(垢離とり)をする(『県史』)。ここでは「富士道中歌」そして、浅間さん(浅間祭)には「浅間大菩薩」(大日如来像)の掛軸を懸ける。当地の浅間さん(浅間祭)には「浅間大菩薩」(大日如来像)の掛軸を懸ける。

十四年の都合八度が記録されているという。

で輪になって踊る。浅間さん(浅間山)でも踊る。で輪になって踊る。浅間さん(浅間山)でも踊る。(窓)の掛軸を懸ける。講元(当屋)と講員が広間に座って式をする。それ浅間大神」の掛軸を懸ける。講元(当屋)と講員が広間に座って式をする。それで輪になって踊る。浅間さん(浅間山)でも踊る。

それに寸志が添えられる。これらは、 なかきれいである」。 元へ届けられる。 オオセン、コセンと呼び、形態も変わる。各戸からの供え物をオハケといい、 て執行する。他所でオオヘイ(大幣)、コヘイ(小幣)と呼ぶ幣束を、 [神前浦・村山] 「にぎやかで、 アカネ(色の布)二すじ、日の丸扇二本、 且つ勇壮な浅間祭」で、 オオセン・コセンに飾りつけられ、 両所で一日、 白紙八枚、 麻緒一 両所では 日を違え 「なか 束、 講

「こへい』(大幣・小幣か)に変わる。形もまるで違う」と記す。の慣例を守って行われる」「古和(浦)での『ぼうてん』はここでは『おおへい』乗る。上村氏は、当地の行事について、「町内でもっとも大々的に且つ昔ながら乗る。上村氏は、当地の行事について、「町内でもっとも大々的に且つ昔ながらる。オカ(陸)から出て行くときに、山に向かって「ツィヨロー」といって船にる。オカ(陸)から出て行くときに、山に向かって「ツィヨロー」といっ小山がある。

水垢離)という海水に全身を浸けての潔斎が厳しく行われていたが、現在、コーかつては、祭の七日前から「フジゴーリ」(富士垢離)とか「ウシミズゴーリ」(潮

た。 の家 て、 間祭」と染め抜いた揃いの浴衣を着て村内を回る。 なこれに応じた。 当屋となった者の家で踊った。同家では、「家の中で踊ってくれ」と言われ、 んで進む。ドウチュウオドリ(道中踊)である。 る頃から、道中踊とヘイマワシ(幣廻)に移る。参加者は、化粧を施し、背に「浅 コヘイ すなわち村内全戸分の垢離をとることの意である。次いで、オオヘイ は潮水垢離から始まる。「ロクジュウシゴーリ」(六十四垢離)といい、六四軒分 平成十六年 (二〇〇四) 列踊が中町の通りを上っていく。 新築の家で踊る。この年は新築なった小関医院の前で踊り、 (平成十六年は高校二年生の家)の前で踊り、次に方座浦防災センターで踊 (小幣)の当屋を決める。 の祭礼は、七月五日に執行された。 各々自家の繁栄を祈念して籤を引く。 殿町、 浦町と通りごとに進んでいく。そし 最初に大幣の籤を引き当てた者 踊りの列は、 祭礼前日 最後には小幣の 大幣・小幣を囲 宵を迎え (四日) 4

五日の祭礼当日は村の路地や魚市場で、歌や踊りを奉納したあと、大幣・小幣五日の祭礼当日は村の路地や魚市場で、歌や踊りを奉納したあと、大幣・小幣とは一〇メートルもある葉つきの青竹で、笹葉には数十面の日の丸扇が吊される。この幣竹を倒さぬように立てたまま、若者たちは山坂を押し上げる。八合目の鳥居の先では、大小で競う形となる。山頂にたちは山坂を押し上げる。八合目の鳥居の先では、大小で競う形となる。山頂にたちは山坂を押し上げる。八合目の鳥居の先では、大小で競う形となる。山頂にたちは山坂を押し上げる。八合目の鳥居の先では、大小で競う形となる。山頂にたちは山坂を押し上げる。八合目の鳥居の先では、大小で競う形となる。山頂にが終わると富士山に参詣登山に出かけた。

て防災センターが使われている。また、〈山の部〉は富士山で歌う。 (垢離) 付18 当地にも道中歌が伝わる。 をかき終り寺へ行くとき唄う」ものとされるが、 〈道の部 は道中歌、 〈道の部〉 〈家の部〉 (家の部) は屋内で歌うもの、 〈前唄〉 〈山の部 現在では、 〈前唄〉 の四部がある [付⑧] に掲 寺に代わっ は「こうり

うて拝む えるもの、 月山部〉〈同第二部〉をあげる。 真言を掲げている。 げた(3)は、平成十六年の調査時に配付された資料に基づくが、冒頭に懺悔文・ をみせましょう」と歌う。 山時に唱えるものと推測される。道中踊= ふりをみせましよう」で始まり、家褒めやカツオ漁などを歌い込んでいる。 〈五月山部〉 南無や浅間のだいぼさつ」「浅間山は踊れとおっしゃる 次いで が浅間祭に唱えるものである。 〈家の部〉 〈四月山部〉 〈四月山部〉は四月の大峰講(山上講)行事で唱 は「浅間山は踊りこんでおじやる 〈同第二部〉 〈道の部〉 〈五月山部〉 では、「浅間山は何んと言 〈七月山部〉とは、 〈同第二部〉 踊りてふり 踊りて 富士登 七

間山)に籠もって祈願した。そこでオツトメ(御勤め)をした。「サンゲサンゲ コンショウジョウ たという。浅間講は「青年団の団結を示すもの」でもあった。祭に先だって山 (浅 にくる」という。 士登山をする。 浅間講は二〇軒ほどで構成される。講への加入を奨めることを、 先達の山本氏は昭和三十六・七年(一九六一・六二)ころに加入し 講員は若い衆から順番に富士山への代参を決める籤を引き、 オオムネハジダイ コンゴウドウジ」と唱えた。 「講のお 口 願 富 ッ 13

した。第二次大戦前は、伊勢湾を渡って豊橋(旧吉田、愛知県豊橋市)へ出たという。第二次大戦前は、伊勢湾を渡って豊橋(旧吉田、愛知県豊橋市)へ出たという。

[小方竈] 浅間さんの祭と踊りがある。上村氏は「隣の方座浦と型は同じである」

と記す。梵天については『南島町史』に詳しい。長さ六〇センチの幣東一〇〇本しいのと数の多いのが特徴」で、「今も浅間講の人達を中心にして盛大に行われる」山頂には木花咲耶姫命を祀る小祠がある。上村氏は「梵天(ぼうてん)の形の美【古和浦】当地の浅間山は国土地理院の二・五万分の一地形図に載せられており、

りつける。これを各町内会や青年団などが、都合二五本作る。 (%) をぶらさげた直径一メートルの竹の輪を、長さ約五メートル四〇センチの竹に括

たという。【栃木竈・棚橋竈・新桑竈】上村氏によれば、「古和浦と同型の祭」を行ってき

*

ていた(『県史』)。また、 斎し、毎年旧暦の五月晦日に「御山上がり」と称する幣竹の長短を競う行事を行っ 市)、遊木 域から順次に見ていこう。錦 旧牟婁郡赤羽村 続けて、 (熊野市) 旧紀伊国 (紀北町紀伊長島区) には、 の浅間祭も知られている。 (東紀州) 旧海山町 (大紀町)、 に進む。 (紀北町海山区) 同国の浅間祭・御山祭につい 島勝浦 浅間山山 (紀北町海山区)、三木里 には、各地区に浅間さんと 頂の祠を二つの地区で奉 て、 (尾鷲

ている。 0) 以下に整理した。 るという。 前十時ヨリ午前十一時マデこをり取リシ処、 年は何レモはちく花咲キ実多クシテ青葉ナシ、 村勘蔵・浜田喜六の二名大山竹買求ノ為、 御館三千丸ノ三名、富士講潔斎所ニ入ル、 る講中、 月精進衆」が造立した旨を刻んでいる。「五月精進衆」の刻銘は、 を祀っている。正保三年(一六四六)中夏(五月)に、「紀州室野郡白村」 [白浦] 「富士講人名及諸雑記帳」が残る。「旧五月二十六日、奥村勘蔵・浜田喜六・ 集落北方の山頂に小祠があり、胎蔵界大日如来を主尊とする板碑型石碑 富士垢離を行う者たちの講中、すなわち浅間講(富士講) 小祠を浅間さん、山も浅間山という。 向ニ至リ矢口ニテ竹整ヒ来リシ処、 (中略) 雨シキリニ降リ」といった記述があ 白浦には、明治三十八年(一九〇五) 旧二十八日朝ヨリ雨天トナリ、 旧二十七日晴天、 の存在を示し 五月に潔斎す 午後ヨリ奥

その成果を

(『封堠』二九号)。

海山郷土史研究会の皆さんが

呼ぶ山や小祠などが存在する。これらについては、

「三重紀北町海山区の浅間さん」をまとめている

くると、子供たちは頭などをなでてもらったという。上げて、大木に縛り付けた。白装束に長い数珠を首にさげた行者が山から下りて中で垢離を取り、お籠もりをした。浅間さんと呼ぶ祭礼には、大竹を山頂に持ち中で指離の有志が月次で祠に供物を献じてお参りする。大白さんの前に七日間海

ことわずか二年である。 関与も想定されよう。その造立は慶安元年(一六四八)と、 ある「大棟梁権現」を想起させる。 の伝播は十七世紀中葉のことと考えてよ る寄進であることも共通する。加えて「大龍権現」は富士山村山口で祀る尊体で 大龍権現」と刻んでおり、 祠に月参りを行っていた。 [島勝浦] 集落東方の山頂 石塔造立時期の近接も興味深い。 大日を主尊とすること、「精進仲間」(富士講中)によ 白浦同様に、 (浅間山) 当地への富士信仰伝来の背景に、 に浅間神社が祀られている。 板碑型の石造物を神体とする。「大日 紀州北部への富士信仰 白浦の石塔に遅れる 有志が山上の 村山修験の

た。 吹きながら錫杖を突き鳴らし、 にこれを大竹の先端に付けて、 議室に祭壇を設けて、 奉仕するのみとなっていた。宿となる大敷組合(ブリ大敷網の組合事務所) けて立てた。三十日にかけて、大竹の前で垢離をとり、浅間山の踊りを奉納した。 を用意する。大竹という。 ツトメ(御勤め)をした。この期間は精進食である。また、朝夕二回海中に入って、 の期間は、 「ユーホイ、 当地では浅間の行事を「サイゲさん」と呼ぶ。「センゲン」の転訛だろう。 コンゴンドージ 六月一日早朝、 祠の前で 旧暦の五月二十五日から六月一日までだが、伝承者は少なく、三名が ユーホイ」の掛声でコオリ(垢離)を取った。二十八日の朝、 「サイゲ 奉仕者は、 (金剛童子) 木花開耶姫命と役行者の掛軸を懸け、 サ イゲ 三面の日の丸扇で円形を作り、小竹に結びつけ、 お櫃に入れた五重の鏡餅、 浅間山へ登った。垢離場の大竹も山上へ持ち上げ 魚市場付近に設えた垢離場に島勝神社の方角に向 南無富士は 六根清浄 ヲメシ 浅間大菩薩」の唱えごとをした。 (お召し) にハツダイ 神酒を持って、 神饌を供えて毎夜オ ホラ貝を (八代) さら の会 竹材 祭

> 吉田港、 けして島勝の町内を歩き回り、村人の頭に数珠をかざした。 での行事を終えると、ホラ貝を吹きながら山を降った。下山した奉仕者は、 続いて、 富士の浅間さま オヤマノウタ 白塚、 新居渡しと、 踊れとおっしゃる (御山の歌) 地名を詠み込む形をとっている。 を書いた扇を持って、 踊りてふりを 見せましょう」に続いて 踊りを奉納した。 踊りにともなう歌は、 Щ 上

なお、サイゲは一九九三年に中止された。

りの枝を取り払う。この幣竹をレンポン竹という。 事 後に、広禅院で祈祷を受ける。 供物を献じ、 き鳴らしながら浅間山へ登る。レンポン竹を祠の傍らの大木に縛り付ける。 ンポン竹を先頭に、御神酒や炊米(かしき)といった供物を持って、 て身を清め、 の祠を浅間さんと呼ぶ。農業用水に不自由すると、水の神として豊作を祈願する。 [馬瀬] 曾我五郎の命日の五月二十八日、 (浅間さん)が行われる。五月二十八日の早朝、崇敬者は大舟川で垢離を取 広禅院背後の浅間山に宝暦六年(一七五六) 「南無浅間大菩薩」 大竹に御幣を取り付ける。 と唱えながら祠を三周して、 曾我十郎の命日にあたる六月一日の両日に祭 竹の先端を切って、五枝ほどを残し、 「霊峰竹」の転訛という。 造立の石祠 直会をする。 が祀られ ホラ貝を吹 洞に 下 残

で直会をした。現在、 呼ぶ長さ三〇尺 えるように大木に縛り付けた。 る施設はない。 ||河こ |内||₅ 慈雲院裏山の尾根の先端を浅間さん 五月二十八日に祭礼を行った。 (約九メートル) ほどの大竹を浅間さんに運び上げ、 祭礼は中断している。 ホラ貝を吹きながら登山し、 (浅間山) 浅間さんの称がある。 と呼ぶ。 行事の後は当番の家 信仰の対象とす 集落から見 レンポンと

集落から見えるように杉の大木に縛り付ける。ホラ貝を吹きながら山に登る。 付きの大竹 の川原に二本の竹を立てて注連縄を張り、川の水で清めたデンポウさんと呼ぶ根 年(一七五 上里 第一病院北方の山を浅間山と呼び、 一)の造立。 (幣竹)をくぐらせる。その後、 五月中旬の日曜日に祭礼 小祠に大日如来坐像を祀る。寛延四 デンポウさんを山の上に運び上げ (浅間さん)を行う。大河内川

の拝殿で神主からお祓いを受けて直会をする。中里区が主催する。 りも直近の日曜日に改められている。 成二十三年(二〇一一)からは小字山下の尾根先端で執行するよう改めた。 木に縛り付ける。 【中里】六月一日に八重垣神社の裏山山腹で行ってきた祭事(浅間さん)を、 円形にしつらえた扇三面を取り付け、これを集落から見えるように檜の大 ホラ貝を吹きながら登山する。山頂での祭事を終えると、 祠や石仏はない。四メートルほどの長さの 日取 平

たる。 行う。 礼当日早朝、 用意すると、その先端部を切り落とし、下枝を取り除く。レンポン竹と呼ぶ。 られている。 の当地区では、 木に縛り付ける。 で円形を作り、 て左側が浅間社、 [新田]八雲神社裏の尾根の先端を浅間山といい、そこに木祠二基がある。 当番の組は当主を決める。祭礼前日の五月三十一日、当主は孟宗竹一本を 地区を五区に割り(一区は一六~一七世帯)、持ち回りで当 ホラ貝を吹きながら、 周囲に玉石を敷き、整備している。六月一日に祭事(浅間さん) 家内安全のほか、 麻糸でレンポン竹 山上での祭事の間、 右側が秋葉社で、 五穀豊穣を祈願する (幣竹) に結び付けると、これを祠背後の杉の レンポン竹や供物を持って山に登る。 左の祠には、 絶えずホラ貝が吹き鳴らされる。 木札 (「浅間大神」ヵ) (当番)にあ 農作地帯 扇三面 が納め 向 かっ 祭 を

長さ七~八メー 、丸扇を取り付け依代とした。祭礼当日は、 五月の最終日曜日 集落南方の尾根の先端を浅間山といい、 トルの孟宗竹の先端を切り落とし、さらに下枝を取り除いて、 (以前は六月第一日曜日)に祭事(浅間さん)を執行する。 下草を刈りながら登山し、 木祠に大日如来を納め祀ってい 神酒を供 日

論

文

える。 険をともなうため、現在では祠の前の雑木に結びつけている。したがって、 唱えごとも伝えられていない。 らは見えない。かつてはホラ貝を吹いたが、現在は行っていない。 竹は祠背後の桜の大木に縛り付け、集落から見えるようにしていたが、 僧侶が同行し、一同拝礼する 特別な所作や 麓 危

竹が見えたという。 中断している。昔は相賀各町が大竹を持って山に上がったため、 相賀 集落西の尾根の先端を浅間山といい、 大日如来坐像を祀っている。 麓から複数の大 祭は

造立)を納めた木祠を祀る。 **[便丿山]**集落裏山中腹の「愛宕さん」に、大日如来立像でんのやま 行事は何十年も中断している。 (元禄三年 (一六九〇)

を祀っているが、行事は中断している。 [木津] 集落西方の木津神社境内に大日如来坐像(享保十一年〔一七二六〕造立〕

ているが、 【小山】集落南の山腹を浅間山といい、ここに大日如来坐像まやま 行事は何十年も中断している。 (享保十年) を祀

村氏は、 いたが、倒木の下から石像が発見されたことをきっかけに再開した。責任者の奥 に祭(浅間さん)を行ってきたが、七月の第一日曜日に改めた。祭事は中断して [渡利]集落東方の尾根の先端を日和山といい、 毎年富士宮の浅間大社(富士山本宮浅間大社) 大日如来坐像を祀る。 に参拝している 七月 日

配った。 いた。 にしていた。昔は前日に祠の前の拝殿にお籠もりをした。かつては参詣者に餅を セギさん)を執行している。 [引本浦] (大日如来坐像、元禄七年造立)を祀っている。 有志が旧暦六月一日に祭事(オ 個人的な信仰から、 集落の裏山をオセギ山 幣竹を祭の前に大木に縛り付け、 団扇太鼓を叩いて「南無妙法蓮華経」と唱えた者も (浅間山、 引本公園) と呼ぶ。ここにオセギサ 浜から見えるよう

尾鷲市域にも浅間山、 またそこで行われる浅間さんの祭事がある。

頼している。三木浦の漁業者を代表しての登頂である。年(二〇〇一)七月二十七日に富士山に登頂し、奥宮に「大漁満足」の祈祷を依年(二〇〇一)七月二十七日に富士山に登頂し、奥宮に「大漁満足」の祈祷を依

南無お山じゃ、 を担う二人、これにほかの行者が従う。 二メートル四方の空間の四隅に杭を立て、横に枝を渡して、注連縄を張り巡らし 懸けていた。浅間山が見下ろす砂浜の一角には、 となった家では、 に先達の家を宿として開き、幣竹 承されてきたが、 ダイボサツ い籠もりを続ける。 なぞらえた神聖な空間と理解できよう。このように準備が整うと、宿では歌を歌 ただけの簡素なしつらえだが、その名称は の部屋に籠もる。 行となった。「三木里浅間さん」の名で知られる行事である。講 御山祭が催行していたが、 「富士浅間大神」 [三木里]集落背後の小高い山中に小祠を祀る。浅間山という。 て海中で垢離をとる 御山祭が近づくと、世話役が中心となって当年の先達を決める。六月二十八日 周囲を時計回りに三度回る。「ナームセンゲン ダイボサツ ナー 大菩薩)と唱え、「足も軽かれ、 行者はユカタとよぶ白い単衣を着る。かつて先達は心鈴を首に 部屋の畳を上げて板床にして、四隅に注連縄を張り、床の間に の掛軸を懸ける。 現在では、 ムオヤマジャ 朝・昼・夕と一日に三度の垢離をとる。 近年は新暦の六月二十八日から七月一日にかけての執 講の世話役や有志が、行者となって継続している。 ダイブサン」 (八本竹)を軒先に立てて、その印とする。 この部屋を精進部屋とする。先達や行者はこ 浜に着くと、オオハッチョウの前から沖 「御八葉」を連想させる。富士山頂に (南無浅間大菩薩、 お山もよかれ」と歌い踊る。 オオハッチョウを造る。およそ 先達を先頭に、 旧暦六月一日に (浅間講) に伝 お山が大菩薩、 オヤマガ 太鼓 続 宿

ける。麓から高幣がよく見えるよう気を配る。前年のものを回収し、合わせて山で清める。祭礼当日は、これを浅間山に担ぎ上げ、小祠背後の杉の大木に縛り付三十日の朝には、竹を採取して高幣を用意する。背の高い幣竹を製作して海中

り行事』)。

い行事』)。

がや榊は、各戸で家内安全、五穀豊穣の守りとして神棚に祀る(以上、『祭た、行き会う人たちを榊の枝でたたきながら(シバタタキ)、その枝を渡していた、行き会う人たちを榊の枝でたたきながら(シバタタキ)、その枝を渡していた、行き会う人たちを榊の枝でたたきながら、地内の崇敬者の家々に配ってまわる。ま中で榊の枝を採取して(シバという)、山を下る。これで精進明けとなり、先達

*

*

道中歌・浅間祭歌から探る富士信仰

六

は小山 もの、 のではないが、ここではこれら全体を「道中歌」と呼称する。 などにおいて歌い踊るもの、 ヤママチなど)に歌い踊るもの、 士踊がともなう例もある)、⑤富士参り中に留守宅を預かる者たちが行う行事 講 に先立って富士ゴリ りには、 以上見てきたように、 (登山者) が自ら歌い踊るもの、 ②浅間祭などの儀礼の場で歌い踊るもの、 (津市一志町) 以南に伝承されている ([付編1] 参照)。 歌や踊りがともなうものが少なくない。繰り返し述べてきたように、 (垢離) 伊勢志摩や東紀州の富士講 などに分けることができる。厳密に区部しきれるも や浅間宿、 ⑥富士講 ④富士参りの一行を見送る側が歌うもの トウヤ (登山者) (当屋、 ③富士参りに旅立つときに富士 (浅間講) が富士詣りの行程で、 頭屋) ①山開き (浅間祭) において歌い の祭行事・ ·富士参 Ш 歌

【浅間宿・トウヤの祭などで歌うもの】富士垢離と山開きにともなう神事を一体して見ていきたい。

では、どのような場で、どのような歌が歌われるのか、「場」

や「場

面

に即

向かうが、そのときには道中歌を歌う(付③)。
無、浅間、大菩薩)と合いの手を入れる。屋内での祭を済ませ櫛田川の垢離場に合わせて一同が輪になって踊り、歌の間に「ナーム・センゲン・ダイボッサ」(南は頭屋の座敷に設えられた祭壇の前で歌う。先達が音頭を取って先唱し、それに化して、浅間祭として行う事例が、旧飯野郡や旧多気郡にある。松阪市上七見町

りを歌いながら輪踊する。富士権現の神名を歌う唯一の例である(付⑤)。 当屋から祭場となる「権現松」に往来するが、同所では富士権現を迎える松の周歌い出す「カーアルカーレの歌」と、「踊りの節」で歌うもの(道中歌)がある。 多気郡明和町前野では、「さては日の本 富士権現のヨー」と〔練歌の節〕で

町西条、付⑧)、あるいは、「今日はお富士へ立つ様に が見られる。「やがてお富士にたつ程に いざや人々こりをかけ」(伊勢市東豊浜 水垢離や海水に体を浸して行う潮垢離があり、 市志摩町)のお精進などのように祭礼化されたものも少なくない。川などで行う 富士ゴモリ (度会郡南伊勢町方座浦、 (富士籠) 山開き前の五月二十八日に垢離をとる。富士ゴオリ(富士垢 などと呼ばれ、 付⑱) と歌う。 志島(志摩市阿児町) 地域の条件によって垢離場に違い うしろ精進を良くめされ_ の総垢離、 和具 離)・ 同

伊勢国内から出ないことから、これを「国参り」と呼ぶ。て富士を遙拝する。さらに、天候や暇乞いを歌って、出立の日を迎える(付⑭)。て富士を遙拝する。さらに、天候や暇乞いを歌って、出立の日を迎える(付⑭)。

n や土路(伊勢市東豊浜町)などには、出発や見送りにともなう儀礼が伝わっている。 士講は日を選んで登山 [出立] 道中は、 小俣地内の下小俣では、 Ш IIよかれ 軽かれ軽かれ デタチ (富士参り) に出発する。 (出立) と道中に区分することができる。 富士講 足も軽かれ (登山者) 山もよかれ」と歌って道中と登山の を見送った留守家の男衆が、 度会郡の小俣 (伊勢市小俣町) 山開き後、 「軽か 富

照)。合、それぞれ決められた地点まで、富士踊と歌で見送る習慣があった(三章参合、それぞれ決められた地点まで、富士踊と歌で見送る習慣があった(三章参安全を祈念する。同所には船を利用して出立する場合、徒歩で参宮街道を行く場

りがたやー ありがたやなー ハイヤー これを歌うことはない。 五合目、頂上の三ヵ所でこの笹踊の歌を唱和した(三章参照)。 和三十一年(一九五六)の富士参りには、麓の浅間神社 イヤー 参する。また、「おんまか、きゃろにきゃ、そわか」の「真号」(真言)を唱え、「あ を読み上げる。 蓬莱山由来」(富士縁起) 土路では、 またまいろ」のササオドリ 富士山 登山に先立って書写して巻物に仕立てておいて、これを登山に持 へ出発する代表者が、 と「謹請再拝々々」で始まるオノット (笹踊) めでと 地内に築造した蓬莱山 の歌 げこして またまいろー (付⑦)を歌って出発する。 (北口本宮、富士吉田市)、 見送る家族たちが の上で、 (祝詞、 「富士 祭文) 昭

両宮(内宮・外宮)に参詣して、河崎から夜船に乗った(付⑩)。 度会郡南伊勢町切原では、「家を出奔」するように発つと歌う。剣峠を越えて

かまぜ ٤, 渡るまで、 市)に到着した(付⑥ほか)。風について、「南の風」 【道中】船は伊勢湾・三河湾を「真西の風」を受けて進み、吉田湊 岩本 (富士市)・大宮・村山 (真風) か」 東海道の宿場を通り抜けていく。 (付⑩ほか)と歌う例もある。下船して吉田宿から富士川を (ともに富士宮市)と、 富士川を越え、 (付⑧ほか)、「まにし 麓へ近づく。 東海道から分岐する (愛知県豊橋 伊勢市二

ほのことでは、富士川で垢離をとると歌う (付⑥)。

た。文政九年(一八二六)に村山で版行された道中案内と解される。山ら登山導者ヱ被相渡申候品」「文政九年戌七月、此書付拙者手二入申候」とあっいる刷物がある。本文に先立ち「富士道中入口」と大書するとともに、包紙には「村いる刷物がある。本文に先立ち「富士道中入口」と大書するとともに、包紙には「村いる刷物がある。本文に先立ち「富士道中入口」と大書するとともに、包紙には「村いる刷物がある。本文に先立と、後者の垢離場(潤井川との合流点付近)は重要富士川に続き、凡夫川を渡る。後者の垢離場(潤井川との合流点付近)は重要

むかふへこし、左へ入、ふんぶ川ゟ、てんまさわ村ゟ、いしわら村ゟ、村山ふじ川ゟ村山へ三りよ、ふじ川舟ばより左り、いわもとより右、ふんぶ川を

を渡り、最終的には村山へ導く。 富士川左岸の船場より左に折れ、岩本(富士市)から道を右へ取って、凡夫川

ていた。 でいた。 でいた。 でいた。 でいた。 でいた。 でいた。 では、「自己が、大きな結界の地となっていた。ここで 対岸すなわち富士山方面に渡るところが、大きな結界の地となっていた。ここで 対岸すなわち富士山方面に渡るところが、大きな結界の地となっていた。ここで 対岸すなわち富士山方面に渡るところが、大きな結界の地となっていた。ここで 対岸すなわち富士山方面に渡るところが、大きな結界の地となっていた。ここで が正離を取り、懺悔文を唱えた。先述した村山で版行された「案内書」には、「富 士山村山別当惣役人」が示した「さんげのもん」(懺悔の文)が合わせて刷られ でいた。

はせんけん大日によらい、一二らいはい、なむせんげん大ぼさつさんぎさんげ、ろッこんせうぜう、おしめにはつだいこんごうとうじ、ふじ

南無浅間大菩薩」と八回唱えることを奨めている。〔境界の場であることを標示「慚愧懺悔、六根清浄、御標に八大金剛童子、富士は浅間大日如来、一に礼拝、

これは八度とのうべし

と説いている。であるので、ひとえに礼拝し、「南無浅間大菩薩」と八度繰り返して唱えなさい」であるので、ひとえに礼拝し、「南無浅間大菩薩」と八度繰り返して唱えなさい」する「御標」には、神子神である八大金剛童子が出現する。富士は浅間大日如来する「御標」には、神子神である八大金剛童子が出現する。富士は浅間大日如来

士宮市粟倉)から村山へと案内している。間)を過ぎ、富士上方と同下方の境に沿って、「天間沢村」(天間)、「石原村」(富道中案内は、垢離場の先で「左へ入」=道を左に取り、見留目神社(富士市天

取り(中道往還)、大宮(本宮浅間大社)の湧玉池で垢離をとるというのである。 が存在する。 大宮町の入口(源道寺、富士宮市弓沢町)には、 している中宮八幡社に対する「若宮」として祀られたものと考えられる。また、 沢村」から大宮へは、この社頭を通過することになる。同社は、富士山内に鎮座 などと表記されているのが、富士宮市小泉に鎮座する若宮八幡宮である。「天間(3) 天正五年(一五七七)の と歌う(付⑦)。凡夫川から天間沢へ向かうのではなく、名所である大宮へ道を しょおおみやこーりをかけ」(とうに程なく岩本過ぎてな 方、 土路(伊勢市東豊浜町)では、「とうにほどなく岩本すぎてな」「め 同社も小神のひとつといえよう。 「富士大宮神事帳」に「成出若宮」「なりてのわかミや」 小浅間神社 名所大宮垢離をかけ (現日の出区公会堂

囲を見渡すことができる。やがて村山に到着する。この村山までが、「道中」と 増す参詣路の中にあって、 名が存在する。すなわち 衣)に着替えて富士袈裟を掛けるので、それが目印となるというのである。 ける。「同行」(道者衆)は湧玉池における垢離の後に、ヤマユカタ ゆかたにけーさかけて」(我が同行に印がござな よ」と歌う(付⑩)。土路では、「われが 度会郡南伊勢町切原でも、「大宮浅間で 村山の手前は石原である。その付近に「田上原」(でんじょうばら)という地 「禅定原」と認識されるところであり、少しずつ傾斜を 傾斜の緩い平坦地である。 同行に 御体を清め 白い浴衣に袈裟掛けて)と続 しるしがござな」「しろい 眺望に優れ、 お山する身の ここからは周 (山浴衣= 嬉しさ

いうことになろう。

お山を を歌う。ここで初めて「ありがたや」の歌詞が登場する。 近い「おむろ」「御むろ」=室大日を過ぎ こそずやかや山を」と「茅山三里」のことを歌うが、それ以上の具体的な場所に であろうか。二見町江 をみた」と続ける(付⑫)。一般的な認識としては、村山を出発してからが「お山 合室にて夜をくろめ 付近では「富士の八合で ので白鷺踊と称された。 かしらさぎ(白鷺)か」(⑮贅浦)と白鷺踊を踊る。踊りは白い山浴衣姿で踊る 道者か白さぎか」 はふれていない 域として意識されたのだろうか。 不動の滝にて垢離をかく」「富士の裾野で昼寝をしたら 富士山は、 夜山にかけて」(⑤前野)進み、「お富士お山に白いものなんね (付⑥)。「中宮の八幡」「一の木戸」(⑫田曾浦) (⑥ 江)、 いったいどこからが「富士の御山」(富士山)、 御来迎拝むありがたや」(⑫田曾浦) (伊勢市) にあっては、「富士のお山にさしかかる 土路のササオドリ 御来迎様を 「富士の御山にちんちらちらと 田曾浦 拝む心の (南伊勢町)では、「村山宿場にはやつ (笹踊) にあたるものであろう。 (⑦土路·⑧西条·⑪神原)、 ありがたや」(⑩切原)、 お山どしやす と、 御来迎 や、森林限界に 山がよいとの夢 つまり信仰領 (御来光 「富士の お伊勢 (道者) 八合 馬で

表

(大日)と裏(薬師)

を対比して示す歌詞は、

⑩切原・⑫田曾浦にも見出すこ

ところで、

前野では、

「表大日」「お裏は薬師」と歌う

(付 ⑤)。

このように、

果たすと、「近江道者と田曾道者 というて拝む」と続く。数珠と袈裟 とは嶽大日(表大日)のことで、村山口の頂上をいう。「数珠と袈裟をば大日様 曾浦のように八合で拝む事例と、ここに掲げた頂上で拝む事例、この両様がある。 【頂上】登頂を果たすと、「お八丁めぐりてありがたや |曾浦では、「大日峠に上がりてみれば 「剣ヶ峯から薬師ヶ岳へ かけた心のありがたや」「富士のお山で何というて拝む お八丁巡(お鉢巡)や御来光を歌う。御来光については、 かけた心のありがたや」とお鉢巡を進める。 裏の薬師で踊り合う」。さらに「裏と表の御判 (富士袈裟)を大日如来の尊像に懸け、 鐘の響きでいさみたつ」と歌う。「大日. 拝み申すぞご来光」 所ごはんじょ(繁盛) 先の切原や田 結願を さら (6)

> うに 計回りに四周する。 切原の浅間大祭においては、 とオノット(祝詞、祭文)に、久須志神社 拝道中唄」 上、付⑫)。 を受けて 「御判を受けて」の文言こそないが、現在でも、 付 ⑩ 下降(下向)する心のありがたや」と登頂のありがたさを繰り返す(以 土路に伝承されている「道行唄」(道中歌)には、 のうち、 「お山の歌」と括られる四首を歌いながら、 浅間山の山頂で、 (裏の薬師)で「御判」を受けている。 同地に伝承された「切原富士 持参した巻子仕立ての縁起 田曾浦の事例のよ Щ 頂を時 Ш

延四年 Щ₃₅ きととらえられよう。 案内に「富士山表口拝所」と大書するのも一 ふれた文政九年(一八二六)に村山で版行した道中 が一般化する十九世紀ころのことと考えたい。 士山表口真面之図」「駿河国表口図」 るが、こうした「表」「裏」の認識が強まるのは、「富 それぞれ歌う。大宮に近いところでは、 「当夏裏口薬師嶽致登山」といった記述が現れ (一七五一) の時点で、「裏口浅間駒嶽致登 といった表現領 たしかに寛 連の 先に

鏡坊が、 あった。 ある登山口から登り、 「導者帳」を繰ってみよう。 自坊に立ち寄った道者についてまとめ 試みに、嘉永元年 別の登山口 (一八四八) 降ることも に村山の大 た帳

この年の六月、 に詣で、 大鏡坊に世話になった富士講は五組九三 度会郡小俣村 (伊勢市 から富士

Ш

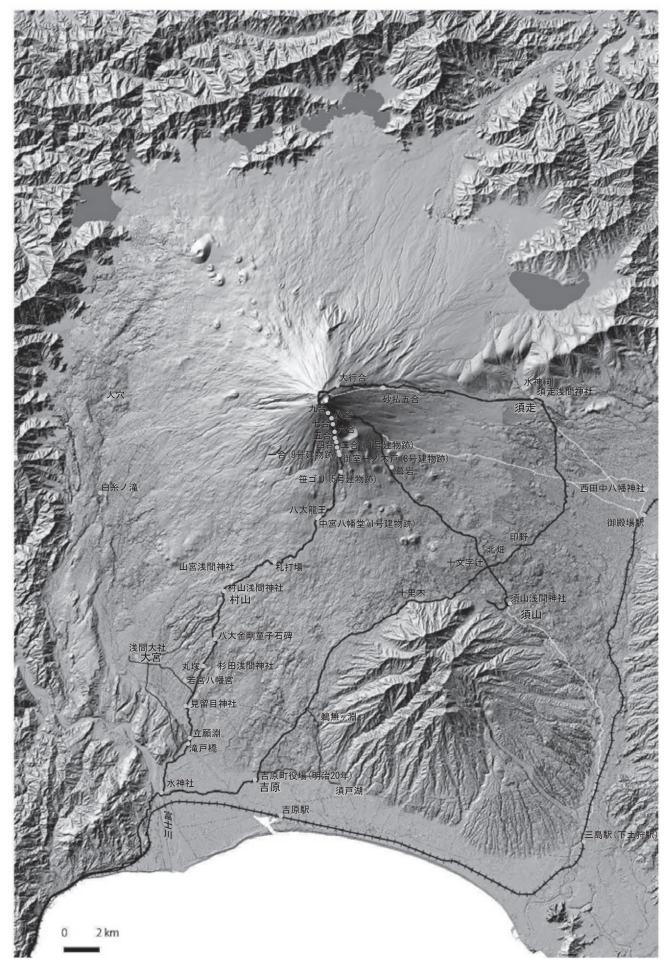
簿



【写真5】「御判」を据えた祝詞

伊勢市東豊浜町土路

とができる。また、⑪神原や⑭南張では「うらの薬師」、⑯東宮では「表大日」と、

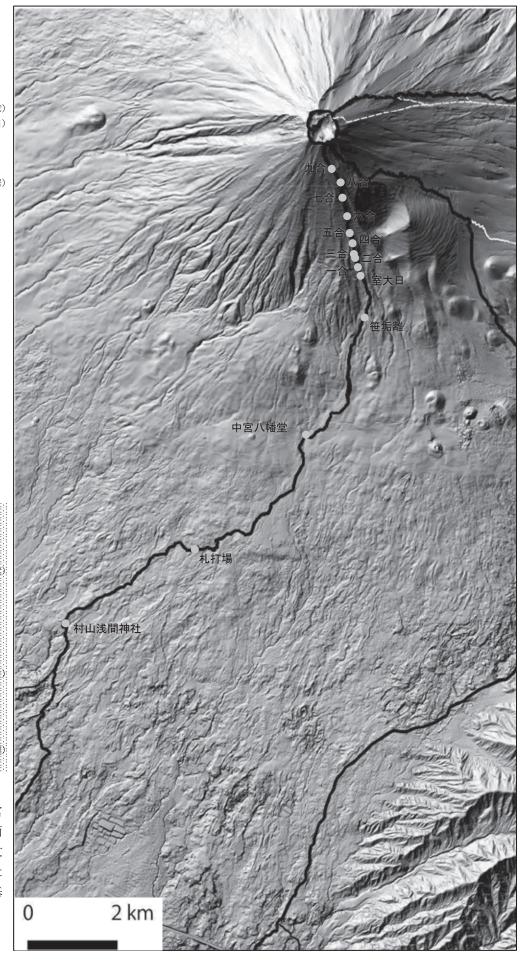


【図3】駿河南面と東面の登山道

*国土地理院「陰影起伏図」に加筆した。(村石眞澄作図)

(阿弥陀) 権太夫室 (嶽大日) 寛文8年(1668)6月 鈴鹿郡石薬師先達板倉権太夫: 講屋彦右衛門 再室 (嶽鳥居) 伊勢室 (九合) 寛文5年(1665)6月 鈴鹿郡平田村野辺宮太夫抱伊東 六太夫・富沢重左衛門・九郎兵 衛 再建 (八合) (七合) (六合) 伊勢室 (五合) 寛文4年(1664)閏5月 鈴鹿郡小田村講屋磯部治郎助・ 疋田伊兵衛 再建 (四合) 伊勢室 (綾小屋・綾室) (三合) 寛文7年(1667)6月 飯野郡大宮田先達綾笠太郎五 郎・講屋勘兵衛・九郎右衛門・ 田村七郎兵衛・武右衛門・多兵 (二合) (砂振) 伊勢室 (普浄) 寛文10年(1670)6月 一志郡須賀先達若太夫・講屋八 行者堂 (行者堂) 寛文8年(1868)8月 (度会郡) 大湊先達孫右衛門・ 田曾七郎〔田曾浦ヵ〕・植木兵 右衛門・北孫太夫、二見庄村富 士井形部、野尻村〔野後村〕西 村八郎兵衛 再建 室大日 (室大日) 寛文4年(1664)閏5月 河曲郡神部先達掃部太夫・講屋 八右衛門・辻間次兵衛・杉野孫 八郎 再建 (笹垢離) (矢立)

(註) 嘉永7年(1854)4月「富 士山室小屋建立古帳面 写」(〔旧大鏡坊富士氏文 書〕K64、『村山浅間神社 調査報告書』所収)に基 づき作成した。



【図4】村山口登山道

*国土地理院「陰影起伏図」に加筆した。(村石眞澄作図)

人に及ぶ。①二十五日に一九人、②翌二十六日には二七人、③二十七日にも一七人、ひらに④同日別グループの一七人、⑤七月一日に一三人が、それぞれ下山時た、このように特記されたのではなかったか。登山・下山の両度立ち寄ったため、このように特記されたのではなかったか。登山・下山の両度立ち寄ったため、このように特記されたのではなかったか。登山・下山の両度立ち寄ったため、このように特記されたのではなかったか。登山・下山の両度立ち寄ったため、このように特記されたのではなかったか。登山・下山に利用する口が異なため、このように特記されたのではなかったか。登山・下山に利用する口が異なため、このように特記されたのではなかったか。登山・下山に利用する口が異なため、このように特記されたのではなかったか。登山・下山に利用する口が異なるのは、むしろ当たり前だったのかもしれない。大鏡坊の帳簿に戻ろう。

須山の「近さ」を感じさせる。 楽之伝」)が残る。 噴火により途絶していたが、安永九年(一七八〇)に再興された。復活を期すこ(※) 下吉田)から導入されている。須山に隣接する北畑村に神楽の古い伝習書(「神 い時期 村山に下山したこれらの富士講が、どこの登山口を登ったかは明記されていな 須山口に伊勢の大神楽 須山口の利用が想定されよう。須山口は、 須山にも同様の (獅子舞) 「御神楽辻引之事」が伝来している。 が「甲州郡内鶴郡吉田」 宝永四年(一七〇七) (富士吉田市 伊勢と 0)

る。 ⑪)。吉原から十里木 こは須走り大ざるがくよ 勢町神原 走りへ須走りへ」「いんの・十力早や打ち過ぎてをがて須走り程近い程近い」「こ さらに進んで須走(駿東郡小山町) 神津佐の一行が、 (神津佐) のものである。「ここは吉原左へとりて 急ぎましょやれ須 (裾野市)・印野 須走口を登山口に選んでいたことが知られる。 つきしこころは有り難や有り難や」と歌い継ぐ を到達地とする道中歌がある。 (御殿場市) を経て須走の大申学へ投宿す 度会郡南伊 付

までを記録している。ここには、神津佐と並んで、江・切原両村の名を見出すこれた大申学の「道者付帳」は、安永二年(一七七三)から嘉永三年(一八五〇)神津佐以外にも、須走口を登山口に選んだ地域(講中)がある。先にも少しふ

とは注目されてよいだろう。 須山を通り越し、須走口から登頂していたこ須山を通り越し、須走口から登頂していたことができる。道中歌にこそ歌い込むことはなとができる。道中歌にこそ歌い込むことはな

ご来光を拝する地点として、八合目および 頂上の両地点があったことは先述した。八合 目で拝すると歌う歌が、⑩切原、⑪神原、⑫ 田曾浦、⑰神前浦の四地点に伝わっている。 これは、東口(須走)からの登山を前提にし これは、東口(須走)からの登山を前提にし

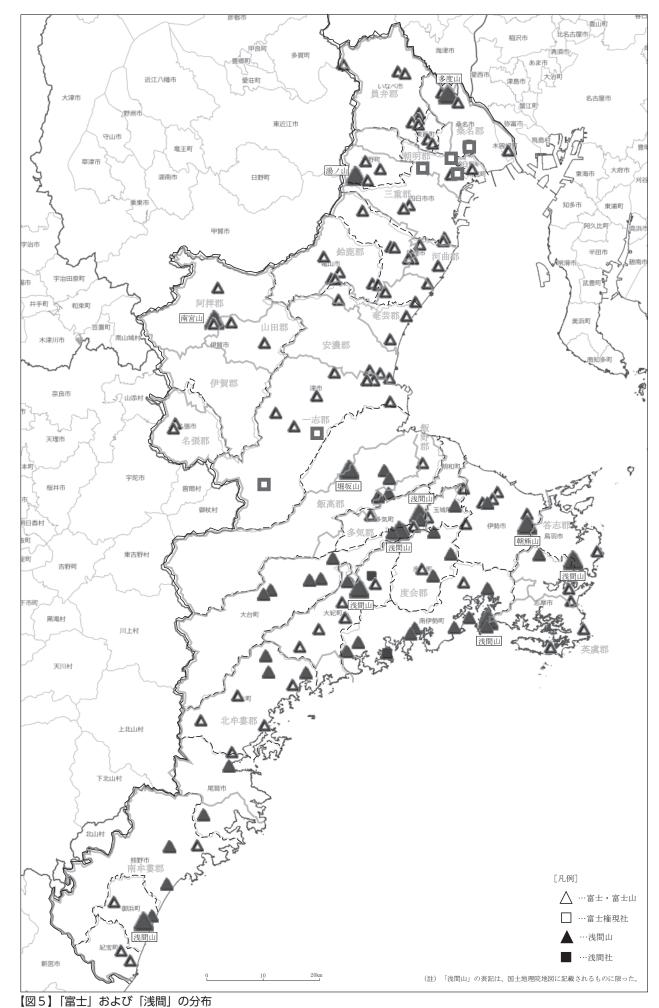
記録している([付編2]参照)。よび⑪神原の富士講の須走口からの登山については、先に引いた「道者付帳」,

おりた れる利生・利益について歌う(付⑦)。 かねがふるな うちは でりでやーまよかれ」と、ここでは天候を歌う。 宮八幡と砂払を歌う(付⑫)。土路では、「八丈 下回 こころはあーりがたや」「にしが 田曾浦では、 「中宮の八幡はやさがり しらげのよーね (米 くもれば がふる」と登拝によってもたらさ まわりて すなおりおりてな いざや人々砂うちはらう」と中 下向後には「野でも 雨となるな ひがし ひ

という。その江では、「お富士まいりの下向には いり (参り) よかた お富士土産に、 を「御富士御山は恋の山 浦 この西条の事例のように、土産について触れた歌は数多い。杓子が最も一般的 の禊浜での揚垢離 江では「足も軽かた山もよかた「宿ん亭主はなおよかた」と歌い、 札 神札 げこ (下向) よかたな とまりどまりのやーど (精進揚)について続ける(以上、 目出度下向して又詣ろ」と締めくくる。これに先立ち、 に添えて杓子を貰ったと歌っている 清き渚につきける」と、 付 ⑥ 。 以上、 西条は旅の最後 (宿) よかた_ 土路は 二見 ま



【写真6】大申学と富士山 駿東郡小山町須走



*国土地理院ウェブサイト(https://www.gsi.go.jp/top.html)掲載の「地理院タイル」(白地図)に加筆した。

軸や扇を添える。 ②本前浦・⑱方座浦では、さらに箸を追加する。 ②志島は飯匙杓子に掛加える。 ②神前浦・⑱方座浦では、さらに箸を追加する。 ②志島は飯匙杓子に料が、 ②土路・⑲ 大路・⑧西条・⑭道方の三所では、お札に杓子をだが(⑦土路ほか)、⑥江では「塗り杓子」、⑫田曾浦では「おたまじやくし」、

県熱海市)まで、足を延ばす富士講があったのではなかろうか。 ⑤贄浦や⑱方座浦では、「伊豆のお山のなぎの葉」を採ってきてほしいと歌って 「砂豆木里では、次回の参詣時には、「富士のお山」から「ナギ(梛)の葉を」採っ

る。このとき、富士講は富士踊りを踊る。 (4) 【**御礼参り**】伊勢市の小俣では富士山から下向すると、伊勢神宮に御礼参りをす

おわりに

ことによって、その場が富士山と一体化していくことになる。いる。富士権現を迎える依代で、そこでは歌と踊りが繰り広げられる。歌い踊る山(菰野富士)がある。中勢の明和町前野では、祭場に「権現松」が植えられては、「富士山」の名で信仰される山があり、その山頂や山麓には富士権現(社)以上、六章にわたって三重県の富士信仰について見てきた。桑名・朝明両郡に以上、六章にわたって三重県の富士信仰について見てきた。桑名・朝明両郡に

には土産に飯匙杓子を持ち帰るまでを歌い込む(付⑳)。 せっている。外洋に面した志摩市の志島では全二七番の歌詞を歌い継ぎ、つい江(いずれも伊勢市)などでは、登山に合わせて留守番の女性たちが歌い踊る形江(いずれも伊勢市)などでは、登山に合わせて留守番の女性たちが歌い踊る形江(いずれを伊勢湾岸から志摩半島に広がる浅間行事には、多く道中歌が用いられる。富士

道中歌や浅間祭歌を歌って浅間祭を行う事例は、熊野灘の海岸線に沿って、か

だいな 動力船になったのは明治末年のことである(『習俗調査』)。 ばいさのおしこむ船 村全体の祭礼となっており、 同地には、 ツオ漁の祝い歌に発展を遂げている事例もある つては紀伊国に属した尾鷲市三木里まで確認できる。 (鯛縄) 八丁櫓の鰹船が八隻くらいあったが、三~六丁櫓の小船が多かった。 でおはらい拾て あれはこの家のしるし船」と方座浦は祝い歌に歌う(付®)。 道中歌にも「家の部」などが付加されて家褒めやカ かつを釣れとのしるしかな」「はればいさこれ (南伊勢町方座浦、 祭は浅間講の枠組を越えて 付 ① ③ 沖

や踊りによって広がっていったと考えられよう。伊勢湾岸では、留守を預かる女小祠が祀られる浅間山に登って行うのではなく、砂浜にオオハッチョウ(八丈)が祭の中核となる。 の間りを歌いながら廻るハチジョウメグリ (八丈廻=お鉢巡)が祭の中核となる。

*

りとして、大きく発展した。

性たちの踊りとして、熊野灘沿岸では富士登山する男たち自身の熱狂的な歌や踊

の諸村からの参詣が多かったことがわかる。

〔一七〇七〕)以前の様子を示していることになる。一志郡から度会郡にかけてでの大宮への道者の到着の状況についてまとめてみた。宝永噴火(宝永四年での大宮への道者の到着の状況についてまとめてみた。宝永噴火(宝永四年

のころから、伊勢道者の須走への到着が増えたのだろう。村山よりはるかに北東の道者について専ら記すが、安永二年(一七七三)の記述から始まっている。こに【表3】を作成した。[付編2]に掲げた大申学の「道者付帳」は、伊勢からに【表3】を作成した。[付編2]に掲げた大申学の「道者付帳」は、伊勢からを、電泳噴火は伊勢からの富士参りにどのような影響をもたらしたのだろうか。

呼んだ。

るといえよう。

山からの登山が困難になっていたという事実を指摘することができよう。方へ回り込んだ須走に登山口を選ぶようになった要因として、宝永噴火により村

に組み込んだのは、 湖の位置を正確に示しえていないものが少なくない。須戸湖を内八海(富士八海 のが、 野郡の西黒部村 海巡」の行場のひとつに数えられた須戸湖(富士市)の西岸を北上して到達した とつとされたのが、二見浦 よう。 る。そうした信仰のあり方、 大申学の「道者付帳」の冒頭に江戸富士講の講印が並ぶのも興味深い。 須山であり、 江戸の富士講の修行に「八海巡」があった。その「外八海巡」の行場のひ (松阪市)には、いち早く江戸の富士講の影響が及んだようであ 明らかに南面・駿河側の事情によるものといえよう。 須走であった。 (伊勢市) である。その周辺を発った道者が、 伝播の過程などは、引き続き追究すべき課題といえ 北面・吉田口で描かれた登山案内図は、 中勢飯 「内八 須戸

らの参詣者も、 こととなった 士大神」の掛軸を懸けている。 士市)や、ここから道を左にとって須走(駿東郡小山町)へと向かう道筋を歌う む素地ができあがる。 須山や須走からの登山が普及すると、そこに至る道中の模様を道中歌に歌い込 (付⑪)。歌をともなわない祭事を執行する相賀浦 須走口を登っていた。 南伊勢町神原 (神津佐)では、富士川を渡った吉原宿 同所の浅間祭では、 須走で頒布された (南伊勢町) 「富 富 か

には、小明見(同市)から神子舞(五人囃)が伝えられた。3】参照)。須山に伝承される神楽は、須山口の再開を期して下吉田(富士吉田市)「天照太神宮」を掲げて執行する伊勢の太神楽が東面への道沿いに分布する(【図

郡長泉町〕)から登山したものと推定される。同駅からの登山道を「三島口」と東海道線の開通以後は、鉄道を利用して三島駅(現在の御殿場線下土狩駅〔駿東明和町前野では沼津(沼津市)や三島(三島市)の地名を歌っている(付⑤)。

伊勢町田曾浦〔付⑫〕ほか)。 年〔一八七二〕の両度〕を紹介しているが、同様の行為は、伊勢の富士講でも少 すものと考えられる。 下山した北面からの吉田口登山道の起点である吉田 には、下向の場面にかかわって「吉田通れば二階から招く」と歌う事例がある(南 師佐藤備前の原画に基づく版図を掛軸に仕立てている(三章参照)。 なからず行われていたらしい。五ヶ所浦(南伊勢町)の山方富士講では、 須山口から登って北面・吉田口へ降りた事例 岩科小一郎氏の『富士講の歴史』は、大和添上郡石打村 吉田湊の吉田 (東海道吉田宿、 (文化十一年 (富士吉田市) との混同を示 (奈良市) [一八一四] と明治五 愛知県豊橋市 の富士講が、 道中歌の 吉田 と

*

といえる。東日本、とりわけ北関東では、地名 ンゲンサン」(浅間山)になっていったものと考えられ ゲンヤマ」「アサマヤマ」の呼称は確認されない。中勢地域では、「センゲンサン」 マ」といい、 は 名称と分布に明らかな違い認められる。【表4】【図5】に示したように、北勢に (浅間さん)の祭を行うことを通じて、祭祀の対象、祭事の場となる山の名も「セ 最後に、 「富士」や富士権現が多く見られる。これに対し、中勢以南は 「富士」と「浅間」について考えてみたい。 浅間山を「センゲンヤマ」と呼ぶ。それに対して、 (字名) の「富士山」を「フジヤ 三重県の北と南で、 伊勢には「セン 「浅間」 の地域 その

勢と中勢・南勢に、それぞれ共存することは、伊勢の富士信仰の特徴を示していと認識して信仰する人びとと、「浅間さん」と呼んで、浅間祭を行う人びとが北名称を別にするあり方は、「センゲンサン」の称とは、そのあり様を異にしてお同山における祭礼を「ホッサカサン」と、それぞれ呼称する。山の名称と祭礼の浅間祭を執行し、「伊勢富士」の称をもつ堀坂山は、山名を「ホッサカヤマ」、浅間祭を執行し、「伊勢富士」の称をもつ堀坂山は、山名を「ホッサカヤマ」、

を受け入れる、そうした受け身の姿勢がうかがわれる。参詣の道者たちも、 といった表現からは、 簿冊が、 れる。伊勢に関して、 口を村山に固定することはなく、須山や須走などを適宜選択していたように思わ を開拓したようには思われない。史料も伝わっていない。「道者場」や「道者付帳」 富士山周辺に居住した社人や御師たちが、積極的に伊勢まで出向いて、檀那所 大宮や村山、 道者と師檀関係を結ぶのではなく、集団でやって来る道者 須山、 吉田の御師のもとに伝わる「檀那帳」(旦家帳)にあたる 須走に確認されないことも、 その裏返しと言えるだ 登拝

註

ろう。

- 1 ①堀哲『三重の文化伝承-動力化以前の民俗を対象とした実態調査報告-』(伊勢民俗学会) 究成果報告書]、二〇一八年)。 の近畿・東海地方における富士信仰の受容』〔平成26~29年度科学研究費補助金基礎研究C研 士山文化研究』六号、富士山文化研究会、二〇〇五年)、⑥山形隆司·获野裕子『17~19世紀 野村史隆「鳥羽市離島の富士講-答志島最後の富士参り(記録より)-」(『伊勢民俗』三四号、 諸相-西国の富士信仰受容の形態を通じて-」(『民俗宗教』2、東京堂出版、一九八九年)、 つりの事例から-」(『ソキエタス』一五号、一九八八年)、③同「地域社会における山岳信仰の 二〇〇四年)、⑤荻野裕子「南島町方座浦の浅間山-紀伊半島の小型富士調査に向けて-」(『富 九七八年)、②佐藤栄一「奥志摩南勢町の富士浅間信仰-切原・田曽浦のセンゲン(浅間)ま
- (1) 県教育委員会、 『三重県の民俗芸能』 『南勢町・南島町山漁村習俗調査報告書』〔三重県文化財調査報告書〕第15集(三重県教育委 一九七三年)、② 『三重県の民謡-民謡緊急調査報告書-』 (三重県教育委員会、一九九〇年)、 一九九七年)、⑤『三重県史』〔別編民俗〕 (三重県教育委員会、一九九四年)、④『三重県の祭り・行事』 (三重県、 二〇一二年)
- 3 郎 『富士講の歴史』 (名著出版、 一九八三年
- 4 ①永正九年(一五一二)ヵ「御炊坊導者帳写」〔公文富士氏記録〕三。冒頭に 全文を翻刻した後、「○本書、文中ニハ永禄トアリ、奥書ニハ永正ト書ス、疑フベシ。表紙ニ永 と判断したものか、 八木御炊官」とあったとするが、 「永正九年之古帳写」のみ追筆と判断したかは定かでない。 これについて「(表紙追筆)」と註記する。 「永正九年之古帳 すべてを追筆

元禄二年「駿州富士大宮本宮導者帳」〔同〕四。以上『浅間文書纂』(官幣大社浅間神社社務所) 付帳」〔公文富士氏記録〕五、 正九年トアルモ、マタ其拠ル所ヲ知ラズ。」と註記している。②慶長十七年~元和九年「導者 九三一年、一九七三年に名著刊行会から復刻) ③延宝四年「駿州富士本宮導者帳」〔四和尚宮崎氏記録〕三、④ 所収

- (5) 年未詳「大宮導者坊記聞」〔案主富士氏記録〕五(前掲註 <u>4</u> 『浅間文書纂』所収
- (6) 「立利村」(『三重県の地名』 (平凡社、一九八三年))。
- (7) 嘉永七年「富士山室小屋建立古帳面写」[旧大鏡坊富士氏文書] 刊『村山浅間神社調査報告書』、二〇〇五年) K 64 (富士宮市教育委員会編
- 8 申六月十七日「峯川崎村大先達伊藤筑前正書状」(一和尚宮崎氏文書)五(前掲註(4) [浅間文書纂
- (9)(年未詳)「(道者国分并郡分控帳)」〔四和尚宮崎氏記録〕五(前掲註(4)『浅間文書纂』所収)。

- 明治三年「国分并郡分控帳」〔四和尚宮崎氏記録〕七(前掲註(4)『浅間文書纂』所収)

10

- 11 富士吉田市史編さん室編『上吉田の石造物』〔富士吉田市史資料叢書〕11(富士吉田市教育委員 会、一九九一年)
- $\widehat{12}$ 天保十二年「富士登山導者人別改帳」〔本庄邦久家文書〕 産保存活用推進協議会、二〇一六年)。 会編『富士山』〔山梨県富士山総合学術調査研究報告書2・資料編〕、 (山梨県富士山総合学術調査研究委員 山梨県富士山世界文化遺
- 『諸国図会年中行事大成』巻三下。国立公文書館デジタルアーカイブにより閲覧

13

- 14 「富士垢離」(『日本国語大辞典』 (第二版) 11 小学館、 二〇〇一年)。
- 15 井野辺茂雄 『富士の歴史』 [富士の研究] I (古今書院、 一九一二年、 一九七三年に名著出版よ
- $\widehat{\underline{16}}$ 「久波奈名所図会」(久波奈古典籍刊行会編『影印校注久波奈名所図会』中〔光書房、一九七七年〕
- 17 「山村」「大矢知村」(『三重県の地名』 〔平凡社、 一九八三年])。
- 18 堀坂山の山名は、「ホッサカヤマ」であって、「ホッサカサン」は祭礼を意味する
- 19 切原については、 平成十四年(二〇〇二)ほかの現地調査により得られた成果を加筆した。
- 20 確認できる。翌三年からは、四郎兵衛に替わる。同人は元和九年まで七年連続して参詣してい 前掲註(4)②帳の記述による。慶長十七年六月八日条に、先立彦左衛門に引率された参詣者 やかさ (綾笠)」の註記がある。立利の彦左衛門については、 二三人の到着が記録される。この一行にかかわり「いせ(伊勢)之内たてり(立利) 元和二年まで、都合三回の参詣が ノ、但あ

- 門の名は、前年十七年にも見える。なお、【表2】参照。これは「いせ之内大さすノ」の註記をともなう。これを「おいず」=大淀と推定した。弥右衛る。また、先立弥右衛門は慶長十八年五月二十八日条に、同人率いる二二人の到着が記録される。
- その中で「富士講」についても紙幅を割いている。(21)『小俣町史』〔通史編〕(小俣町、一九八八年)は、第六章「民俗」第一○節を「信仰」にあて、
- (22) 『南勢町誌』(南勢町、一九八五年)。
- の聞き取りにもとづく。なお、同地には、平成三十年(二〇一八)六月に調査に赴いた。(24)志島在住の上村莞爾氏より資料の提供を受けた。以下の志島にかかわる記述も、多く同氏から
- (25) 平成五年(一九九三) 六月二日の現地調査に基づく。
- 内各地の浅間祭」に詳しい。 内各地の浅間祭」に詳しい。 内各地の浅間祭」に詳しい。
- (27) 平成二十六年(二〇一四) 六月二十二日、北出正之氏撮影の一連の写真による。
- (28) 『南島町史』(南島町、一九八五年)。
- (29) 「三重紀北町海山区の浅間さん」(『封堠』二九号、二〇一一年)。
- 現在白浦神社では七月の第三土曜日に「大白祭」を執行する(前掲註(6)『三重県の地名』ほか)。(3) 白浦の大白浜に鎮座していた大白浜大明神は、同じく白浦地内の白浦神社に合祀されている。
- 前掲註(21)『小俣町史』〔通史編〕。

31

- 所収)。また、前掲註(15)『富士の歴史』三〇四・三〇五ページに写真が載る。(33)文政九年「(村山浅間別当頒布案内書)」〔四和尚宮崎氏文書〕三九(前掲註(4)『浅間文書纂』
- このほか『静岡県史』資料編8〔中世四〕にも翻刻される(一〇五九号)。(34)天正五年五月二十一日「富士大宮御神事帳」〔本宮記録〕二(前掲註(4)『浅間文書纂』所収)。
- (35) 寬延四年六月「(富士山駒嶽小屋主証文写)」〔本宮文書〕 | 三(前掲註(4)『浅間文書纂』 所収)
- (36)寬延四年六月「(富士山山名主証文写)」〔本宮文書〕一四(前掲註(4)『浅間文書纂』所収)
- 吉田市歴史民俗博物館蔵)。ともに富士吉田市歴史民俗博物館編・刊『富士山登山案内図』〔富(37)「富士山表口真面之図」(江戸時代末期、神宮文庫蔵)、「駿河国富士山表口図」(江戸時代、富士

- 士吉田市歴史民俗博物館企画展図録〕(二○○○年)に写真が掲載されている。
- 「旧大鏡坊富士氏文書」K-77(前掲註(7)『村山浅間神社調査報告書』)。
- 告書』二〇〇九年)。 ち書』二〇〇九年)。

<u>39</u> <u>38</u>

- 所で関説する。(⑷)静岡県教育委員会文化財保護課編『沼田の湯立神楽』(静岡県教育委員会、二○一六年)が、各
- (41) 前掲註 (39) 『富士山須山口登山道調査報告書』の巻頭に写真が載る。
- (42) 前掲註(21) 『小俣町史』〔通史編〕。
- (4)「伊勢国壱志郡(導者参詣記)」〔旧大鏡坊富士氏文書〕 K-16。富士宮市教育委員会より資料の
- (45) 前掲註(40) 『沼田の湯立神楽』。

(付記)

た。厚く御礼申し上げます。 本稿をなすにあたり、三重県方面の多くの方々に、ご教示や資料の提供をいただきまし

今回、同地の富士信仰について取り上げたのは、郷土の先輩で民俗学の研究者であり、今回、同地の富士信仰についてなど指導をいただきました。本当にありがとうございました。 1、富士山の調査研究についてもご指導をいただきました。 本当にありがとうございました。 1、富士山の調査研究についてもご指導をいただきました。 本当にありがとうございました故 1、富士山の調査研究についてもご指導をいただきました。 本当にありがとうございました。 1、富士山の調査研究について取り上げたのは、郷土の先輩で民俗学の研究者であり、 今回、同地の富士信仰について取り上げたのは、郷土の先輩で民俗学の研究者であり、

【表1】 大宮道者坊の道者場と到着

							1). 为心净*/)		
10	9	8 7		51	4	ω	2	Н	
会院市市中央 5 会	新展市は圧りり 鈴鹿市は川原町 鈴鹿市中富田町 鈴鹿市西富田町 鈴鹿市加佐登町ほか 鈴鹿市加ケ田町	鈴鹿市国府町 鈴鹿市岸田町 鈴鹿市石薬師町 鈴鹿市七郎町	四日市市和無田町 四日市市鹿間町 鈴鹿市平田町	鈴鹿市稲生町	鈴鹿市四条町ほか	四日市市赤水町	桑名市太夫	桑名市長島町	(現行地名)
								伊勢	(H
9.鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴鈴 5.進度應應應應應應應應應應應應 8.郡郡郡郡郡郡郡郡郡郡郡郡郡郡郡郡郡郡郡	虾鈴鈴錦錦 给战战 经延度度 医腹膜腹膜 医动动动 动动 可思想 打 打	等 無 無 無 無 無 無 無 無 無 無 無 無 無 無 無 無 無 無 無	鈴鹿郡 鈴鹿郡 鈴鹿郡	奄芸郡	河曲郡	三重郡	桑名郡	桑名郡	(郡)
库広梁伊伊 長 長 小 小 山 大 原 南 北 上 田 瀬 溝 船 船 紀 沢 社 岐 本 久 村 畑 畑 野 村 村 野 村 野 村 賀 村 村 村 村 村 村 村 村 村 村 村 村	正汲中西高小 海时间值 化加朗朗雷雷克田田 智斯斯里田村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村	国	和無田村 鹿間村 平田村	奄芸郡 稲生村	河曲郡 出若松村ほか わかまつ	赤水村	太夫村	城下町屋	(村など)
				いのふ	カカまつ	あこう川 (赤水ヵ) あこう川七郎左衛門 尉殿	あさけのこをせんた 町しん大夫 町しん大夫 あさけの口口しん大 夫	なかしま	永正 9 年(1512) カ
				いのふ村					17世紀初頭
い さ ひ <u></u>									延宝4年 (1676)
		国府村) 元禄2年 (1689)
库広梁伊伊县基本小山大原南北上田東瀬溝丹丹沢沢社域本人村畑畑野村村野村町村野村野村大田田村村田田村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村	说出现的 以出现的 时间曾知识本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本本	开 明 田 本 本	和無田村 鹿間村		数条为				年未
				電 大 郡	# #	三重押郡郡	朝明期期	秦 名	年
				阿坝坎功分	1	》 春長分 『 頼母坊分	1 御炊坊分	『 頼母坊分 『 土 Ē 六	
	形()		新鹿型 演成初五	以					明治 3年(1870)
	(五合) 小田村! 治郎助ほか1名	製大日) 権太夫、	ħ合)平 抱伊東						備
	(五合) 小田村講屋磯部台郎助ほか1名	(嶽大日)石薬師先達板 倉権太夫、講屋彦右衛門	(九合)平田村野辺宮太 夫抱伊東六太夫ほか2 名						参
	壓 緩 喪	先達板 右衛門	辺宮大 ほか2						

22	1	2		1	 90										18		17	16		15	14	12							11
松阪市松ヶ島町 松阪市本町ほか	松阪市飯高町宮前	松阪市飯南町粥見	松阪市飯南町深野 松阪市飯南町横野		津市美杉町太郎生 津市百木町	津市美杉町杉平	津市美杉町石名原 津市美杉町三名9	年市	津市美杉町八知	津市美杉町八字保津市美杉町下之川	津市美杉町竹原	津市日山町 4月 月 津市白山町 福田山	津市白山町北家城		津市白山町三ヶ野	津市一志町波瀬	松阪市嬉野島田町	松阪市嬉野須賀町				津市美里町三郷 津市 島崎町	亀山市小川町		亀山市安坂山町	亀山市辺法寺町	亀山市両尾町	亀山市太森町	亀山市長明寺町 亀山市川崎町
一志郡 松ヶ島村 松坂城下	吸回却 ド 他 到 也 は か ・		飯高郡 深野村飯高郡 横野村		一志郡 太郎生村			一志郡 川上村	_	一志郡 八手俣村 一志郡 下ノ川村		一志郡 具見朽 一志郡 福田山村		一) 一) 一) 一) 一) 一) 一) 一)			一志報 島田村	一志郡 須賀村		神戸村	ナ- 三本 三本 こ	安濃郡 栗原村 くりは	新鹿郡 小川村			新鹿郡 塚) 長門 鈴鹿郡 辺法寺村		鈴鹿郡 太田村 谷庸期 毕森村	鈴鹿郡 長明寺村 鈴鹿郡 川崎村
																				>	* (1)	はし(栗原ヵ) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・							
														は、このよる可引力	- 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1														みね
松ヶ嶋 松坂町中	三文合へと三人の名字の一人の一人の一人の一人の一人の一人の一人の一人の一人の一人の一人の一人の一人の		深野村横野村	7 - 21413	 	校平村(杉平	石名原村 二油村	興 準 村 前 原 村	八知村	八手 人村 下ノ川村	分 原村	具見村 福田山村	家城村		三賀野村	波瀬村	鳴田村												
																							小川世	坂本村	が が 本 本 本	原尾约 辺法寺村	1年日本第二年日本	大田村	光
																		壱志郡 内記分					安濃郡 春長分						
				飯高郡 清長坊分																									
			「飯高郡深津村」*1					④に「是ハ川上ノ内」										(普海)須賀先達若太夫、 講屋八蔵	部太夫、講屋八右衛門はか2名	(室大日堂)神部先達掃									

		だろきら				郡 土路西條村	度会郡	伊勢市東豊浜町土路	47
(行者堂)大湊先達孫右 衛門ほか3名		(勢州 大みなと				郡 大湊村		伊勢市大湊町	
		•		といって		郡道村	度会郡	伊勢市通町	
				三ない。	かわさき	郡 川崎村	度会	伊勢市河崎	
			を った	を うた、	ようたとうせんたつ		度会郡	伊勢市豊川町ほか	
					# W #	郡 朝熊村	度会	伊勢市朝熊町	
3				いが、	うぢの、宇治い	曹/宇治	一庚会	伊勢市宇治館町ほか	41
(行有国) — 兒压的 届工 井形部			\$124	11 %	\$/27	部がおかいまる。	足以	伊勢巾―見叫荘はか	
l		ひる田村	1		Y	郡 昼田村		王城町昼田 日韓十二日町井 75.3	39
	渡会郡 春長分	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,					\		
		波多瀬村	73 20			郡 波多瀬村	多気郡	多気町波多瀬	
			しきぶ村(色太井・)			郡 色太村	多気郡	多気町色太	38
		多気村				郡 神坂村	多気郡	多気町神坂	
		五ヶ庄村(五桂 本ヵ)				五桂村	多気郡	多気町五桂	
		井生村(ゆふむら)				多気郡 御天村	X	多気則油天	
		· v				#	A I	2	
		四谷村(四神田				郡 四神田村	多気郡	多気町四神田	
		西山村				郡 西山村	多気郡	多気町西山	37
		西口上芍(治	いけん		-	郡 西池上村ほか	多気郡	多気町西池上	
		本					多気郡		35
					しきい (志貴ヵ)		多気郡	明和町志貴	
		- 中本				典		明和町中村	ယ္က (
					そぐで毎□(結合+)	期 浜田村		男利 男 浜 田 田 和 町 根 合	
			(大淀ヵ)	大 き す (大	おいし	郡 中大淀村ほか	多気郡	明和町大流 明	30
	多気郡 御炊坊分								
		いさわ村、射和村			くし(御田ヵ)	郡 樹田村郡 射和村	飯野郡 飯野郡	松阪市衛田町 松阪市射和町	28
か.4名 か.4名					•		A		
(三合)大宮田先達綾笠 十郎五郎						郡 大宮田村	飯野郡	松阪市大宮田町	
				3		郡 保津村	飯野郡	松阪市保津町	26
			たてり	オたっ、ナ	たてり	郡立利村	飯野郡	松阪市立田町	25
	飯野郡 春長分		であり和田舎			10000000000000000000000000000000000000	双向和	党 医电子型 日的	24
		大石村	世代 う男 言本					松阪市大石町 水原市翁田町 II I I	
		坂内村				郡坂内村	飯高郡	松阪市阪内町	
		大河内				郡 大河内村	飯高	松阪市大河内町	
		横谷村(横地					飯高郡	松阪市横地町	
		五曲村				型 方形曲村		校贩市内五曲町	
		新田村				期 新田村	飯高郡	松阪市喜多村新田町	
石灯籠「飯高郡下村」*2						関下社	飯高郡	松阪市下村町	
		大津村		_		郡 大津村	飯高郡	松阪市大津町	23

65 66	62 63 64	61	60	59	56 57		53		51 52				48
名張市 名張市薦生 名張市禁垣 田黒田	伊賀市才良 伊賀市東谷 伊賀市羽根	伊賀市下阿波 伊賀市	志麾市志麾町御座	志摩市浜島町南張	鳥羽市船津町 鳥羽市浦村町 志摩市磯部町恵利原	鳥羽市答志町	鳥羽市鳥羽ほか 鳥羽市桃取町		南伊勢町押淵 大紀町滝原	南伊勢町田曾浦	度会町牧戸 度会町平生	伊勢巾佐八町 度会町葛原	伊勢市東豊浜町西條 伊勢市村松町 田村十年 5町
<u> </u>		章 置 二 回			20 20 20	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	芯解	·	東東	- 英	東東	原 展	
名張郡 名張郡 薦生村 名張郡 奈垣村 名張郡 黒田村	阿拝郡 才良村 阿拝郡 東谷村 阿拝郡 羽根村	山田郡 下阿波村阿拝郡	英虞郡 御座村	英虞郡 南張村	答志郡 船津村答志郡 浦村答志郡 恵利原村	答志郡 答志村	 鳥羽城下 答志郡 桃取村		度会郡 押淵村 度会郡 野後村	会郡 田會浦	度会郡 牧戸村 度会郡 平生村	度会郡 葛原村	(会郡 村松村 ()
			いせしま (御座島、御座ヵ)			とうせんか嶋、とうし	も、とりかしま						7 24 C4
					らか		とバとはとハとば					2	k ; t
名 張 郡	寸 (東	あやの郡(阿屋郡)			いそべゑり原				おしぶち村野尻村				
1 やみむら	十 良村	あはだに		南針							横戸村 平生村	草葉村(葛原村か)	こし森
		四郡不残。春長分	御座嶋郡 御炊坊分	英虞郡 春長分		亀嶋郡 内記分	答志郡 春長分						
		伊賀国 春長坊分											
				:		: :			(行者堂)野尻村西村八郎兵衞	(行者堂)田菅七郎(田 曾ヵ)			

註(1)冒頭の数字は、【図1】のそれと一致する。

(2) 各データの典拠(①~⑦)は、以下のとおり。①永正9年(1512)カ「御炊坊導者帳写」〔公文富士氏記録- No. 3 〕、②慶長17年(1612)~元和9年(1623)「導者付帳」〔公文富士氏記録-※いずれも『浅間文書纂』(官幣大社浅間神社社務所編・刊、1931年)所収。 筑前正書状」[-和尚宮崎氏文書-No.5]、⑥(年未詳)[(道者国分并郡分控帳)](四和尚宮崎氏記録-No.5]、⑦明治3年(1870)[(道者)国分并郡分控帳](四和尚宮崎氏記録-No.7]No. 5】、③延宝4年(1676)「駿州富士本宮導者帳」〔四和尚宮崎氏記録 – No. 3】、④元禄2年(1689)「駿州富士大宮本宮導者帳」〔四和尚宮崎氏記録 – No. 4】、⑤申「峯川崎村大先達伊藤

(3)「備考」欄は、嘉永7年(1854)4月「富士山室小屋建立古帳面写」(「旧大鏡坊富士氏文書」K64、『村山浅間神社調査報告書』所収)に拠った。なお、とくに註記した*1については本文 註(12) 文書に、*2については本文註(11) 文献に、それぞれ拠った。

元和6年 (1620) 元和6年 (1620) 元和6年 (1621) 元和6年 (1622) 元和7年 (1622) 元和7年 (1622) 元和7年 (1623) 入数計 編 多 15人			庚申					
たでり 47人 たでり 2人 たでり 1人 たでり 28人 たでり 23人 たでり 1人 292人 先立四郎氏帝殿 四郎氏へ殿 四郎氏へ殿 四郎氏へ殿 31人 17人 17人 17人 17人 17人 17人 17人 17人 17人 1	元和4年(1618)	元和5年(1619)	元和6年(1620)	元和7年(1621)	元和8年(1622)	元和9年(1623)	人数計	備考
先立回総兵衛殿 四郎兵へ殿 四郎兵衛殿 四郎兵へ殿 四郎兵へ殿 31人 17人 17人 17人 17人 17人 17人 17人 17人 17人 1							15人	
先立回総兵衛殿 四郎兵へ殿 四郎兵衛殿 四郎兵へ殿 四郎兵へ殿 31人 17人 17人 17人 17人 17人 17人 17人 17人 17人 1								
先立回総兵衛殿 四郎兵へ殿 四郎兵衛殿 四郎兵へ殿 四郎兵へ殿 31人 17人 17人 17人 17人 17人 17人 17人 17人 17人 1	カアり 47 h	127 h 21	ナップ h 1 h	カナカ 20 N	ナップ り つつ 1	ナンア カ 1 ト	202 /	
本たミ 16人 本たミ 26人 本たミ 14人 本たミ 14人 合わられた立 147人 二見庄刊富士 子を守る本代立 20人 をかうふれさ 27人 会かうふれさ 27人 会かうふれさ 27人 から 27人 きかうなけさ下 27人 から 27人 大文殿 24人 とうり 3人 大大夫殿 24人 25下 3人 24人 24人 3人							2947	
ふたミ 16人 ふたミ 26人 ふたミ 14人 名から 14人 名からの 14人 名からの 27人 名をうる発金 27人 名をうるがな 27人 名をうるがきで 7人 場が高門殿 やうだ 7人 場が高門殿 やうだ 8人 落右衛門殿 やうた 8人 落右衛門殿 やうた 8人 第右衛門殿 やうた 8人 第右衛門殿 やうた 8人 第右衛門殿 から 1人 とうり 27人 とうり 18人 二右衛門本の 大大夫殿 たた大夫殿 たた大夫殿 たた大夫殿 たた大夫殿 たた大夫殿 たた大夫殿 118人 三郎大夫殿 12人 三郎大夫殿 13人 三郎大夫殿 13人 三郎大夫殿 13人 三郎大夫殿 14名人 大大夫殿 118人 三郎大夫殿 13人 三郎大夫殿 14名人 大大夫殿 14名人 大大夫殿 14名人 大大夫殿 14名人 大大夫殿 14名人 14名人 14名人 14名人 14名人 14名人 14名人 14名人	JULIAN HINK	I APA MX	I AP X IT III X	LIAPX HIVE	I AP /		31人	
ふたミ 16人 ふたミ 26人 ふたミ 14人 名から 14人 名からの 14人 名からの 27人 名をうる発金 27人 名をうるがな 27人 名をうるがきで 7人 場が高門殿 やうだ 7人 場が高門殿 やうだ 8人 落右衛門殿 やうた 8人 落右衛門殿 やうた 8人 第右衛門殿 やうた 8人 第右衛門殿 やうた 8人 第右衛門殿 から 1人 とうり 27人 とうり 18人 二右衛門本の 大大夫殿 たた大夫殿 たた大夫殿 たた大夫殿 たた大夫殿 たた大夫殿 たた大夫殿 118人 三郎大夫殿 12人 三郎大夫殿 13人 三郎大夫殿 13人 三郎大夫殿 13人 三郎大夫殿 14名人 大大夫殿 118人 三郎大夫殿 13人 三郎大夫殿 14名人 大大夫殿 14名人 大大夫殿 14名人 大大夫殿 14名人 大大夫殿 14名人 14名人 14名人 14名人 14名人 14名人 14名人 14名人								
キャラ 148 11							17人	
キャラ 148 11								
キャラ 148 11	۲۶ ۱۵ ۱	26 h	E + 2 3 11/1	E 7 3 11 1			147 Å	
15							1477	二見庄村富士
うち 27人 きやうふけさ下 やうだ やうた 7人 場右衛門殿 20人 先立四郎右衛門殿 17人 すく右衛門太郎右衛門殿 17人 とうり 17人 大之南門門殿 17人 と前門大郎右衛門成 5秒歳及助殿 おた立六大夫殿 18人 とさうり 1人 先立六大夫殿 11人 大大夫殿 11人 大立三郎大夫殿 118人 三郎大夫殿 三郎大夫殿 立代 大右衛門殿 た立三郎大夫殿 118人 三郎大夫殿 110人 三郎大夫殿 118人 三郎大夫殿 118人		i i		17 81792				井形部*
きやうふけさ下 やうだ 7人 か右衛門殿やうた 8人 先立四郎右衛門殿けき下 川さき 17人 出さき 17人 川さき 13人 三右衛門殿ですく右衛門板中へ与窓殿入助殿を育門殿 一口右衛門大郎右衛門代与窓殿入助殿を育門ときり 1人とうり 24人とうり 3人 先立六大夫殿 先立六大夫殿 大夫殿 3人 大大夫殿 光立六大夫殿 先立六大夫殿 11人とは 2人 先立三郎大夫殿 行政大夫殿 三郎大夫殿 三郎大夫殿 三郎大夫殿 日間いつみノ口小先立者 大右衛門殿 上郎大夫殿 三郎大夫殿 13人 たい 2人三郎大夫殿大立けざ下 13人 13人 13人 先立与惣古衛門三郎大夫は下 5人 5人 5人 5人 5名人 2人 5名人 144人 総兵衛殿 総兵へけざ下助殿総長へ 5名人 2名人 144人 本長右殿 4人 九左衛門殿 4人	総兵衛先立							
## 25							27人	
第右衛門殿								
## Phase P							16人	
弥右衛門殿けさ下								
川さき 32人 先立四郎右衛門殿								
 先立四郎右衛門殿 すく右衛門太郎右衛門大郎右衛門機 とうり 1人 とうり 27人 とうり 18人 た立六大夫殿 とうり 1人 た立六大夫殿 とうり 27人 とうり 18人 大大夫殿 とうり 27人 大大夫殿 大大夫殿 24人 大大夫殿 81人 とば 50人 とは 5人 とは 1人 とは 11人 こ前大夫殿 同いつみノ□ハ先 六右衛門殿 と人 三郎大夫殿 で 2人 き郎大夫殿 で 2人 き郎大夫母 で 2人 き郎大夫母 で 2人 きの よん な長右殿 くまの 4人 九左衛門殿 くまの 4人 九左衛門殿 				川さき 13人			62 A	
すく右衛門太郎右衛門飛りとうり 1人 とうり 24人 とうり 3人 148人 た立六大夫殿 大大夫殿 大大夫殿 大大夫殿 148人 大大夫殿 81人 とば 50人 とは 5人 とは 1人 とは 11人 とは 2人 118人 先立三郎大夫殿 一郎大夫殿 一郎大夫殿 一郎大夫殿 一郎大夫殿 13人 13人 13人 13人 13人 144人 144人 <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>02/0</td> <td></td>			1				02/0	
衛門殿 とうり 1人 とうり 27人 大元大夫殿 「1人 とは 2人 三郎大夫殿 同いつみノ□ハ先 立代 六石衛門殿 とハ 2人 三郎大夫殿 カ・も 13人 た立与地右衛門 三郎大夫けさ下 うら 2人 うら 9人 うら 26人 総兵衛殿 くまの 4人 九左衛門殿				門四郎右衛門代				
とうり 1人 先立六大夫殿 とうり 先立六大夫殿 24人 六大夫殿 とうり 六大夫殿 3人 六大夫殿 148人 六大夫殿 とば 50人 先立三郎大夫殿 同いつみノ□ハ先 立代 六右衛門殿 とハ 三郎大夫殿先立 けき下 かも 13人 先立与惣右衛門 三郎大夫けさ下 三郎大夫殿 2人 三郎大夫けさ下 うら 総兵衛殿 13人 総兵へけざ下九助殿 総兵へ うら 8年五殿 くまの 4人 九左衛門殿 144人 26人 三郎大夫殿 26人 26人 26人 26人 26人 26人 26人 26人 26人 26人	すく右衛門太郎右			与惣殿久助殿				
先立六大夫殿		とうり 27人	トラカ 18 A	とうり 24人	とうり 3人		1/8/	
とば 50人 先立三郎大夫殿 同いつみノ□ハ先 六右衛門殿 とハ 2人 三郎大夫殿先立 けざ下 かも 13人 先立与独右衛門 三郎大夫けざ下 うら 2人 うら 9人 うら 26人 総兵布殿 くまの 4人 九左衛門殿		· ·					140/	
先立三郎大夫殿 同いつみノ□ハ先 立代 六右衛門殿 とハ 2人 三郎大夫殿先立 けさ下 かも 13人 先立与惣右衛門 三郎大夫けさ下 うら 2人 うら 9人 うら 26人 総兵衛殿 くまの 4人 九左衛門殿	<u> </u>	35-77-77-77	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	7 17 07 000	7 17 07 000		81人	
先立三郎大夫殿 同いつみノ□ハ先 立代 六右衛門殿 とハ 2人 三郎大夫殿先立 けさ下 かも 13人 先立与惣右衛門 三郎大夫けさ下 うら 2人 うら 9人 うら 26人 総兵衛殿 くまの 4人 九左衛門殿								
同いつみノ□ハ先 立代 六右衛門殿 とハ 2人 三郎大夫殿先立 けさ下 かも 13人 先立与惣右衛門 三郎大夫けさ下 うら 2人 うら 9人 うら 26人 総兵衛殿 総兵へけさ下九助殿 うら 58人 総兵右殿 くまの 4人 九左衛門殿							118人	
立代 六右衛門殿 とハ 2人 三郎大夫殿先立 けさ下 かも 13人 先立与惣右衛門 三郎大夫けさ下 うら 2人 うら 9人 うら 26人 総兵本門さ下九助殿 うら 58人 総兵右殿 くまの 4人 九左衛門殿			三郎大夫殿	三郎大夫殿	三郎大夫殿			
六右衛門殿 とハ 2人 三郎大夫殿先立けさ下 13人 かも 13人 13人 先立与惣右衛門 三郎大夫けさ下 三郎大夫けさ下 うら 多人 2人 参兵へけさ下九助殿 うら うら 58人 総兵右殿 くまの 人力左衛門殿								
とハ 2人 三郎大夫殿先立 けさ下 かも 13人 先立与惣右衛門 三郎大夫けさ下 うら 2人 うら 9人 うら 26人 総兵衛殿 総兵へけざ下九助殿								
### 13人								
かも 13人 先立与惣右衛門 三郎大夫けさ下 13人 13人 うら 2人 うら 9人 総兵へけき下九助殿 うら 58人 総兵右殿 144人 くまの 4人 九左衛門殿 4人	三郎大夫殿先立							
先立与惣右衛門 三郎大夫けさ下 うら 2人 うら 9人 うら 総兵衛殿 総兵へけさ下九助殿 治兵へ 治兵右殿 くまの 4人 九左衛門殿							40.1	
三郎大夫けさ下 うら 2人 うら 9人 うら 26人 総兵衛殿 総兵へけさ下九助殿 うら 3ら 3ら 3と兵右殿 総兵不 4人 くまの 九左衛門殿 4人							13人	
うら 2人 うら 9人 うら 26人 総兵衛殿 総兵へけさ下九助殿 うら 6 6 6 7 7 7 8 8 4 人土左衛門殿 144人 144人 8 8 9 7 8 9 8 9<								
総兵衛殿 総兵へけざ下九助殿 総兵へ うら 58人 総兵右殿 くまの 4人 九左衛門殿	一対けハヘリ C T	3 b 2 h	3 b 9 h	うら 26 A			144 Л	
うら 58人 総兵右殿 くまの 4人 九左衛門殿 4人		1 *		i .				
くまの 4人 九左衛門殿 4人								
九左衛門殿								
							4人	
181 A $62 A $ $164 A $ $116 A $ $28 A $ $1 A $ $1,115 A$								
	181人	62人	164人	116人	28人	1人	1,115人	

註 (1) 慶長17年 (1612) ~元和 9 年 (1623)「導者付帳」〔公文富士氏記録 - No. 5〕(『浅間文書纂』官幣大社浅間神社社務所編・刊、1931年) にもとづき作成した。

^{(2)「}備考」欄*の人名は、嘉永7年(1854)4月、村山修験大鏡坊が寺社奉行松平信篤に提出した「富士山室小屋建立古帳面写」(〔旧大鏡坊富士氏文書〕K64、『村山浅間神社調査報告書』所収)に、寛文8年(1668)に「行者堂」の「再建」に奉加した6人のうちの1人として現れる。

論 文

【表2】 17世紀前半における大宮道者坊の道者場と到着詳細

道 者 場 (現行地名)	慶長17年(1612)	慶長18年(1613)	慶長19年(1614)	元和元年(1615)	元和2年(1616)	元和3年(1617)
鈴鹿市稲生町	いのふ村 15人 清左衛門殿先立 三吉殿同					
松阪市立田町	たてり 23人 彦左衛門殿先立	たてり 97人 先立彦左衛門			たてり 53人 彦左衛門殿	たてり 17人 四郎兵へ殿
明和町大淀	□□□ 9人 弥右衛門殿先立	大さす 22人 先立弥右衛門殿				
明和町浜田		はまた 17人 先立惣ゑひ 喜大夫				
伊勢市二見町松下ほか	ふたミ 1人 きやうふ殿先立	ふたミ 40人 先立ぎやうぶ	ふたみ 16人 ぎやうふ殿			
伊勢市宇治館町ほか						
伊勢市豊川町ほか	やうた 1人 もと右衛門先立					
伊勢市河崎						
伊勢市通町	とうり 1人 六大夫先立	とうり 28人 先立六大夫殿	とうり 2人 六大夫殿			とうり 44人 六大夫殿
伊勢市佐八町	7 (7 (7 (8)	さハち 39人 先立総大夫殿	7 17 17 192		さハち 42人 総太夫殿	7 (7 (7 (8))
鳥羽市鳥羽ほか	とバ 2人 三郎大夫殿先立	とバ 28人	とハ 4人 三郎大夫けさ下		とは 3人	とは 4人 先立三郎大夫
			とバ 6人 三郎大夫殿			
鳥羽市船津町						
鳥羽市浦村町	うら 21人 総兵衛殿先立	1 1	うら 5人 総兵右殿		うら 14人 総兵へ先立	
田辺市本宮町 · 新宮市						
人 数 計	73人	280人	33人		112人	65人

【表3】 伊勢国一志郡富士参詣道者場の移動

地名史料表記	現地名	【A】年月日 元 禄 以 前 (~1704)	人数	宝力	】年月日 於~享和 4~ 1804)	人数	【C】年月日 安永2年~ (1773~)	人数	備考
矢野	津市香良洲町矢野	(年未詳) 0610	2						
田村	津市一志町八太		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •			•••••	安永6(1777)0723	4	
5野、片野	津市一志町片野		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	享保13	(1728) 0623	28	***************************************		
方名				元文5	(1740) 0716	10			片野ヵ
小山	津市一志町小山	寛文4(1664)⑤26	16			•••••	•		付編1-2
井関	津市一志町井関	寛文10(1670)0609	46			••••••	***************************************		
大仰	津市一志町大仰	(寛文ころ) 0608	19			•••••	•		
大仰				元文5	(1740) 0704	25			
大仰				宝暦14	(1764) 0627	11			
大仰				明和3	(1766) 0704	19			
いう村	津市一志町井生	寛文11(1671)0615	27			•••••	•		
井生下村		(年未詳) 0628	17						
ゆう村				元文2	(1737) 0629	11			
井筒生村							寛政2(1790)0622	5	イウフ村
波瀬村	津市一志町波瀬			享和2	(1802) 0703	14	•		富士権現
をやまと大村	津市白山町二本木	元禄4(1691)0626	3						
小倭大村				享保13	(1728) 0618	10			
小倭大村				元文5	(1740) 0703	22			
小倭中村	津市白山町中ノ村		**********	元文5	(1740) 0708	3	•		
小倭南出	津市白山町南出		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	寛延3	(1750) 0621	3	•		
小倭上村	津市白山町上ノ村	(年未詳) 0703	1		••••••	•••••	***************************************		
小倭上村		元禄4(1691)0627	5						
小倭上ノ村				元文5	(1740) 0701	15			
小倭上野村							安永5(1776)0618	9	
上野宿							安永6(1777)0713	2	
かいとう村	津市白山町垣内	(年月日未詳)	5				•		
小倭垣内				宝暦3	(1753) 0627	2			
垣内村							安永3(1774)0621	26	垣内宿
をやまと	津市白山町	(年月日未詳)	15			•••••	•		
小やまと村				享保13	(1728) 0619	11			
をやまと				元文5	(1740) 0629	8			
	津市白山町岡		**********				寛政6(1794)0622	1	
山田野村	津市白山町山田野		•				天明5(1785)0629	12	
山田野村							寛政元(1789)0625	7	
山田野村							嘉永 5 (1852) 0628	3	
III 🗆	津市白山町川口	(年月日未詳)	8						
		寛文9(1669)0624	26						
川口小野上田				享保19	(1734) 0707	16			
並木	津市白山町川口			元文5	(1740) 0701	11			
小野	津市白山町川口	(年未詳) 0611	14						
南家城	津市白山町南家城	(年月日未詳)	32						
南家城		(年月日未詳)	20						
南いゑき		寛文6(1666)0619	37						
家城		延宝2(1674)0621	37						
家城		元禄4(1691)0627	33						
南家城				享保13	(1728) 0600	4			
南家城				寛延3	(1750) 0620	6			

南家城				宝暦3	(1753) 0626	20				
真美	津市白山町真見	(年月日未詳)	8							
真美				元文2	(1737) 0707	15				
福田山	津市白山町福田山	(年月日未詳)	3	+						
福田山		寛文4(1664)⑤2	7 20							
竹原	津市美杉町竹原	(貞享2カ) 0619	9 10							
竹原村							安永2	(1773) 0627	9	
 竹原村							安永7	(1778) 0728	11	
八手俣		(年未詳) 0616	5 4							
八手又				享保13	(1728) 0622	16				
八手又				宝暦11	(1761) 0701	22				
下ノ川村	津市美杉町下之川	(寛文ころ) 0612	2 25							
下ノ川		(年月日未詳)	4							
下ノ川		(年月日未詳)	22							
下ノ川大草村		寛文11(1671)0613	3 20							
 下ノ川村内		寛文11(1671)0600								
下ノ川				宝永5	(1708) 0617	28				
下ノ川					(1750) 0625					
下ノ川				宝暦2	(1752) 0613	11				
 下ノ川				宝暦2	(1752) 0620	22				
下ノ川				宝暦3	(1753) 0626	12				
下ノ川					(1753) 0627					
下ノ川				宝暦5	(1755) 0704	3				
下ノ川				宝暦11	(1761) 0625	1				
下ノ川				宝暦11	(1761) 0629	15				
 下ノ川					(1764) 0627					
下ノ川				明和7	(1770) 611	9				
 下ノ川戸木村					(1802) 0704					
下ノ川中津村				享和2	(1802) 0706	8				
下野川村							弘化2	(1845) 0625	2	「弐人大宮へ」と註記
下多気	津市美杉町下多気		· · · · · · · · · · · · · · ·	享保13	(1728) 0619	2				
上多気	津市美杉町上多気	(寛文ころ) 0600	5 17	1						
上多気				宝暦14	(1764) 0706	2				
多気村	津市美杉町		· · · · · · · · · · · · · · ·				寛政5	(1793) 0620	17	
八知	津市美杉町八知			享保13	(1728) 0618	5				
八知				宝暦14	(1764) 0706	3				
八知村							安永7	(1778) 0721	8	
奥津	津市美杉町奥津			宝暦13	(1763) 0715	2				富士権現
石名原	津市美杉町石名原			享保19	(1734) 0615	6				
太郎生	津市美杉町太郎生			享保19	(1734) 0628	18				
太郎生				明和4	(1767) 0629	4				
太郎生				明和7	(1770) 625	2				
久居万町	津市久居万町						安永2	(1773) 0710	2	
久居町	津市久居						文化10	(1813) 0602	1	
久居戸木村	津市戸木町						安永2	(1773) 0614	2	
戸木村								(1780) 0620	21	
七栗庄田村	津市庄田町						天保3	(1832) 0718	1	
田野田村	津市稲葉町			†				(1773) 0614	24	
榊原	津市榊原町	(年月日未詳)	14							
榊原		(貞享2カ) 0618	3							

榊原		寛文6 (1666) 0618	19								
榊原				宝暦11	(1761)	0620	9				
榊原村					(1.01)	, 0020	v	天明5	(1785) 0623	4	
甚目村	松阪市甚目町		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •						(1795) 0622	12	
星合	松阪市星合町		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	元文5	(1740)	0720	32	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	(1,00) 0022		
星合村	国际中生日刊			76,76	(1110)	, 0,20	02	實政3	(1791) 0716	8	
星合村									(1792) 0620	9	
笠立村	松阪市笠松町	(寛文ころ) 0608	20					221	(1732) 0020		
笠松	(A) (A) (A) (A)	寛文8 (1668) 0911	25								
笠松		是久6(1000)0511	20	宝永元	(1704)	0625	38				
笠松				明和3			24				
<u></u>	松阪市曾原町	寛文11(1671)0618	20	197/11 3	(1700)	0020					
中道	松阪市中道町		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •								
		(年未詳) 0617	23					<i>d</i> ⇒ 3. 0	(1779) 0014		
小津村	松阪市小津町								(1773) 0614	5	H-2+1. A-1-7041
市場之庄	松阪市市場庄町	(m-k-> 7) 000E	10					見以 2	(1790) 0612	<i>Z</i> 4	中之庄と合わせて24人
随立寺村	松阪市久米町	(寛文ころ) 0607	13								久米村とも
随立寺		(寛文ころ) 0607	24								
久米村		(年月日未詳)	19								
随立寺村	la ma la la la mana	寛文8(1668)0614	148						·····		
中之庄	松阪市中ノ庄町								(1790) 0612	_	市場之庄と合わせて24人
中之庄村									(1811) 0610	5	
中野庄村									(1812) 0720	18	
中之庄村									(1817) 0619	5	
中野庄村								文政6	(1823) 0708	10	
中之庄村								天保7	(1836) 0621	19	
上之庄	松阪市上ノ庄町	(延宝6~7カ) 0622	17								
宮古村	松阪市嬉野宮古町	(年月日未詳)	26								
宮古		(延宝6~7カ) 0624	33								
天華寺	松阪市嬉野天花寺町			元文5	(1740)	0701	19				
野田村	松阪市嬉野野田町							寛政7	(1795) 0628	15	
野田村								寛政12	(1800) 0627	6	
野田村								文化8	(1811) 0611	10	
野田村								天保4	(1833) 0620	6	
小川村	松阪市嬉野中川町							安永2	(1773) 0704	7	
小川村								安永5	(1776) 0702	9	
小川村								安永7	(1778) 0705	1	
小川村								安永9	(1780) 0703	6	
小川村								天明2	(1782) 0706	10	
小川村								寛政2	(1790) 0704	17	
小川村								文化6	(1809) 0727	19	
小川村								文化14	(1817) 0705	17	
小川村								天保4	(1833) 0621	14	
川原木造	松阪市嬉野川原木造町	(年月日未詳)	8								
須賀	松阪市嬉野須賀町	(年月日未詳)	65								
須賀		(貞享2カ) 0619	45								
須賀		寛文8(1668)0613	31								
須賀		寛文10(1670)0610	16								
須賀		(延宝6~7カ)	98								
下之庄村	松阪市嬉野下之庄町	(年未詳) 0706	24								
下之庄上野村		(年月日未詳)	14								

文

一志	松阪市嬉野一志町	寛文6(1666)06	521 21	T		•••••	<u></u>			
一志				元文2	(1737) 0702	27				
井上	松阪市嬉野井之上町	寛文9(1669)06	623 4							
かま池田	松阪市嬉野釜生田町			宝永2	(1705) 0600	6				
加茂田				元文5	(1740) 0711	7				
森本	松阪市嬉野森本町	(年未詳) 07	705 12			•••••				
森本		寛文8(1668)06	616 14							
小原	松阪市嬉野小原町	(年未詳) 07	710 9			************				
小原		寛文4(1664)05	527 5							
小原				元文5	(1740) 0711	15				
津屋城	松阪市嬉野津屋城町	寛文9(1669)06	524 18			************				
田村	松阪市嬉野田村町			元文5	(1740) 0704	9				
黒野	松阪市嬉野黒野町			宝永2	(1705) 0600	19				
黒野村							文化14	(1817) 0623	5	
飯福田	松阪市飯福田町	寛文4(1664)05	528 28					•••••••••••••••••••••••••••••••••••••••		
大阿坂	松阪市大阿坂町	元禄11(1698)06	516 11							
大阿坂				宝永元	(1704) 0626	26				
大阿坂				享和2	(1802) 0625	1				
小阿坂村	松阪市小阿坂町	(寛文ころ) 06	512 3							
こわ坂		(年未詳) 06	616 6							
こわ坂		(年未詳) 06	516 21							
小阿坂		元禄11(1698)06	619 9							
小阿坂				宝永元	(1704) 0624	52				
小阿坂村							天保15	(1844) 0619	12	
小阿坂村							弘化3	(1846) 0613	16	
美濃田	松阪市美濃田町	(年月日未詳)	21		·····					
ミの田		寛文8(1668)06	510 31							
美濃田		元禄11(1698)06	517 33							
箕田村							寛政4	(1792) 0618	27	
松ヶ嶋	松阪市松ヶ島町	(貞享2カ) 06	518 18							今ハ丸ノ内ト云
新松ヶ嶋		寛文4 (1664) 05	527 4							
松崎	松阪市松崎浦町	(寛文ころ) 06	506 12							
松崎浦		(年未詳) 07	701 34							
松崎		(年月日未詳)	49							
松崎		(貞享2カ) 06	500 121							阿ミた坊引導者
松崎		寛文5(1665)06	514 1							高井忠五郎、上下
松崎		(延宝6~7カ) 06	524 5							
松崎				享保13	(1728) 0616	35				
松崎浦				元文5	(1740) 0701	20				
松崎浦				宝暦2	(1752) 0622	52				
松崎				宝暦14	(1764) 0628	28				
松崎浦				明和7	(1770) 617	15				
草原	松阪市久保町	(年月日未詳)	41			••••••				久保町草山ヵ
赤田	松阪市阿形町	(貞享2カ) 06	519 9	İ		••••••				阿形町ヵ
浜午輪		寛文6(1666)06	619 16	İ		***********	†·····			
上川村							天明2	(1782) 0606	1	

註 (1) 「年月日」欄の記述は「和曆(西曆)月日」の順である。月日とも2ケタで示した。なお、○数字は閏月である。
(2) 【A】~【C】の典拠は、以下のとおり。
 【A】および【B】「伊勢国壱志郡(導者参詣記)」(「旧大鏡坊富士氏文書」K166)。富士宮市教育委員会より資料の提供を受けた。
【C】「(伊勢国道者帳)」(駿東郡小山町須走〔米山芳子家文書〕No.147)。[付編2]に全文を翻刻。

【表4】 三重県内(伊勢・伊賀・紀伊)の富士山と浅間(山)

	(伊勢・伊賀・紀伊)の		注明(山) (抽牡)	##=#Z ## #M #M #
(現行地名) 桑名市(旧多度町)	(国) (郡・村) 伊勢 桑名郡	富士(山) (神社) 富士山	浅間(山) (神社)	備考・典拠 ③ No.42「伊勢の富士
桑名市(旧多度町) 桑名市多度町戸津	アダ 条石部 桑名郡戸津村	藤塚		⑤ NO.42 伊勢の富工 ⑤
木曾岬町源緑輪中	桑名郡藤里新田			④もと藤波新田
I - D - I - 2 D2 01 Q + 1 m - I	7K [1 1 1 7 1 7 1 7 1 7 1 7 1 7 1 7 1 7 1	富士山		⑤藤岡社が存在か
桑名市上野	桑名郡上野村	富士権現		①富士山の山上にあり
東員町瀬古泉	員弁郡瀬古泉村	富士		(5)
東員町山田	員弁郡山田村	上藤、北藤、下藤		(5)
ハなべ市大泉	員弁郡大泉村	藤谷		5
いなべ市大泉新田	員弁郡大泉新田	藤谷		5
ハなべ市北金井	員弁郡金井村	藤谷尻		5
いなべ市畑新田 いなべ市東貝野	員弁郡畑新田 員弁郡東貝野村	藤沢		(5) (5)
ハなべ市畑毛	員弁郡畑毛村	藤田前		5
ハなべ市本郷	員弁郡本郷村	藤木		5
越町豊田一色	朝明郡豊田一色村	藤島		5
四日市市山城町	朝明郡山城村	富士権現		2
四日市市山村町	朝明郡山村	富士山 富士社(布自神社)		2
四日市市大矢知町	朝明郡大矢知村	富士谷富士社		2, 5
四日市市富士町	朝明郡羽津村			4
四日市市羽津	朝明郡羽津村藤谷新田	 		4
四日市市川島町	三重郡川島村	藤原		(5) (5)
四日市市内山町 四日市市楠町北一色	三重郡小山田村 三重郡北一色村	藤縄		5
9日市市楠町本郷 9日市市楠町本郷	三重郡北五味塚村	藤平		5
50 m m 偏 的 本 為 広野町千草	三重郡千草村	藤ノ戸		5
版野町音羽	三重郡音羽村	富士見里		5
広野町菰野	三重郡菰野陣屋町	藤ノ木		⑤、⑥「菰野富士」
冷鹿市土師町	河曲郡土師村	藤ノ木		5
鈴鹿市竹野町	河曲郡竹野村	藤		(5)
鈴鹿市国分町	河曲郡国分村	富士山古墳群、富士山越		④一号墳は俗に富士山塚、
鈴鹿市江島町 ※ 京古786-1-187	河曲郡江島村	富士下		<u>(5)</u> (5)
冷鹿市磯山町 公鹿末原は去町	奄芸郡磯山村	乙藤 藤塚		(5)
冷鹿市長法寺町 冷鹿市甲斐町	奄芸郡長法寺村 鈴鹿郡甲斐村	藤ヶ森		(5) (5)
^{命展}	鈴鹿郡弓削岡田村	富士		5
冷鹿市八野町	鈴鹿郡八野村			5
鈴鹿市加佐登町	鈴鹿郡高宮村ほか	藤井		5
鈴鹿市高塚町	The state of the s	藤井		5
鈴鹿市山本町	鈴鹿郡山本村	藤原		(5)
亀山市太岡寺町	鈴鹿郡太岡寺村	富士山		(5)
亀山市菅内町	鈴鹿郡菅内村	藤尾藤山		5
亀山市白木町	鈴鹿郡白木村	富士山		(5)
亀山市関町木崎	鈴鹿郡木崎村	末藤		(5)
亀山市関 亀山市関町小野	鈴鹿郡小野村	末藤		⑥「関富士」
电面	新展部/15171 奄芸郡上野村	藤ノ木		(5) (5)
丰市一身田平野	奄芸郡平野村	藤尻		(5)
書市芸濃町中縄	安濃郡中縄村	藤廼井 藤之森		(5) (5)
聿市藤枝町	津城下藤枝町	藤枝町		<u>4</u> , <u>5</u>
聿市半田藤谷	安濃郡半田村	藤谷小窯跡群		4
聿市神戸	安濃郡神戸村	藤谷		(5)
聿市垂水	安濃郡垂水村ほか			④藤水村
聿市藤方	一志郡藤方村	 		4
非市雲出島貫町 まま、ま町波瀬	一志郡雲出村	北藤本藤本		5
非市一志町波瀬 # 市 中 小町 二 木 木	一志郡波瀬村	富士権現		4
申市白山町二本木申市白山町南家城	一志郡二本木村 一志郡南家城村	藤ノ木藤ノ木		(5) (5)
		,		(4) 「藤之郷」(文禄検
聿市白山町藤	一志郡藤村	藤谷		地帳)、⑤
車市美杉町奥津	一志郡興津村	富士権現		(4)
		had more High-No.		伊藤伊兵衛(食行身裕
聿市美杉町川上	一志郡川上村			出生地
津市久居藤ヶ丘町	一志郡本村	藤ヶ丘		4, 5
丰市久居明神町		西藤谷		(5)
非市稲葉町	一志郡多野田村ほか	藤倉	N. P.	5
公阪市山室町	飯高郡山室村		浅間	(5)
公阪市	飯高郡		(半田十十本)	④堀坂山(757.4m)
公阪市立野町 公阪市藤之木町	飯高郡立野村		浅間古墳群	④天王山とも浅間さんと
公阪市滕之不町 公阪市和屋町	飯高郡藤ノ木村 飯野郡和屋村	藤ノ木		(4) (5)
公阪市和屋町 公阪市庄町	飯野郡庄村 飯野郡庄村			5
多気町牧	多気郡北牧村ほか		浅間山	5
多気町相鹿瀬	多気郡相鹿瀬村	藤ヶ谷	浅間山	(5)
多気町野中	多気郡野中村		浅間山	④浅間山(138.7m)
	多気郡下出江村	藤ヶ内 藤田		5
多気町下出江 大台町千代	多気郡先代村	藤ヶ谷		5

大台町栃原	多気郡栃原村	[浅間山	5
大台町佐原	多気郡佐原村		浅間坪	5
大台町本田木屋	多気郡本田木屋村		浅間下	5
大台町菅木屋	多気郡菅木屋村		浅間下、浅間平	5
大台町小滝	多気郡小滝村		浅間尾下	⑤清滝(小滝ヵ)
大台町神滝	多気郡神滝村		センケン	5
玉城町佐田	度会郡佐田村		浅間前	5
玉城町原	度会郡東原村	藤原	(次间 刑	5
伊勢市御薗町新開	度会郡新開村	藤後		5
伊勢市小俣町新村	度会郡新村	藤原		5
	度会郡朝熊村	1		5
伊勢市朝熊町 伊勢市藤里町	及云和朝熊们	藤ヶ口		
17 20 11 7031	库 人 那 上 III - 上 III		₩ HB → 4	4
伊勢市大世古	度会郡大世古町	#++	浅間前	5
伊勢市浦口	度会郡浦口町	藤本広		5
伊勢市船江	度会郡船江村	藤郷		5
伊勢市佐八町	度会郡佐八村	藤波) Para ()	④字藤波、⑤
度会町平生	度会郡平生村		浅間谷	5
度会町川口	度会郡川口村		浅間	5
度会町小川	度会郡小川村	藤原		5
度会町駒ヶ野	度会郡駒ヶ野村		アサマ	5
南伊勢町五ヶ所浦	度会郡五ヶ所浦		センゲンサン	⑥「五ヶ所富士」(178m)
南伊勢町宿浦	度会郡宿浦		浅間山 センゲンサン	④浅間山(181.9m)
南伊勢町田曾浦	度会郡田曾浦		浅間山 センゲンサン	④浅間山(181.9m)
南伊勢町伊勢路	度会郡伊勢路村	藤ヶ谷、藤谷、藤原		5
南伊勢町礫浦	度会郡礫浦		浅間古墳、センゲ	④礫古墳群の一、⑤
南伊勢町相賀浦	度会郡相賀浦		センゲンサン	5
南伊勢町慥柄浦	度会郡慥柄浦		浅間山	5
南伊勢町贄浦	度会郡贄浦		浅間山	5
南伊勢町方座浦	度会郡方座浦		浅間山 祠 (大日石仏)	 ⑤浅間祭
南伊勢町古和浦	度会郡古和浦		浅間山	5
南伊勢町棚橋竈	度会郡棚橋竈	藤谷	浅間前	5
大紀町永会藤	度会郡藤村		22-88	④宮は「浅間二」(大
人和門水云膝			浅間	指出帳)
大紀町滝原	度会郡野後村		浅間山	④浅間山(733.5m)
大紀町阿曾	度会郡阿曾村			④藤ヶ野が開発される
上约1117 3. 人	库 ◆ 郵 → 田 →	藤ヶ谷 藤ヶ谷		
大紀町永会	度会郡古里村	山		5
大紀町阿曾	度会郡阿曾村	藤ヶ野		5
大紀町柏野	度会郡柏野村	藤ヶ谷	浅間山前、浅間山裏	5
大紀町大内山駒	度会郡大内山村	藤ヶ谷沖		5
大紀町大内山米ヶ谷		藤放		5
鳥羽市国崎町	答志郡国崎村	不二ヶ峰		5
志摩市磯部町五知	答志郡五知村		センゲン山	5
志摩市磯部町三ヶ所	答志郡三ヶ所村	向井地藤谷		5
志摩市阿児町国府	英虞郡国府村	藤田原		5
志摩市大王町名田	英虞郡名田村	藤原		5
志摩市志摩町布施田	英虞郡布施田村	藤谷		(5)
	伊賀 阿山郡	富士山		③ No.32「伊賀の富士山」
伊賀市下阿波	山田郡下阿波村	藤ノ木		5
伊賀市炊村	山田郡炊村	藤ノ木		5
伊賀市玉滝	阿拝郡玉滝村	Disc > /14		③ No.43「伊賀の富士」
伊賀市馬田	阿拝郡馬田村	藤平		5 10.43 伊貞の田工」
伊賀市寺田	阿拝郡寺田村	小富士		5
				③ No.31「伊賀の小富士」、
伊賀市一之宮	阿拝郡一之宮村	小富士山		南宮山
名張市瀬古口	 名張郡世古口村	藤ノ木		5
名張市平尾	名張郡平尾村	藤ノ木		5
紀北町大原	紀伊 牟婁郡大原村	194 × 1	浅間腰	5
紀北町十須	牟婁郡十須村		浅間の腰	5
紀北町東長島	车 婁郡二郷村		浅間	5
紀北町長島	全	藤ヶ谷	I SALA	(5)
紀北町白浦	年妻郡 全婁郡 自浦			(5) (5)知浦(白浦ヵ)
紀北町矢口浦	年 安都口 佣 全婁郡矢口浦	藤ヶ谷		5 1 1 1 1 1 1 1 1 1
紀北町河内	车 要郡河内村	藤ノ木元		5
紀北町小山浦	年 全 基 郡 小 山浦	藤ノ木		5
紀北町相賀	半要郡古ノ本村	藤ノ木		5
尾鷲市林町	半要都ロノ平的		浅間山	4
尾鷲市賀田町	年妻郡 全 基 郡 賀 田 村		浅間山	4
作鳥巾貝田町 熊野市飛鳥町佐渡	年妻郡貞田刊 年婁郡佐渡村	富士ノ谷		5
熊野市新鹿町	年妻郡佐波刊 全婁郡新鹿村	菌エノ台 藤巻 フジノ木平	I PUT	5
熊野市有馬町	年 学 学 学 事 事 事 事 事 事 有 馬 村	旅では フマフル下	浅間	5
御浜町下市木	生妻郡有馬利 年婁郡下市木村		浅間山	5
御浜町栗須	年妻郡下市不利 车妻郡栗須村	藤岡藤田	(人)	5
和法可未須	年要和朱須竹 全	藤旭藤旭		5
	一安和門界門	が水 「」		
紀宝町神内	车婁郡神内村	藤原		(5)

⁽註)「備考・典拠」欄の①~⑥は以下のとおり。 ①「久波奈名所図会」(享和2年〔1802)、『影印校注久波奈名所図会』〔光書房、1977年〕による)、②『特選神名牒』(内務省編・刊、1925年、1972年に思文閣より復刻)、③井野辺茂雄『富士の歴史』〔富士の研究〕Ⅰ(古今書院、1912年、1973年に名著出版より復刻)、④『三重県の地名』〔日本歴史地名大系24〕(平凡社、1983年)、⑤『三重県』〔角川日本地名大辞典24〕(角川書店、1983年)、⑥『三重県』〔分県地図24〕(昭文社、2014年)

																		伊勢	お志摩し	こ伝わ	る富	士参り	歌・泊		集成
23	22	2 21	l 2	0 1	9 1	18	17	16	15	14	13	12	1	l 1	0	9	8	7	6	5	4	3	2	1	行編
志摩市志摩町和具	志摩市大王町船越	計 名		河君丁志書 三二二二二二	丁		勢町神前浦	度会郡南伊勢町東宮	度会郡南伊勢町贄浦	度会郡南伊勢町道方	度会郡南伊勢町阿曾浦	度会郡南伊勢町田曾浦	度会君倖伊勢町、祐房		刀泵	伊勢市矢持町	伊勢市東豊浜町西条	伊勢市東豊浜町土路	伊勢市二見町江	多気郡明和町前野	松阪市保津町	松阪市上七見町	津市一志町小山	四日市市平尾町	褊1] 伊勢志摩に伝わる富士参り歌
95	95	5 95	5 9	4 9	2 8	88	88	87	86	86	85	82	82	2 8	0 8	80	79	74	73	72	72	71	70	70	歌
									る。*は堀内眞の撮影である。	口絵1~3同様、北出正之氏の撮影にな	・挿入した写真は、特に註記しない限り、		りがなけ	・明らかな誤与・脱字と認められるものに		物に	た資料、および	[凡例]			27 尾鷲市三木里 99	26 北牟婁郡紀北町島勝浦 97	25 北牟婁郡紀北町白浦 97	24 志摩市浜島町南張 95	浅間祭歌集成 —付懺悔文(真言)—
(祈った。	もの。太い竹や短い竹を山型に一二段積んで、その上	*身内の者が富士山や大峰山に登っているとき、留守番	アかるかれかるかれ 足もかるかれ 山よかれ	朝日を受けて、七つ下がればじょうろが出る	へ山はよいとこサーヨホホイ 朝日を受けて	かれかるかれ 足もかっ	豆腐でわたれまめで匹角でも	目れたるならサー	(上手) こうこうと オスス・ ごうぶつこし スネスネスネスネスネスネスネスネスネスネスネスネスネスネスネスネスネスネスネ		よくとまる とめてと	へ竹にすずめはサーヨホホイ しなよくとまる	かるかれかるかれ 足もかるかれ 山よかれ	はつ山上まいり あしもかるかれ山よかれ	こちらのむすこさんはサーヨホホイ	、かるかれかるかれ 足もかるかれ山よかれ	ん に れ に れ に の に に の に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に 。 に に に に に に に に に に に に に	【2】卸山寺の歌		۲	32	アーヨーイヨイ・・	二階からまる――――――――――――――――――――――――――――――――――――	【1】道中歌

四日市市平尾町

(『三重県の民謡』七四ページ)

津市一志町小山

上にかわらけをのせて火を灯して神に 番の者達が登山の無事を祈って踊った

(『三重県の民謡』一〇〇ページ)

(長谷川)

【3】富士講の歌 (浅間さんの歌)

〈頭屋の座敷の祭壇前で〉

へかーるかれ 足もかーるかれ 山よおかれー

富士の白雪 よーほい 南無浅間 だいぼっさハイ

ナーム センゲン ダイボッサ

朝日で よい とーけーる

娘島田は 寝てとける

かるかれ 足もかるかれ 山よおかれー

へかーるかれ 足もかーるかれ 山よおかれ 吉田通れば よーほい 南無浅間 だいぼっさハイ

ナーム センゲン ダイボッサ

二階から よい まあねくし

鹿のかのこの振袖に

かるかれ 足もかるかれ 山よおかれー

、かーるかれ 足もかーるかれ 山よおかれ

めでためでたの よーほい 南無浅間 だいぼっさ

ナーム センゲン ダイボッサ

若松さまは 枝も栄える 葉も茂る

かるかれ 足もかるかれ 山よおかれし

へかーるかれ 足もかーるかれ 山よおかれー

センゲン ダイボッサ

ぼぼよ けっしょと よーほい 南無浅間

だいぼっさハイ

ゆてなく鳥は 鳥のうちでも すけべ鳥

かるかれ 足もかるかれ 山よおかれー

松阪市上七見町

(道中歌)

、富士ーのおー しらあゆきーわ ヨオー

朝日ーでえーえー とーけーるーよー

ククーブ (法螺貝の音)

、吉田あーあ とおればーよ ヨオー

二階からあーあー まーねーくよ

クククーブ

へめでたあーあー めでたあーあーの ヨオー

若松さまーよ クククブー

〈最終のしめ〉

打ってくれ シャン シャン シャン

祝うて三度 シャン シャン シャンぃぉ

ご苦労さん

連中揃たか(揃うた 揃うた)

五穀成就 講中安全 氏子安全

ありがとうございまし

*農上り後の浅間まつりで歌われる。浅間さんは宿 = 頭屋の座敷で始まり、櫛田川辺の浅間

さんを行う場所まで歩く。先達の音頭で宿では輪になって踊る。道中は笹竹に吊した提灯

と幣を持って歩く。

富士参りの歌は、各地にあったはずであるが、今回の報告には少なかったので録音は古い

がとり上げた。志摩地方では復活のところもでてきている。

(『三重県の民謡』一〇一ページ)

-71 -

【4】富士参り道中歌(浅間さんの歌)

松阪市保津町

へやーまよ かるかれ やーま よかれよー

へここは河碕 船乗りの番所

足も軽るかれ 山よかれよー

やまれ うれしや 船に乗りてよ

、吉田通れば 二階から 招くよ

はでな鹿の子の 振袖でよー

、富士のお山は 高いので おー寒いよ招いても 招いても こちゃ知らぬ

足軽いにも 更りなし

足軽いにも 便りなし

娘島田は 寝てとけるよ

へやーまよ かるかれ やーま よかれよ

足も軽るかれ 山よかれよー

唱和する

*浅間行事の時に宿及び富士参りの道中や浅間までの道中で歌われた。先達が歌い他の者が

(『三重県の民謡』一〇〇ページ)

(田畑)

【5】富士参り道中宿歌(カーアルカーレのうた)

へさては日の本 富士権現のヨー

〈ねり歌のふし〉

へ船路のどこかに 追い風吹いて今ぞともづな とくとくとヨー

心吉田の「宿につくヨー」 しゅく 船路のどこかに 追い風吹いてヨー

名所名所を ながめつつヨー 一つきけん 吉田の町 すぎ行きてヨー

(下略)

〈踊りのふし〉

あしもかーあるかーれ やまよーかーれあら かーあるかれ かーあるかれ

富士のお山の ちょいちょい 流れかよ

へここで酒宴は ああ 駿河の国のあら かーあるかーれ かーあるかーれ

酒の蒲原 ちょいちょい アこれからや

あら かーあるかーれ かーあるかーれ富士のお山も ちょいちょい 近くなる

へあれを見たまへ ああ あらありがたや

ちょいちょい 見えわたる 名所名所が

多気郡明和町前野

あら かーあるかーれ かーあるかーれ ここに見えるは ああ 愛鷹さまや ここに見えるは ああ 愛鷹さまや せいがん せいがん

〜見るに心の(浮島が原)田子の入海 あら)かーあるかーれ)かーあるかーれ

へここは河崎 いざのりの船のヨー

へいざや参らぬ 三国一のヨー

おとにきこえし

富士さまへヨー

利生あらたに おわせますヨー



「権現松」の祭場



権現松への「練」

ちょいちょい 見え渡る

かーあるかーれ かーあるかーれ

、表大日 ああ

お裏は薬師

あら かーあるかーれ

かーあるかれ

ここへ願いを ちょいちょい おさめおく

あらてんじょ はっちょう かーあるかーれ

* 浅間行事のとき若屋から権現松まで「ねり歌」を歌いながら歩き、権現松の回りを「踊り

のふし」で歌いながら踊った。その後祓川へ入り水垢離をとり、村内安全と豊作を祈った。

また申年ごとに青年一同富士山に参るのが例となっていた。まず伊勢に詣り、行路の無事

を祈り、船で吉田(豊橋市)に渡り、そこから歩いた。往復約十六日の行程であった。

あしもかーあるかーれ やまよーかーれ

かーあるかーれ

かーあるかれ

へはたや吉原 ああ皆目の下に

沼津三島や ちょいちょい 箱根山

かーあるかーれ かーあるかーれ

へなおも名所や ああ 湯井かん原や

江尻おき津の ちょいちょい 浪のおと かーあるかーれ かーあるかーれ

へ府中お城の ああ 東を見れば やはた清水 ちょいちょい あたご山

かーあるかーれ かーあるかーれ

、西は浅間のああ虚空蔵菩薩

みなみ海ずら ちょいちょい まんまんと あら かーあるかーれ かーあるかーれ

、富士のお山で ああ きた海みれば 田子の浦たち ちょいちょい 白浪か

かーあるかーれ かーあるかーれ

へ富士のお山で ああ ちんちろめくは

富士の道者衆か ちょいちょい 白さぎか

かーあるかーれ かーあるかれ

へ富士のお山を ああ 夜山にかけて

明日はおらがも ちょいちょい ご来光

かーあるかーれ かーあるかれ

、白い巾かたに おけさをかけて

おはちょう めぐれば ちょいちょい

ありがたや



権現松での振舞



権現松でのオドリ

【六】富士まいりの歌

へ目出た目出たの富士まいり

足も軽かれ山よかれ イヨ山よかれ

祝い目出たの舟にのる イヨ舟にのる

、アー清き渚でこりをとる

、舟はなんぞもあるけれど

今のお舟はよいお舟 イヨよいお舟

へそよと吹いたは真西の風よ

へここは吉田かよいところ

吉田の港へそよそよと

とまりとまりの宿よかれ イヨ宿よかれ

ヘアー吉田通れば二階からまねく

伊勢市二見町江

(『三重県の民謡』一〇〇ページ)

しかもかのこの振袖で イヨ振袖で

ヘハーとまりとまりの宿よかれ

宿の女はなおよかれ

ヘアーかわいい息子の富士まいり

うしろごおりをよくめされ サヨよくめされ

~ アー吉田二川に白須賀こえて

今はあらいの橋をこす

ヘアーこせば舞坂浜松すぎて

天龍川には水もなや

、ハーここは西田か名所もおうや

さよの中山あめがもち

~ アーここはかなやの宿ですよ

大井川には水もなや イヨ水もなや

~ アー駿河府中をさしすぎて

三保の松原あれとかや

へここは富士川こりをとる

すぐにお山を見て拝む イヨ見て拝む

ヘアー西はくもりて雨とかや

東はひでりで山よかれ

~ アー富士のお山にさしかかる

馬でこそずやかや山を イヨかや山を

~ アーお富士お山に白いものなんね

お伊勢道者か白さぎか イヨ白さぎか

ヘアー富士のお山で吹く笛は

きこえ申すぞ二見まで イヨ二見まで

~ アーお八丁めぐりてありがたや

拝み申すぞご来光

ヘアー富士のお山はこいの山

なごりおしげにおもうぞや

ヘアー足も軽かた山もよかた

宿ん亭主はなおよかた。イヨなおよかた

ハーそよと吹いたはならいの風か

伊勢の二見へそよそよと イヨそよそよと

^\ アー沖に見ゆるは山よし丸よ

笛や太鼓の音がする

ヘアーお富士まいりの下向には

清き渚につきける

~アー下向めでたのみやげには

十つぼ団子に塗り杓子 アラ塗り杓子

、イー目出た目出たが度重なりて

扇めでたや末繁盛 おわり

(『三重県の民謡』一〇二ページ)

伊勢市東豊浜町土路

【7】富士講道行唄

五月三十一日土路浅間さんに於いて五月二十三日土路浅間さんに於いて

富士浅間

真号「おんまか、きゃろにきゃ、そわか」

一、ありがたやー ありがたやなー ハイヤー

めでと げこして またまいろー ハイヤー

またまいろ

三歩進んで、二歩下がり、輪の中心に向きを変え、

右足二回上げ、そのつど 拍手二回

進行方向にむかって、手でお山の形を一回

(手は上から下へかぶせる)

富士講道行唄

やがて おふじに ノオ たつほどにな

ショーガイーノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ

両宮 さんけい ノオ うちすぎてな

2

ア ソラセ ソラセ

たけへ まいるはあーりがたや

ショーガイーノ

ヤレノーオ ありがたや

たけへ まいるはあーりがたや

ショーガイーノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ

ア ソラセ ソラセ

いざや ひとびとこーりをかけ

ヤレノーオ こりをかけ

いざや ひとびとこーりをかけ

ショーガイーノ

ショーガイーノ

いそぐ よしだを ノオ はやたちてな

ア ソラセ ソラセ

川は なけれどふーたがわへ ショーガイーノ

ショーガイーノ

ここは あらいの ノオ しゅくでそよな

3 あさま やまから おふじをみればな

ア ソラセ ソラセ

ふじの おやまにゆーきもなや

ショーガイーノ

ヤレノーオ ゆきもなや

ふじの おやまにゆーきもなや

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ ショーガイーノ

ア ソラセ ソラセ

そよと ふいたが みなみのかぜがな

よしだ みなとへそーよそよと

ショーガイーノ

ヤレノーオ そよそよと

よしだ みなとへそーよそよと

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ

川は なけれどふーたがわへ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ

ショーガイーノ

7 8 ここは 見付けの ノオ しゅくでそよな ここは にいさか かなやをこえてな いそぐ ところはかーけがわへ いそぐ ところはかーけがわへ われは またねど天ーりゅうがわ われは またねど天ーりゅうがわ わたし うちのりまーいさかへ ショーガイーノ ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ ショーガイーノ ヤレノーオ かけ川へ ショーガイーノ ア ソラセ ソラセ ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ ショーガイーノ ヤレノーオ 天りゅう川 ショーガイーノ ア ソラセ ソラセ

おとに きこえし ノオ はままつはな わたし うちのりまーいさかへ ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ ア ソラセ ソラセ ヤレノーオ まいさかへ 10 ヤレノーオ みずもなや ショーガイーノ

さきは おかべのしゅーくでそよ さきは おかべのしゅーくでそよ ショーガイーノ ショーガイーノ ヤレノーオ しゅくでそよ ア ソラセ ソラセ

11 けあげ まりこを ノオ うちすぎてな ア ソラセ ソラセ

はやく するがのふーちゅにつく

ショーガイーノ

はやく するがのふーちゅにつく ヤレノーオ ふちゅうにつく

ショーガイーノ

ねがい ねごたら ノオ はやかのたな ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ

12

いまは するがのふーじせんげん

ア ソラセ ソラセ

ア ソラセ ソラセ

おおいがわ にはみーずもなや

おおいがわ にはみーずもなや

ショーガイーノ

しまだ ふじえだ ノオ うちすぎてな ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ

15 14 13 とうに ほどなく 岩本すぎてな われが 同行に しるしがござな 江尻 せいけん ノオ うちすぎてな しろい ゆかたにけーさかけて めいしょ おおみやこーりをかけ めいしょ おおみやこーりをかけ 由比の かんばらふーじがわへ 由比の かんばらふーじがわへ いまは するがのふーじせんげん ショーガイーノ ヤレノーオ こりをかけ ハーエーイ エーイイ エーイイ ショーガイーノ ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ ア ソラセ ソラセ ショーガイーノ ショーガイーノ ア ソラセ ソラセ ハーエーイ エーイイ エーイイ ア ソラセ ソラセ ヤレノーオ ふじがわへ ヤレノーオ 富士浅間

> おがみ もうそやごーらいこう おがみ もうそやごーらいこう ヤレノーオ ごらいこう ショーガイーノ ショーガイーノ

ふじの おやまで ひるねをしたらな ア ソラセ ソラセ ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ

18

ショーガイーノ

しろい ゆかたにけーさかけて

ショーガイーノ

ねがい ねごたら ひよりもかのたな ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ

16

ア ソラセ ソラセ

おむろ ずまいもすーぐとおり ショーガイーノ

ヤレノーオ すぐとおり

おむろ ずまいもすーぐとおり

ショーガイーノ

八丈 まわらぬ ノオ そのうちにな ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ

17

ア ソラセ ソラセ

八丈 まわりたゆーめをみた ショーガイーノ

ヤレノーオ ゆめをみた

八丈 まわりたゆーめをみた

21 20 19 野でも 山でも ノオ かねがふるな にしが くもれば ノオ 雨となるな うちは しらげのよーねがふる ひがし ひでりでやーまよかれ ひがし ひでりでやーまよかれ おりた こころはあーりがたや おりた こころはあーりがたや 八丈 まわりて すなおりおりてな ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ ショーガイーノ ヤレノーオ やまよかれ ア ソラセ ソラセ ヤレノーオ よねがふる ア ソラセ ソラセ ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ ショーガイーノ ア ソラセ ソラセ ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ ショーガイーノ ヤレノーオ ありがたや ショーガイーノ

うちは しらげのよーねがふる

ばァさん でてみよまーごつれて

ショーガイーノ

24 22 そよと ふいたが ならいの風がな 吉田 通れば 二階からまねくな お山 よいとこ ノオ 舟がきたな ばァさん でてみよまーごつれて おいせ みなとへそーよそよと おいせ みなとへそーよそよと しかも かのこのふーりそでで しかも かのこのふーりそでで ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ ショーガイーノ ショーガイーノ ショーガイーノ ア ソラセ ソラセ ショーガイーノ ショーガイーノ ヤレノーオ そよそよと ア ソラセ ソラセ ハーエーイ エーイイ エーイイ ヤレノーオ ふりそでで ハーエーイ エーイイ エーイイ ショーガイーノ ヤレノーオ まごつれて ア ソラセ ソラセ

まいり よかた ノオ げこよかたな ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ

25

ア ソラセ ソラセ

とまり どまりのやーどよかた

ショーガイーノ

ヤレノーオ やどよかた

とまり どまりのやーどよかた

ショーガイーノ

せんの お山も ノオ よかたそなな

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ

26

ア ソラセ ソラセ

こんどの お山もなーおよかた

ショーガイーノ

ヤレノーオ なおよかた

こんどの お山もなーおよかた

ショーガイーノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ エーイーイ

ア ソラセ ソラセ

27

おふじ みやげに ノオ なにもろたな

しゃくし もろたらふーだそえて

ショーガイーノ

ヤレノーオ ふだそえて

しゃくし もろたらふーだそえて

ショーガイーノ

ハーエーイ エーイイ エーイイ

28 祝い めでたの 若松さまはな

ソラセ ソラセ

枝も さかえる葉ーもしげる

ショーガイーノ

ヤレノーオ 葉もしげる

枝も さかえる葉ーもしげる

ショーガイーノ

(土路富士講編・刊『富士講道行唄』、二〇〇四年)

伊勢市東豊浜町西条

【8】富士登山道中歌

昭和三十五年五月 富士登山道中歌 西条富士講 」(折本)

こいの山 目出度げこして

やがてお富士にたつ程に

両宮さんけい打過ぎて

朝熊山から御富士お見れば

御富士御山に雪もない

岳けいまいるわありがたい

いざや人々こりをかけ

またまいろ

扇もろたや末はんじょう

さらばく~のいとまごい

御富士いとまに何もろて

こよい一夜は御手まくら

そよと吹いたが南の風が

吉田港えそよそよと

あすは出舟の梶まくら

うしろしよじをよくなされ

いそぐ吉田を早や立ちて

ここは荒井の宿でそよ

小影すずしき浜松は

ここはにち阪金谷を越て ここは見付けの宿でそよ

わたし打過ぎ前阪え 川はなけれどふた川え

誰は待たねと天龍川

急ぐ所は掛川え

大井川には水もない

− 79 **−**

上 母类)丁芬	更更近 フェット・ウェーニョウンジャー・コーページン	[7 9 H I]) 企業
3 五十鈴川にて	富士講世話人一同	富士講
2 剣峠で 伊勢海		◎皆様熱心に練習して下さい
1 家を出奔 出立		
1	しやたんそわか	ばさらせんたまあから しや
【10】切原富士山桑	んだ	うんたらたかまの まげさまんだ
	目出度下向して又詣ろめでと	御富士御山は恋の山初日出房の著札核に
山よかれーさ	支ら戻ら落けるごんげん様へと皆なびく	兄言出まり言公兼は面白いぞや み浜の松は
かるかれかる	しゃくしもろたやふだそえて	御富士土産に何もろて
そりゃ そのご	とまり~~の宿よかった	詣りよかた下向よかた
へなんと若衆 踊	東日照りて山よかれ	西はくもりて雨がふる
山よかれーさ	内は知らせのよねがふる	野にも山にもかねがふる
かるかれかる	こげよ舟方いそいそと	御山よいとの船が来た
ほりゃ 箕でけ	御伊勢港えそよそよと	そよと吹いたがならいの風が
ほりゃ 穂に姉	御りた心は有がたい	八丈廻りてすなふみをりた
へ今年しや 世が	八丈廻りたゆめを見た	御富士御山で昼ねをしたら
山よかれーさ	御がみもうすや御らいかう	御山しずかに雲晴れて
かるかれかる	御むろすまいもすぐ通り	願い願たら日和もよかた
そりゃ葉も	白いゆかたにけさ掛けて	われがどーぎにしるしが御座る
そりゃ 若松さ	いざや人々こりを掛け	音に聞えし大宮様で
へめでた めでた	ゆいやかんばら富士川え	江尻へいけを打過ぎて
山よかれーさ	今はするがの富士せんげん	いざや人々こりを掛け
かるかれかる	はやくするがの府中につく	けはやまりこをうちすぎて
【9】富士浅間大芸	先は岡べの宿でそよ	島田藤枝打過ぎて

【9】富士浅間大菩薩

かるかれ 足もかるかれ

たの 若松さまは

仏さまは 枝もさかえて

しげる

んるかれ 足もかるかれ

がようて穂に穂が咲いて

.穂がさいて 俵立ておき

はかる

るかれ 足もかるかれ

踊ろじゃないか わしもその気じゃ

心

こるかれ 足もかるかれ

(『三重県の民謡』一〇二ページ)

登拝道中唄

度会郡南伊勢町切原

立ちの時は 足も軽かれ山よかれ

海見れば 風も静かに 波もなし

大垢離とりて 内宮外宮の 宮巡り

4 伊勢の河崎 夜舟にのりて 吉田の港へ そよそよと

(『17~19世紀の近畿・東海地方における富士信仰の受容』一二一ページ)

伊勢市矢持町

5 吉田、 二川 白須賀越えて 新居の番所を 唄で越す

2

6 遠州舞坂、浜松越えて 天竜川にて 親思ふた

7 見附、 袋井、掛川越えて 大井川見れば 日坂峠を 汗で越す

8

金谷峠で

9 島田、 藤枝、 岡部を越えて 宇津ノ谷峠を 思ひやる

大井川には

水もなし

10 宇津ノ谷峠で 丸子をみれば 宿の亭主が 出て招く

11 丸子を越えて 安倍川橋を 渡る心は 静岡に

12

静か静かと

静岡過ぎて

江尻

興津の

宿へ行く

13 興津の二階で 田子の浦見れば 三保の松原 見晴らして

16 富士川渡りて 左をとりて 富士の裾野の 大宮へ

15 14

田子の浦から

富士の山見れば

富士の山には 雪もなし

夏は涼しき

由比

蒲原は

田子の浦わの

風をうけ

18 17 富士の裾野で 大宮浅間で 御体を清め 昼寝をしたら お山する身の お山よいとの 夢をみた 嬉しさよ

19 富士の裾野の 一群れすすき いつしか穂が出て あらわれた

20 富士の八合で 御来迎様を 拝む心の ありがたや

表浅間 大日様を 拝む心は ありがたや

富士のお山の お鉢を巡り 巡る心は ありがたや

22 21

数珠と袈裟をば

大日様へ

あげて拝むは ありがたや

〈お山〉

裏の薬師で 御判をすえて 下降の心は ありがたや

24 23

のうまくさんまんだ ばさらさだせんだ

まあからそわたや うんたらたあかんまん

(『ソキエタス』 一五号)



伊勢の河崎夜船に乗りて 家を出ばん出立の時は みつけ袋井掛川こえて 遠州前坂浜松こえて 吉田ふた川白塚越えて 五十鈴川にて大垢離とれて たつが峠で伊勢の海見れば 天竜川にて親おもた あらいのばんしょう唄で越す 日坂峠を雨でこす 足も軽かれ山よかれ 吉田の港へそよそよと 内宮外宮の宮めぐり 風も静かに波もなし

まりこを越へて阿部川橋を 渡る心は静岡に 宇都宮峠でまりこをみれば 島田藤枝岡部をこへて 金谷峠で大井川みれば しずかしずかと静岡見れば 宇都宮峠を思いやる 大井川には水もなし 宿の女が出てまねく 江じりおきつのしこゑゆく

田子の浦から富士山みれば 夏は涼しきゆいかんの原を おきつの二階で田ごの浦みれば 富士のすそ野の一むらすすき いつか穂が出て現れた 富士川渡りて左をとりて 富士のすそ野の大宮へ 富士の山には雪もなし 田子の浦の風うけて 三保の松原みはらして

浦の薬師でご飯をすへて げこうの心はありがたや 富士のお山で御羅光様を 富士のお山でお鉢をめぐる げこうの心はありがたや おもてせんげん大日様を (お鉢めぐり唄) (切原浅間さん) あげて拝むはありがたや 拝む心はありがたや

表せんげん大日様を あけて拝むは有難や



山頂でのオハチメグリ*



公民館での餅搗き



垢離場でのヨーヨーダッポン

富士のお山でご来光様を 富士のお山でおはちを巡る 拝む心は有難や 下向の心は有難や

うらの薬師で御判をすへて 下向の心は有難や

(切原浅間講提供

【11】富士登山道中歌

伝承

作詞

由田の港へそよそよとそよそよと

由田通れば二階からまねく しかも鹿の子の振り袖で振り袖

そよとなびいた茅野は涼し

足もかるがる風受けて風受けて

神社から夜船にのりてかみゃしろ

由田 一川白須賀こえて 荒井のばんしょは唄でやろ唄でやろ

遠州浜松五社の宮 お山よかれと伏し拝む伏し拝む

見付袋井はや打ち過ぎて 急ぎましょやれ掛川へ掛川へ

ここは日坂夜鳴きの石よ あめが餅とはこれとかやこれとかや

金谷峠へ登りて見れば 大井川には水もなや水もなや

岡部丸子のあの合いの宿やど 島田藤枝早や打ち過ぎて 先は岡部の宿でそよ宿でそよ 下降に買いましょとうだんごとうだんご

ここは府中の浅間様よ お山よかれと伏し拝む伏し拝む

三保の松原あの清見寺 田子の浦とはこれとかやこれとかや

由井や蒲原早や打ち過ぎて 急ぎましょやれ富士川へ富士川

ここは吉原左へとりて 急ぎましょやれ須走りへ須走りへ

いんの十力早や打ち過ぎて やがて須走り程近い程近い

ここは須走り大ざるがくよ つきしこころは有り難や有り難や

ここで清めの滝垢離とりて お山よかれと伏し拝む伏し拝む

富士の裾野の一むらすすき

旅の脚絆にたわむれるたわむれる

度会郡南伊勢町神原

登り登りて七合のむろで 御飯を頂く有り難や有り難や

いたどり山から空見上げれば

嶺の近さや有り難や有り難や

やがて登りて八合のむろで 御来光拝むは有り難や有り難

ここは母子の宮でそよ 杖を買いましょ人々よ人々よ

の鳥居で昼寝をしたら お山よいとの夢をみた夢をみた

木山打ち過ぎおむろを越へて いたどり山とは之とかや之とかや

富士にこがれた望も遂げて 心明るく有り難や有り難や 巡り終りて砂打ち払い 袴を正して手を合わす手を合わす のどに冷たいお池の水を さいの河原やたいない越えて 剣が峯とは之とかや之とかや うらの薬師の御印も受けて 下降のこころは有り難や有り難 すずとけさをば大日様へ 掛けて拝むは有り難や有り難や めぐりめぐりてさんげの橋を やっと登った浅間神社 着きしこころは有り難や有り難や 頂くこころは有り難や有り難や 渡るこころは有り難や有り難や

軽かった軽かったお山もよかった やがて下降して又まいろ又まいろ

(神原富士講提供)

【12】田曾浦富士山登拝道中唄

1

度会郡南伊勢町田曾浦

かるかれかるかれ足もかれ お山もよかれ わけても今年はなおよかれ

2 御先達から文がきた 山がよいとの文がきた

やがて連れだつ富士参り ところ氏神いさみたつ

3

西が曇りてかんだち心 東ひでりて山よかれ

宿のお母さん 心によいほどに 泊り泊りの宿よかれ

5 4

6 いざや我が家をいさみ出て
さらばさらばのいとまごい 31

八合室にて夜をくろめ

御来迎拝むありがたや

7 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 三保の松原前に見て 五十鈴川にて垢離をかく 五ヶ所玉地にはやついて いたどり山から空うちながめ 中宮の八幡ふし拝み 富士の裾野で昼寝をしたら 村山宿場にはやついて 石はなけれど岩本の 由比を通れば蒲原泊り 駿河の静岡うち過ぎて 安部の川にて垢離をかく 岡部うち過ぎ 島田うち過ぎ 大井川をばかち渡る 大井川にて垢離をかく 金谷峠に上がりて見れば 鐘の響きもきくが茶屋 肩に御金と日坂の さよの中山これとかや お山見附の宿泊り 新居、舞坂うちすぎて 磯はなけれど浜松よ 吉田からには二川を だれかおしえのしらせかよ 吉田の玉地にはやついて 吉田川にて垢離をかく そよと吹いたらまた西まじぇか 神の社で船にのり あらせ吹くかや西まじぇか 朝熊山から東をみれば きじもほろろと宇津ノ宮 せとのそめいはこれとかや 松の藤枝で宿をとり 袋井なはてや掛川を 一の木戸にとさしかかる 田子の浦とはこれとかや 大宮宿場にはやついて 不動の滝にて垢離をかく 江尻、興津や清見寺 富士の山には雲もない お富士川にて垢離をかく 神に祈りの金谷の宿よ 拝み参ろや今浅間 大井川には水もない 五ヶ所川にて垢離をかく 内宮外宮の宮巡り 山がよいとの夢をみた 空の近さやありがたや 吉田港にそよそよと

けあげてとおるは丸子の宿よ 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 44 富士は男の恋の山 中宮の八幡はやさがり 近江道者と田曾道者 富士のお山で何というて拝む 所ごはんじょというて拝む 数珠と袈裟をば大日様へ 富士の土産に何もろた 吉田通れば二階から招く 田曾の道者が皆うち揃て もとの宿場にまいりくる 富士の裾野で鳴く鳥聞けば るりやこまどりほととぎす 裏と表の御判を受けて 剣ヶ峯から薬師ヶ岳へ 金の成る木をひともとほしや 植えて育ててまた参る へんじょう はんじょう よかった お山もよかった 六十さいまでお待ちあれ 裏の薬師で踊り合う かけた心のありがたや おたまじゃくしに御供そえて 下降する心のありがたや いざや人々砂うちはらう しかもかのこの振り袖で かけた心のありがたや (『ソキエタス』 一五号)

32

大日峠に上がりてみれば

鐘の響きでいさみたつ

2

「 析村中安全・祈村内繁昌の願いをこめた 郷土に伝わる民俗遺産

□講元・御先達(先導者)が御幣・リンをもち、音頭をとり、

道者(随行者)は太鼓・ホラがい・日の丸扇で囃しながら、富士登山や村内

を巡拝する時にうたう道中唄です。

1 かるかれ かるかれ 足もかるかれ お山もよかれ

ソーリヤー わけて今年はなおよかれ なおよかれ

2 御先達から文がきた ソーリヤー

山がよいとの文がきた

文がきた

やがて連れだつ富士参り

3

ソーリヤー ところ氏神いさみたつ

いさみたつ

西が曇りてかんだち心 ソーリヤー 東ひでりで山よかれ

山よかれ

4

宿のお母さん ソーリヤー 心よいほどに 泊り泊りの宿よかれ

宿よかれ

5

いざや我が家をいさみ出て ソーリヤー さらばさらばのいとまごい

いとまごい

6

五ヶ所玉地にはやついて ソーリヤー 五ヶ所川にて垢離をかく 垢離をかく

7

五十鈴川にて垢離をかく

8

ソーリヤー 外宮内宮の宮巡り 宮巡り

9 朝熊山から東を見れば ソーリヤー

神の社で船にのり 富士の山には雪もない 雪もない

10

11 そよと吹いたは真西か まじえか

ソーリヤー

あらせ吹くかや西まじえか

西まじえか

ソーリヤー 吉田港にそよそよと そよそよと

吉田の玉地にはやついて

12

吉田川にて垢離をかく

吉田からには ソーリヤー 二川よ

垢離をかく

13

ソーリヤー だれかおしえのしらすかよ しらすかよ

> 14 新居 舞坂うちすぎて

ソーリヤー 磯はなけれど浜松よ 浜松よ

15 お山見附の宿泊り

ソーリヤー 袋井なはてや掛川や 掛川や

16 肩に御金と日坂の

ソーリヤー さよの中山これとかや これとかや

17 鐘の響きもきくが茶屋

ソーリヤー 神に祈りの金谷の宿よ 金谷の宿よ

18 金谷峠に上がりて見れば

ソーリヤー 大井川には水もない

水もない

19 大井川をばかち渡る

ソーリヤー 大井川にて垢離をかく 垢離をかく

島田うち過ぎ せとのそめいはこれとかや

20

ソーリヤー 松の藤枝で宿をとり 宿をとり

岡部うち過ぎ きじもほろろと宇津ノ谷の

21

ソーリヤー けあげてとおるは丸子の宿よ 丸子の宿よ

22 安部の川にて垢離をかく

ソーリヤー

拝み参ろや今浅間

23 駿河の静岡うち過ぎて

ソーリヤー 江尻 興津や清見寺 清見寺

24 三保の松原 前に見て

ソーリヤー 田子の浦とはこれとかや これとかや

25 由比を通れば蒲原泊り

ソーリヤー お富士川にて垢離をかく 垢離をかく

26 石はなけれど岩本の 38

中宮の八幡はやさがり

ソーリヤー 大宮宿場にはやついて はやついて

27 村山宿場にはやついて

ソーリヤー 不動の滝にて **垢離をかく** 垢離をかく

28 富士の裾野で昼寝をしたら

ソーリヤー 山がよいとの夢をみた 夢をみた

29 中宮の八幡ふし拝み

ソーリヤー 一の木戸にとさしかかる さしかかる

30 いたどり山から空うちながめ

ソーリヤー 空のちかさやありがたや ありがたや

八合室にて夜をくろめ

31

ソーリヤー 御来光拝むありがたや ありがたや

大日峠に上がりてみれば

32

ソーリヤー 鐘の響きでいさみたつ いさみたつ

数珠と袈裟をば大日様へ

33

ソーリヤー かけた心のありがたや

富士のお山で何というて拝む

34

ソーリヤー 所ごはんじよというて拝む いうて拝む

35 剣ヶ峯から薬師ヶ岳へ

かけた心のありがたや ありがたや

36 近江道者と田曾道者

ソーリヤー 裏の薬師で踊り合う 踊り合う

37 裏と表の御判を受けて

下向する心のありがたや ありがたや

ソーリヤー

ソーリヤー いざや人々砂うちはらう うちはらう

39 富士の裾野で鳴く鳥聞けば

ソーリヤー るりやこまどり ほととぎす ほととぎす

40 田曾の道者が皆うち揃て

ソーリヤー もとの宿場にまいりくる まいりくる

41 吉田通れば二階から招く

ソーリヤー しかもかのこの振り袖で

42 富士の土産に何何もろた

ソーリヤー おたまじやくしに御供そえて 御供そえて

43 富士は男の恋の山

ソーリヤー 六十三までお待ちあれ

お待ちあれ

44 金の成る木をひともとほしや

ソーリヤー 植えて育ててまた参る また参る

へんじよう はんじよう よかった

お山もよかつた

ヨーヨー お山もよかった

【後記】この道中唄は江戸中期末頃より、毎年浅間祭りに富士登山者全員が参加

して歌い踊り伝承されて来ました。これからも子に孫に伝えてゆきましょう!

(寺田金一文責 『正調 田曾浦富士山登拝道中唄

田曾浦浅間神社・富士講、一九八八年)

【13】富士道中歌(浅間祭歌)

度会郡南伊勢町阿曾浦

へやがてお富士へ立つほどにな

いざや人々こうりをかけ アヨイヨイ

「こうりをかけこうりをかけ こうりをかけナ

いざや人々こうりをかけ アヨイヨイ こうりをかけ_

富士のお山に雪もない

ヘサー両宮さんけいうちすぎてな たけへまいるはありがたや ソレ

、サーあさま山からお富士を見ればな

、サー西がくもりて雨がふるな

東ゃひでりで山よかれ

へサーさらばさらばのいとまごいな

めでとげこしてまたまいる

(下略)

(『三重県の民謡』一〇二ページ)

度会郡南伊勢町道方

竹になりたやお山さんの竹に お山御繁昌のしるし竹

【14】 浅間祭唄

2 しるし竹御繁昌のお山 お山御繁昌のしるし竹

3 今年が世がよくて穂に穂が咲いて ますはとりおけ箕ではかる

4 箕ではかる取りおけますわ ますはとりおけみではかる

5 富士の裾で昼寝したら お山かるいと夢をみた

6 夢をみたかるいとのお山へ お山かるいと夢をみた

7 富士のお山も山上の山も 山の高さは同じこと

8 同じこと高さは山の 山の高さは同じこと

9 富士の土産に何何もろた 杓子三本に札そえて

10 札そえて三本にしゃくし 杓子三本に札そえて

11

まめなよに一代あの子 おの子一代まめなよに 富士のお山をなんというておがむ あの子一代まめなよに

12

いつのお山になぎのはなくば お伊勢お山のいちよのはを

富士の御山もさんじよの山も 山の高さはおなじこと

西は曇りて雨となる 東はひでりで山よかれ

浅間さんはおどれよと おしやるおどりてふりをおめんかきよ

(『南勢町・南島町山漁村習俗調査報告書』三一四ページ)

足も軽かれお山もよかれ 泊り泊りの宿よかれ

1

15

度会郡南伊勢町贄浦

(1) 浅間参りの唄

足もかるかれお山もよかれ とまりとまりの宿よかれ

そよと吹いたは南の風よ 吉田のみなとへそよそよと

吉田通れば二階からまねく しかも鹿の子の振袖で

吉田通りて白場こえて 大井川には水はない

金谷峠をあがりて見れば お宮お山に雪もない

富士の裾野の一むらすゝき いつかほにでてあらはるる

富士の裾野でひるねをしたら お山よいとの夢をみた

富士の御山にちんちらちらと お山どしやすかしらさぎか

おはちまはりてごらい光はいし 下山心のうれしさや

お山みやげにしやくしをもろた これもお山のごりしようかな

こんど来るならもてきておくれ いつのお金のなぎのはを

竹になりたやお山の竹に だんなさかえるしるし竹

たのみますぞや先立様に わしの殿御はしんきやくよ

おもて大日さんおうらは林

仏や信の善光寺

12 8 7 6 5 16 15 14 13 11 10 9 4 1 【16】浅間祭唄 富士の裾野へひるねをしたら おとに聞えし日坂峠 遠州浜松ひろいよでせまい 吉田通れば二階からまねく 浅間さんはおどれよとおしゃる 頼みますぞや先立様に わしの殿御は新客よ 西は曇りて雨となる 東は日照で山よかれ 富士のお山も山上の山も 竹になりたやお山の竹に いづのお山になぎの葉なくば お伊勢お山のいちょうの葉を 今度くるなら持ってきておくれ お山土産に杓子をもろた これもお山のごりしょかな おはちまわりて御来光拝し 富士のお山にちんちらと お山どしやすかしらさぎか 富士の裾野で昼寝をしたら 金谷峠をあがりて見れば 吉田通りて白塚こえて 大井川には水は無い ※各節の初めに「かるかれかるかれやまよふかれ」をつける。 さよが餅をばありで食へ 旦那栄えるしるし竹 山の高さは同じこと お富士お山に雲もない 下山心のうれしさや なぜに女郎やがないしよやら しかも鹿の子の振り袖で お山よいとの夢を見た お山かるいと夢を見る いずのお山のなぎの葉を おどり手ぶりをお目にかけよ (『伊勢民俗』 三四号) 度会郡南伊勢町東宮 5 3 9 7 5 6 4 2 1 13 12 11 10 8 6 4 3 2 1 2 御前正宗わしゃさび刀 此の家裏にはみょうがとふきが 目出度目出度の若松様よ 枝も栄えて葉も繁る 此の家御屋敷は目出度の屋敷 まくり上げたるあの富士の山 富士の裾野で昼寝したら 足も軽かれ御山も良かれ 吉田通れば二階から招く 富士の山も山上の山も 待ちに待ちたる二八日は 御しょうじ上りのぬれ裸 表大日さんお裏は林 沖の暗いのに白帆が見える あれは紀の国みかん船 梅の香りを桜にもたせ 信州信濃の新そばよりも 竹に雀が品良くとまる 今年は豊年穂に穂が咲いて 東宮よいとこ住み良い所 富士へ参りて杓子一本 色で迷わす西瓜でさえも 《山登りの日の唄》 仏や信濃の善光寺 もろてそれで飯盛る有り難さ 止めて止まらぬ色の道 しだれ柳に咲かせたい お前切れてもわしゃ切れぬ 山の高さは同じ事 私しゃ貴殿のそばが良 御山良いとの夢を見た 中にや苦労の種がある いつも人情の花がさく 泊り泊りの宿よかれ しかもかの子の振り袖で 枡はとりのけ箕ではかる 甲斐で見るより駿河よい 鶴と亀とが舞をする みょうが目出度やふき栄

富士へまいりてしやくし一本 もろてそれで飯もるありがたさ

3

吉田通れば二階から招く

しかも鹿の子の振り袖で

吉田の港えそよそよと

2

そよっと吹いたは南の風よ

(『南勢町・南島町山漁村習俗調査報告書』三一五ページ)

(『伊勢民俗』 三四号)

4 3

思いがけなや南から入れて

吉田の港でそよそよと

船は出て行く大旗立てて

家の旦那殿は富士詣り

1	7
沙[[多]]	戋 閆祭貝

〈富士参りの唄

祝え目出度の若松様よ 枝も栄えて葉も茂る

1

2 枝も栄え葉も茂り やこそ祝へ目出度の松と云へ

5 吉田白塚二川すぎて 新居番所は唄で越す

6 晩の泊りは蒲原どまり 泊れ泊れと宿をとる

7

富士の裾野で白鷺踊り

足も軽かれ御山もよかれ

8 富士の裾野で白鷺踊り 今年の御山は尚良かれ

10 9 御山口にと早差しかかる 快晴清浄と唱ふる人に 利益下さる有難さ 快晴清浄と口口に

11 富士の八合で彼方を拝み 光の輝く有難さ

13 白い浴衣に白い袈裟かけて 御鉢廻りの有難さ

12

富士の御山と山上の山は

山の高さは同じこと

〈祝い唄〉

1 叶うた叶うたよ思うこと 叶うた末は鶴亀五葉の松

2 此の家屋敷に井戸掘りそめて 水が出ずに金が出た

3 四角柱を皆買集めて 倉を建てようか金蔵を

5 心こまかに商売なされ 佐渡の金山此処にある

4

此の家棟にて鳴くひよ鳥は

黄金白銀降れと鳴く

6 此の家御家は目出度いお家 鶴と亀とが舞遊ぶ

7 お前百までわしゃ九十九まで 共に白髪の生えるまで

8 呑めよ大黒唄へよ恵比須 中で酌とる福の神

9 今年は豊年穂に穂が咲いて 枡はさておき箕ではかれ

度会郡南伊勢町神前浦

1 吉田通れば二階から招く 然も鹿の子の振袖で

2 向う通るは茶わん屋の娘 誰が落して破れたやら

3 つつじ椿は山間を照す 沖の鰹は浜照す

松のみどりに苺が咲いた お前松ヶ枝妾しや苺

向う通るは清十郎じゃないか 笠は良く似た菅の笠

5

4

6

笠は良くにた清十郎であれば お伊勢詣りは皆清十郎

7 沖の暗いのに白帆が見える あれは紀の国蜜柑船

8 去年一昨年お山は良かれ 今年のお山は尚良かろ

9 踊り太鼓で此の家の前で 島の白羽の唄うまで

10 竹になりたやお山の竹に 旦那栄えの印竹

11 娘島田に蝶々がとまる とまるはづぢゃよ花じゃもの

12 富士の白雪朝日にとける 娘島田はねてとける

13 お伊勢詣りに扇を拾うた 扇目出度や末繁盛

15 14 五月精進いりくる人に お山土産に何もろた はしと杓子と札もろた 利益下さる有難さ

16 頼みますぞや先立様よ わしの殿御は新客よ

17

待ちかねたよ二十八日を

精進上りの有難さ

【18】浅間祭唄

〈道の部〉

1

恋の山 富士は男の恋の山

浅間さんは何んと言って拝む

南無や浅間のだいぼさつ

〈道中唄〉

− 88 **−**

(『伊勢民俗』 三四号)

度会郡南伊勢町方座浦

この家○○さんは福しよな人でおかねだすきで金はかる

三百手拭五百もち 八百腹おび千じゆばん

家の家主人は御商買なさる 佐渡の金山ここにあり

はればいさこればいさのおしこむ船

あれは家のしるし船

沖のだいなではらい拾う かつお釣れとのしるしかな 寄った寄ったは渡出しすじで 行けば千つる万も釣る 此の家お庭にみようがとふきと みようが目出たやふきはんじよう

おばばどこ行く三升たるさげて、嫁の在所へまごだきに

御山土産に何さもろた はしとしやくしとふだそえて お前参ったらもて来ておくれ 伊豆のお山のなぎの葉 山の天上で酒だる拾って 早く下戸してたる開け

山の天上で不思議が御ざる かでで水取るこや不思議 山の八合目でちんちらするは 参る同者衆か白さぎか 山の道中で鳴く時は うずらうぐいすほととぎす

〈山の部〉

吉田通れば二階から招く しかもかのこのふり袖で そよと吹いたは真西か南風かっせ 西はくもりて雨やみかけた 竹に登りて富士山みれば 富士の御山とサンジョの山は 山の高さは同じ事 竹になりたやお山の竹に だんな栄えるしるし竹 五月障子を折たる者は 源氏みらいはなおよかれ 今日は日もよい御山も良かれ 止まれ止まれ白さぎか 浅間山は踊れとおしゃる 踊りてふりをみせましょう 富士の御山に雪がない 東しや日でりで山良かれ 吉田港へそよそよと



そよと吹いたは東の風か 伊勢の港へそよそよと

今年しや世が世で穂に穂にさいて

ますを取りおけみではかる

きせてかこ衆は総宮参り 外宮内宮の札をうけ

また参る

(前唄)

今日はお富士へ立つ様に うしろ精進を良くめされ 山を下戸してまたまいる

(『南勢町・南島町山漁村習俗調査報告書』三一五ページ)

魚市場での輪踊り

〈道の部〉

1 恋の山 富士は男の恋の山

2 浅間山は何んと言うて拝む 南無や浅間のだいぼさつ

2

○サンゲサンゲ 六根精浄 〈前夜浅間神社を祀っている家で〉

オオムネハヂタイ コンゴンソウ

○ノオマクサンマンダア サラサラサラ ナアアムギョウオヂャ ダイボサツ

センタアマアカヤ ソアカヤソアカヤ ウンダラダアカンマ ノオマクサンマンダア

○サアンゲサンゲ ロツコンショヂョー オシメニハヂタイ コンゴンソウー オフヂハセンケンナムアムシンギョウ ダアイボサツ



大幣の家でのオドリ

- 3 浅間山は踊れとおっしゃる 踊りてふりをみせましょう 止まれ止まれの宿良かれ
- 4 今日は日も良い御山も良かれ
- 5 6 竹に成りたや御山の竹に 五月精進を祈りたる者は 旦那栄えるしるし竹 源氏みらいはなほ良かれ
- 7 富士の御山と山上の山は 山の高さは同じ事
- 8 たけに登りて富士山みれば 富士の御山に雪がない
- 9 西は曇りて雨降りかけた 東しゃ日でりで山良かれ
- 10 そよと吹いたは真西か南風か 吉田の港へそよそよと
- 11 吉田通れば二階から招く しかもかのこのふり袖で
- 12 吉田川には紅葉を流す 伊勢の宮川御木流す
- 13 我等同者にしるしが御ざる 白いゆかたに白けさかけて
- 14 白いゆかたに白けさかけて おはちとうさは有りがたい
- 15 かんべかんばら打過ぎて 大井川には水が無い
- 16 おはちめぐりて砂打ちはろて はろた心がありがたや
- 17 とてもこもれば浅間山へ 鳥の四五羽も唄うまで

〈家の部

- 1 浅間山は踊りこんでおじゃる 踊りてふりをみせましょう
- 2 おばばどこ行く三升樽さげて 嫁の在所へまごだきに
- 3 此の家お庭にみょうがとふきと みょうが目出たやふき繁昌
- 4 此の家お庭に井戸掘りそめて 水が出やずに金がでた
- 5 此の家主人は御商売なさる 佐渡の金山ここにあり

6

この家○○様福しよな人で

あかねたすきで金はかる

- 7 寄つた寄つたは浜出しすじで 行けば千釣る万も釣る
- 8 沖のだいなでおはらい捨て かつを釣れとのしるしかな

- 9 はればいさこればいさのおしこむ船は あれはこの家のしるし船
- 10 三百手拭五百はもち 八百腹おび千じゅばん
- 11 何に染めるかこの衆に聞けば 胴は黒白あさぎ染め
- きせてかく衆は総宮参り 外宮内宮の札をうけ
- 今年しや世が世で穂に穂が咲いて ますは取りおけみではかる
- そよと吹いたは東の風か 伊勢の港へそよそよと

14 13 12

(山の部)

- 1 足もかるかれ御山も良かれ 泊れ泊れの宿良かれ
- 2 山のふもとで昼寝をしたら 御山良かれの夢をみた
- 3 山の道中で鳴く鳥は うずらうぐいすほととぎす

山の八合目でちんちらするは 参る同者衆か白さぎか

4

- 5 山の天上で不思議がござる かごで水取るこりゃ不思議
- 6 山の天上で酒樽拾いて 早く下戸して樽開け
- 7 お前参いったら持て来ておくれ 伊豆の御山のなぎの葉
- 御山土産に何々もろた はしとしゃくしとふだそえて

8

- 9 はげた頭に赤手ぬぐいは 春のやけ山岩つつじ
- 10 つつじ椿は山々照らす 沖のかつをは浜照らす

〈前唄、 こうりを取り終って寺へゆく道中で唄う〉

- 1 また参る 山で下戸してまた参る
- 2 今日御富士へ立つ様に うしろ障子を良くめされ

(『南島町史』七五〇ページ)

3

〈四月山部〉

オオムネ ハヂタイ コンゴンソウ サンゲ サンゲ ロツコン ショジョオ

ナァアムギョウオヂヤ ダァイボサ

(第二部)

センタア マアカヤ ソアカヤ ソアカヤ ノオマク サンマンダア サラサラサア

ウンダラダア カンマ ノオマクサンマンダア

(五月山部

サアンゲ サンゲ ロッコン ショヂヨー

オフヂハ センゲン ナアアム シンギョウ オシメニ ハヂタイ コンゴンソウー

ダアイボサアツ

〈第二部〉「以下同ジ」

浅間講

ナアアム

オヤマヂヤ ダァイボサツ

〈第二部〉

「以下同ジ」

オシメニ ハヂタイ コンゴンソオー

サンゲ サンゲ ロツコン ショヂヨー

(七月山部)



大幣・小幣のオヤマアゲ



山頂への引上げ

10 9

12 11

14

13

白いゆかたに白けさかけて

我等同者にしるしが御ざる 白いゆかたに白けさかけて

おはちめぐりて砂打ちはろて はろた心がありがたや

お前百までわしゃ九十九まで 共に白髪の生へるまで とてもこもれば浅間山へ 鳥の四五羽も唄う迄

目出た目出たの若松様よ 枝も栄へる葉もしげる

目出た目出たは三つ重なりて 末は鶴亀五葉の松

〈家の部

2 1 おばばどこ行く三升樽さげて 浅間山は踊りこんでおじやる 嫁の在所へまごだきに 踊りてふりをみせましよう

(道の部)

1 恋の山 富士は男の恋の山

浅間山は何んと言うて拝む 南無や浅間のだいぼさつ

浅間山は踊れとおっしゃる 踊りてふりをみせましょう

3

2

今日は日も良い御山も良かれ 止まれ止まれの宿良かれ 五月精進を祈りたる者は 源氏みらいはなほ良かれ

5

4

6

竹に成りたや御山の竹に 旦那栄えるしるし竹

たけに登りて富士山みれば 富士の御山と山上の山は 山の高さは同じ事 富士の御山に雪がない

8 7

西は曇りて雨降りかけた 東しや日でりで山良かれ

そよと吹いたは真西か南風かませ

吉田通れば二階から招く しかもかのこのふり袖で 吉田の港えそよそよと

17 16 15

8

3 此の家お庭にみようがとふきと みようが目出たやふきはんじよう

4 此の家お庭に井戸掘りそめて 水が出やずに金が出た

5 此の家主人は御商売なさる 佐渡の金山ここにあり

6 この家○○様福しよな人であかねたすきで金はかる

7 寄つた寄つたは浜出しすじで 行けば千釣る万も釣る

9 はればいさこればいさのおしこむ船は 沖のだいなでおはらい拾て かつを釣れとのしるしかか あれはこの家のしるし船

10 三百手拭五百はもち 八百腹おび千じゆばん

12 11 きせてかこ衆は総宮参り 外宮内宮の札をうけ 何に染めるかこの衆に聞けば 胴は黒白あさぎ染め

13 今年しや世が世で穂に穂が咲いて ますは取りおけみではかる

そよと吹いたは東の風か 伊勢の港へそよそよと

14

(前唄)

また参る

〈山の部

足もかるかれ御山も良かれ 止れ止れの宿良かれ

山のふもとで昼寝をしたら 御山良かれの夢をみた

2

1

3 山の道中で鳴く鳥は うずらうぐいすほととぎす

4 山の八合目でちんちらするは 参る同者衆か白さぎか

山で下戸してまた参る

今日は御富士へ立つ様に うしろ障子を良くめされ

2 1

(2登山歌)

1 軽かれ 軽かれ 足もかるかれ お山もよ…かあれ

さあ…泊り泊りの宿よ…かあ…れ…やれ:

宿よ…かれ宿よ…やれ

さあ…泊り泊りの宿よ…かあ…れ…やれ

5 山の天上で不思議が御ざる 籠で水取るこりや不思議

6 山の天上で酒樽拾いて 早く下戸して樽開け

お前参いつたら持て来ておくれ 伊豆の御山のなぎの葉

7

御山土産に何々もろた はしとしやくしとふだそえて

はげた頭に赤手ぬぐいは 春のやけ山岩つつじ

9 8

10 つゝじ椿は山々照らす 沖のかつをは浜照らす

- 前唄はこうりをかき終り寺へ行くとき唄う

★印はどこの部でも唄の終りに唄うもの

(方座浦浅間講配布資料、二〇〇四年)

【19】富士参りの歌

〈1道中歌〉

今日は吉日 日もよいほどに さあ…富士講そろおて

富士参り 富士参り富士参り

先達ち先達ちや幸よかれ さあ…参る道者も山よかれ…

山よかれ山よかれ

鳥羽市答志町

針さしを針さしを

さあ…駿河の…竹細工の…針さ…しを…やれ

7

行ったら必ず買うて来て…お…く…れ

さあ…駿河の…竹細工の…針さ…しを…やれ

6 3 5 4 2 答志とお富士は竿さしや…あ…届く 軽かれ軽かれ足もかるかれ…お山も…よか…れ お富士浅間さんをなんと云うて…拝…む 待つであろ待つであろ 宿の…お嬶が家のかかあ…なあれ…ば さあ…泊り泊りの宿よかあ…れ…やれ 宿よかれ宿よかれ さあ…泊り泊りの宿よかあ…れ…やれ 南無浅間大菩薩 引揚げて…たもれ さあ…南無や浅間ん…大菩薩…やれ… 大菩薩大菩薩 さあ… さあ…南無や浅間ん…大菩薩…やれ: さあ…参る道者も山…よ…かあ…れ…やれ 山…よ…か…れ山…よ…か…れ さあ…参る道者も山…よ…かあ…れ…やれ 先達ち先達ちや…幸せ…よ…かあれ… さあ…掛けて渡ろか…あ…舟橋を…やれ… 舟橋を舟橋を… さあ…掛けて渡ろか…あ…舟橋を…お…やれ さあ…お湯をわかして待つで…あろ…おやれ さあ…お湯をわかして待つで…あろお…やれ

> 10 さあ…参る道者か白さぎ…かあ…やれ 白さぎ…かあ…白さぎ…かあ… さあ…参る道者か白さぎ…かあ…やれ 鳥か…小鳥か…空飛ぶ…鳥…かあ… さあ…鹿のかのこの…ふり袖…を…やれ

12 うれしさようれしさよ さあ答志の港へ…そよそよとやれ 道者願いの…ならいの…風で… さあ…下る心の…うれしさ…よ…やれ

さあ…外宮内宮の宮めぐる…やれ

宮めぐる宮めぐる

8 たった五○銭の餞別もろて

さあ…「ねる」の「じばん」に「えり」そえてやれ… えりそえて…えりそえて…

さあ…「ねる」の「じばん」に「えり」そえてやれ

9 吉田通れば…二階から…ま…ねく…

さあ…鹿のかのこの…ふり袖…を…やれ ふり袖をふり袖を

13 11 さあ…外宮内宮の宮め…ぐ…るやれ 目出と下降すれや…御参宮でござ…る… そよそよとそよそよと さあ…下る心の…うれしさ…よ…やれ おはち…めぐりて御来光を拝む さあ答志の港へ…そよそよとやれ

(『伊勢民俗』 三四号)

【20】富士参り道中歌

志摩市阿児町志島

1

〈総垢離呪文〉

一に礼拝 帰命頂礼 懺悔懺悔六根清浄

オシメニ八大金剛童 | 梵天帝釈リヨーフの大日 | 富士は権現南無浅間大菩薩

〈道中唄〉

サよしだの港へ そよそよと

アリガーターヤーナ オヤマアヨーカーレサア アリガータヤナ

お富士おやまを げこした夜は

サか、がよろこぶ 親よりも

サア アリガータヤナ



6

晩の泊は

日坂泊まり

買うてもとかよ 安部川餅

総垢離

*旧正の日待になると、太鼓をた、いて、道中唄などをうたって夜更しをする。

=

〈総垢離呪文〉

一に礼拝

帰命頂礼

懺悔懺悔

六根清浄

(上村角兵衛「富士講」私家版

富士は権現

南無浅間大菩薩

おしめに八大金剛童子

梵天帝釈

両部の大日

ノーマクサーマンダー バーサラダ



17 16 15 14

真言の唱和

20

〈道中唄〉

1 お富士男に 恋の山 六十三まで お待ちあれ

(はやし) ありがたや

3 そよと吹いたか 真西か南風か 吉田の港へ そよそよと 2 足も軽ろかれ お山もよかれ 泊まれ 泊まれ 宿よかれ

4 吉田通れば 二階から招く しかも鹿子の振袖で

5 吉田 二川 白須賀越えて 新居の番所は 歌でやる

7 ここは蒲原宿である 願うお山は 彼方かな

8 金谷峠に登りて 見れば 大井川には 水がない

9 晩の泊は 吉原泊まり 明日は お山の麓まで

10 富士の裾野で 昼寝をしたら 山がよいとの 夢を見た

富士の裾野で 今咲く花は 桔梗 かるかや おみなえし

木山三里に かや山三里 いたどり山をば 歌でやる八合台から ご状が来た 山がよいとの ご状が来た

13 12 11

富士の裾野で

今切る竹は

お家ご繁昌の

幟竹

登り登りて お天上を見れば 空の近さや ありがたや

すぐと袈裟をば 大日さまへ 掛けて拝むは ご来光

お富士お山に 名所がござる かごで水汲む これ名所お富士浅間 秋葉様 火伏 仏 善光寺 弥陀如来

19 兄貴ばかりか 弟も連れて 重ね山する ありがたや18 お富士お山に 名所がござる かごで水汲む これ名町

兄貴はかりか 芽も連れて 重ね山する ありかた

マーカラシャ テイソワカヤ

ウンタラ

タカーマー

25 23 22 21 27 26 24 【21】富士詣りのうた ○富士のお山はたかくて寒い ○ありがたや ありがたや おやまもよかれ とまりとまりの宿よかれ ○富士の裾野のひとむらすすき いまは穂にでてみだれあう 〇木山三里にかや山三里 木なし三里はうたで越す ○富士のお山でいま鳴くとりは ほんにほけきよやほととぎす ○富士のお山を夕山さして 朝はおがむよ御来迎を ○お富士お山にゃ霧がふる うちじゃ白けの米がふる ○兄きばかりか 裏と表に 御判を据えて そよと吹いたか 晩の泊は 豊川泊まり 貽貝ばかりか お富士参土産に お富士参りて 下降りした夜は 妻が喜ぶ 親よりも お富士参りて 秋葉山かけて 半僧さんから宝来寺 *前のうたは、「お蔭まいり」のときの唄のようでもある。 *出航のときには、里の女の人等は、船の見えなくなるまで、富士詣での唄をうたってその *広岡楠雄氏が手書きしたものを転写した。 行を盛んにする。 扇も添えて 扇めでたや 末繁昌 おじきまでぬけて 何々もろた 貽貝杓子に 掛け軸添えて 北東か東風か 明日は吉田で 家の納戸へ 納め置く あわせことずけ たよりない お伊勢の港へ そよそよと 重ねかさねて山よかれ 船に乗る (『志摩の民俗』上巻、一四〇ページ) (『志摩の民俗』上巻、 (上村莞爾氏提供資料) 志摩市大王町畔名 一四五ページ) 5 3 4 2 (1) 富士詣の唄(道中唄、 24 ヘアー木山三里に茅原三里 ~ よその道者の お山もよかれ 吉田吉田といそいで来たが 急ぐ吉田に名所なし アー和具の道者は なおよかれ

【22】富士詣りの歌

志摩市大王町船越

、泊り泊りの宿のかかよかれ アーチョイトマカ チョイトマカ アーめめより心がなおよかれ アーチョイトマカ チョイトマカ アーいたんどり山をば歌で行く

(『三重県の民謡』七四ページ)

志摩市志摩町和具

【23】富士参りの唄(お精進)

へお待ちかねたよ 二十八日を アーお精進あがりの ぬれ肌を

、富士のすそ野で 昼寝をしたら

アーお山よいとの 夢をみた

(『三重県の民謡』一〇三ページ)

富士音頭

今日は吉日日もよいほどに うぶすな詣りの門出しやう

外宮内宮のお宮をめぐり 朝熊が岳をふしおがむ

今宵いち夜はかりのやど あすは出舟のかじまくら

そよと吹いたはま西かまぜか 吉田の浜へそよそよと

志摩市浜島町南張

10

- 6 吉田通れば二階からまねく しかも鹿の子の振袖に
- 7 吉田白須賀二川こえて 川はなけれど二川よ
- 8 音にきこえし荒井の番所 旭にかがやく槍みごと
- 9 新井一里は橋にのり 前坂三里は馬車にのる
- ここは掛川名残りの宿よ 下向に買いましょ花呉座を
- 11 遠州浜松ごしやの宮 下向に参ろと伏し拝む
- 12 見付け町をば通りすぎ 袋井さしていそぎゆく
- 13 さよの中山あめが餅 夜泣き石とはこれとかや
- 15 14 かなや島田のあいの川 かなや峠で大井川見れば 大井川とはこれとかや 大井川には水もなし
- 16 岡部通ればまり子の宿よ 足でけりあげお目にかきよ
- 17 ここはあいのしゅく四軒屋で御座る 下向に買ひましょとうだんご
- 18 ここはうつのや峠でござる くりぬき穴とはこれとかや
- 20 19 ここは駿河の府中でござる 下向に買ひましょ竹細工 くりぬき穴にはランプがとぼる 一町あまりのくりぬきよ
- 21 えんのえじりを過ぎゆけば 心おきつにやどりつく
- 22 三保の松原清見寺 田子の浦とはこれとかや
- 24 塩焼浜とはこれとかや
- 25
- 26
- 28 富士の袖野の天照教さまへ 下向に参ろと伏拝む
- 30 ふじのすそのの一むらすすき いつかほに出てしだれあう

- 23
- 薩陀峠でお富士を見れば おふじお山にゃ雪もなし
- ここは名のある由井が浜
- ゆいを通ればかん原どまり 岩はなけれど岩本よ
- ここは大宮浅間さまよ みたらし池とはこれとかや
- 27 あがりましたよ大経坊さまの ありがた手引でさしかかる
- 29 富士の袖野へ昼寝をしたら お山よいとのゆめを見る

- 31 艸山三里に木山が三里 木原の山へとさしかかる
- いたどり山から空見れば そらの近さやありがたや

32

- 33 胸突八町は念仏たのむ 同行一しょになむあみだ
- あがりましたよ大日さまへ 捺してもらおや朱の印を
- 数珠とけさをば大日さまへ かけておがむぞありがたや
- 剣がお峯で御来迎拝み うらの薬師へさしかかる
- うらの薬師で御判を受けて 拝む心はありがたや

37 36 35 34

- 38 近江道者と南張道者 うらの薬師で踊りあふ
- 39 東ぜんしをゆるりとめぐり 駒が岳とはこれとかや
- 40 お鉢めぐりてすそ打はらひ 下向の心はありがたや
- 41 いたどり山から空みれば 名残惜しさや有りがたや
- 42 木なし山から木山をすぎて 艸山三里を時のまに
- 43 44 ここは名のあるぶんぶ川 おしょじおとしの垢離をかく くだりましたよ大経坊さまへ 名残り惜しさに伏し拝む
- 45 このやおうちはご繁昌なおうち うちでは白げのよねがふる
- ひっちょうはっちょうおかるがさ お山もよかれ さやかで下向して又参ろ

九そんごちーぼーさー 五かくの峯を三天六ぼさー 帰命頂礼さんげさんげ だぶ 三かんぜおん 四しゃか牟尼仏 九大めうさ だいりきぼーさー 六根清浄 六は薬師瑠璃光によーらー 大峰八大金剛どう 内いんよかい曼荼羅 一がく地蔵大ぼさー 一千二百よろんかいさん 七に文珠ぼーさー 中央胎蔵界大日如来 二あみ 八よう

(『志摩の民俗』上巻、三二三ページ)

役の行者大ぼーさー

(2) 富士詣り

ヘサーエー

今日は吉日 日もよい程にのー

ソーリャ

おぶしな参りの門出でしょ

ヤレ門出でしょうの

サテ外宮内宮お宮を巡りの ソーリャ

朝熊が岳を伏し拝む

ヤレ 伏し拝むのー

そよと吹いたは 真西かまぜかのー ソーリャ

吉田の港へそよそよと

ヤレ そよそよとのー

吉田過ぐれば 二階から招くのー

しかも鹿の子の振り袖で

ヤレ ふり袖でのー

ヘサーエー

吉田吉田と急いでは来たがのー

ソーリヤ

急ぐ吉田にゃ名所なし

ヤレ 名所なしの1

吉田志らすか二川を越えてのー ソーリャ

川はなけれど 二川よ

ヤレ 二川よの一

【25】浅間さんの歌

北牟婁郡紀北町白浦

サンゲ サンゲ 六根清浄

ヲシメにハツダイ コンゴンド

富士は浅間 大菩薩

2 サンゲ サンゲ 六根清浄

大峯参所ヲシメにハツダイ コンゴンド

南無行者 大菩薩

3 ウンタラタカマノ オオマクサンバ

ダマサンタ センダンバカリ

そふダンソフカイ

南無浅間大菩薩

5 南無吉野大権現

[26] 御山の歌

1

「昭和三十六年七月十二日(表紙)

御山の歌

祝目出たのかづらの浦で 枝もさかへて葉もしげる

富士のせんげ様 おどれとおしやる おどりてふりをみせませう

あのやせんだちどのあ 富士まいる

富士のお山はこいの山 山でげこして また参る

あしもかるかれ お山もよかれ とまり / へのやどよかれ

(『三重県の民謡』七四ページ)

風はふきから 西まぜよ 吉田港えそよく~と

吉田とうりて しらつかこえて あらい私に風もない

北牟婁郡紀北町島勝浦

− 97 **−**

(『封堠』二九号)

ここはみつきか 袋へか こしをかへぞ掛川や

金や峠え のぼりてみれば 大井川には水もなし

富士のお山は雪がふる。あとで白げの米がふる。島田宿から馬にのり。 すぐにお山えすぐかける

夕べ夢見た 目出度いゆめを

白いゆかたに白けさかけておはち廻りの夢を見た

お山げ山にはちこえ下る 上るどーしゃは げばをする

今年 しやーわせ 思た事かのた そでの下から玉ぐさもろて

あなた一両よ 私二両

お伊勢な、度 熊野え三度 あたご様えは月参り

五尺てのぐい なかそめて おれにくれるより 宿えおけ

お前百まで わしや九十九まで 共に白げのはゆるまで

升になりたやお山の升に だんな栄えて ふらふ升かとはくいがと二又沖で えさいらずにからこつので

つゞじつばきは山々照す 夏のかつをは浜てらす

昭和参十六年七月十二日

目出度/

~は三つ重なりて

末はつる

かめ

五ようの松

旧五月三十日 関下利三郎

脇 金作

玉置芳太郎

山下輿平

島本豊太郎

場所 島勝共同大敷組合 中村宗太郎書

2

* 当該冊子は表紙・裏表紙を含め七丁。紀北町立海山郷土資料館の所蔵

(『17~19世紀の近畿・東海地方における富士信仰の受容』一五二ページ)

祝目出たの かづらの浦でサ

枝も栄えて 葉もしげる

富士の浅間さま 踊れとおっしゃる

踊りてふりを 見せましょう

あのや先達殿ァ 富士まいる

足も軽かれ お山もよかれ

とまりとまりの 宿よかれ

風は吹きがら 西まぜよ

.

吉田港へ そよそよと

吉田通りて 白塚越えて

新居渡しに 風もない

(中略)

目出度目出度は 三つ重なりて

末は鶴亀 五葉の松

〈浅間山の歌〉

サイゲ サイゲ 六根清浄

ヲシメにハツダイ コンゴンドージ

南無富士は 浅間大菩薩

- 98 -

通りゃ寄りたや よりゃあがりたし

オーハチョ立てたい 〆かけて

あがりゃその夜は 泊まりたし

わしの待つのは 六月一夜

森を眺めて 思案する

月夜鳥と 一膳飯は

宿をしてくれ 一夜の宿を

神にご信心の あるお方

昨夜夢を見た 目出たい夢を

オーハチョ廻るような 夢を見た

御精進上がりの ぬればなを

わしの待つのは 六月一夜

竹になりたや おやまの竹に

つごも高幣で 浪花かける

好きな殿ごに さされたや

二十八日は 八本竹で

歌を知らなきゃ おめけよさわげ

それがすなわち 歌になる

	(『封堠』二九号	
寄りたけれども	元号) ここかこの町か	
りれども はづかしや	可か この町筋か	

尾鷲市三木里 夜泊めてくれ 虚無僧でござる

[27] 御山の歌

今年初めて おやまにはいり

足もかるかれ おやまもよかれ

泊まり泊まり 宿よかれ

沖の暗いのに 白帆が見える 吹いてきかせる 尺八を

みかん船なら 急いでおいで

師走やまぜが 西となる

沖のとなかの 三本竹は

生まず竹だよ 子がきかぬ

潮にもまれて 子がさかぬ

鮎は瀬に住み 鳥は木の枝に

人は情けの 下に住む

わしの十九の 厄年よりも

主さん検査が 気にかかる

田川の橋には 日傘が二つ

私しゃ行くけど 二人の親が 御礼参りか 頼もしや

きらいますぞえ 相撲とりを

相撲に負けても ケガさえなけりゃ

今夜は私が 下になる

北かと思えば 又出しの風

風まで恋路の 邪魔をする

鳥羽へ鳥羽へと 舵をとるけれど

あれは紀の国 みかん船

生まず竹では わしゃないけれど

- 99 -

潮は下げ潮 出しの風

いたら見てこい 名古屋の城を

金の鯱鉾 雨ざらし

二朱が金なら 三朱は三河

気になる木になる みかんでさえも

白鷺みたいな ハイカラさんに

さいてうつむきゃ 花簪が

貴殿百才まで 私九十九まで

共に白髪の 生えるまで

山田監獄所は 仮の宿

格子窓明け 空星眺め

あの星辺りが 主の宿

笠がよく似た すげの笠

お伊勢参りは 皆清十郎

姉は婿取り 妹やる

四朱は鳥羽浦 五朱が酒 いろずきゃ裸に なるわいな

惚れて鳥みたいな 苦労する

落ちて殿ごの 膝に立つ

どうせ行く先は 北海道とさだめ

向井通るは 清十郎ぢゃないか

笠がよく似て 清十郎であれば

妹ほしさに 姉くれというた

何時も月夜で 夜も八月で

殿も二十五で いればよい

何時も月夜は よいものなれど

闇がよい

わしとあなたは 浅瀬を渡る

花は越後で 実は佐渡へ

恋と言う字を 分析すれば

桜と言う字を 分析すれば

宮の熱田の 二十五丁橋は

誰がかけたか 中高に

宮の熱田の ならずの梅は

花は千咲く 実は一つ

恋しくば 又尋ねておいで

昼は忍田の 森に住む

夜は松虫 鳴き明かす

姉もさすかよ 妹もさすか

おなじ蛇の目の 傘をさす

今宵一夜は

深くなるほど 帯を解く

佐渡と越後の 境の桜

いとしいとしと 言う心

二階の女に 木がのこる

伊豆の下田を あさ夜にまいて

晩は四州の 鳥羽浦へ

昼は忍田の 森にわ住めど

遠州浜松 広いよでせまい

横に廊が 二丁立たぬ

沖のとなかに わしゃ茶屋たてて

鳥羽で三十日 安乗で二十日 上がり下がりの 船をまつ

鳥羽で咲く花 安乗で開く

思う的矢で 唯一夜

寝てもかまんか 植田の中へ とかく安乗は 花盛り

怒りゃせぬかよ 田の主が

器量よいとて けんたかぶるな 小野の小町の 末を見よ

ここは播州の 舞子が浜よ 向こうに見えるは 淡路島

通う千鳥に 文ことずけて

もしも知れたら 須磨の浦

今宵一夜は 浦島太郎 あけてくやしや 玉手箱

殿のくる夜は 宵からわかる

裏の小池で 鴨が鳴く

行たら見てこい お伊勢の神楽

寝たり起きたり ころんだり

わしの主さん 五反田で一人

涼し風吹け 空曇れ

伊勢の津よりも 松阪よりも

心残すは 愛の山

愛の山には おすぎにおたま

金をくれよの 三味を弾く

金の橋では 「セキラ」が滑る

架けておくれよ 板橋を

さまよあれ見よ 浅間の山を

金の煙が 三筋立つ

三筋立つのは 何時ものことよ

四筋立つのは そりゃ不思議

親の意見と なすびの花は

千に一つの 無駄がない

私しゃ十八 主さんは二十才

泣くなめんどりさんよ まだ夜は明けぬ 来年厄年 検査年

明けりゃお寺の 鐘が鳴る

夜中起きすりゃ 夜は深々と

柱時計の 音ばかり

私しゃ浜の松 寝入ろうとすれど

磯の小浪が ゆりおこす

明けあくやしや くやしや明けて

明けてくやしや くやしやあけて 登りますぞえ 富士の山

宿を立ち退き 「コオリ」をとりて

登りますぞや 富士の山

富士に登るは なんと言うて登る

富士は浅間 大菩薩

白い浴衣に 白い袈裟かけて

登りますぞや 富士の山

- 101 -

目出た目出たの 目出た目出たが 三つ重なりて 締めておくれよ 両手を廻し こんど来るとき 取ってきておくれ 帰る道にて 「シバ」をとる 枝も栄えて 葉も繁る 鶴が御門に 御幣吊る人 富士のお山の「ナギ」の葉を 〆縄を 巣をかける 若松様は

中は鶴亀 五葉の松

ここの奥さん 福者でござる 水が湧かずに 金が湧く

2

今年初めて おやまにはいり

足もかるかれ おやまもよかれ

泊まりとまりの 宿よかれ

お家ご繁盛の 舞をする

旦那大黒さんよ 奥さんは恵比須

おいたる奉公人は 福の神

ここの床の間に 茗荷と蕗と

茗荷目出たや 蕗繁盛

枝も栄えて 葉も繁りゃこそ

祝い目出たと 言うてうたう

昨夜夢を見た 目出たい夢を

オーハチョ廻るよな 夢を見た

白いゆかたに 白いけさかけて

つごも高幣で 浪花かける

二十八日は 八本竹で

さした盃 中見ておくれ

ここの座敷は 目出たい座敷

鶴と亀とが 舞をする

鶴が舞います この家の屋根で

ここのお庭に 井戸掘りすれば

ここかこの町か この町筋か

神にご信心の あるお方

寄りたけれども はづかしや

宿をしてくれ 一夜の宿を

竹になりたや おやまの竹に

御精進上がりの ぬればなを

夜泊めてくれ 虚無僧でござる

好きな殿ごに さされたや

吹いてきかせる 尺八を

わしの待つのは 六月一夜

わしの待つのは 六月一夜

オーハチョ廻るような 夢を見た

-102-

オーハチョ立てたい 〆かけて

鳥羽で咲く花 安乗で開く

通りゃ寄りたや よりゃあがりたし

あがりゃその夜は 泊まりたし

唄えつわもの 声はり上げて

唄で男前は さがりはせぬが 唄で男前は さがりゃせぬ

声で男前が さがります

唄を知らんのか 唄はない

ここのお主は 皆めんどりか

唄を知らなきゃ おめけよさわげ

行たら見てこい 名古屋の城を それがすなわち 唄となる

金の鯱鉾 雨ざらし

行たら見てこい お伊勢の神楽

沖の暗いのに 白帆が見える 寝たり起きたり ころんだり

あれは紀の国 みかん船

みかん船なら 急いでおいで 師走やまぜが 西となる

北かと思えば 又出しの風

風まで恋路の 邪魔をする

鳥羽へ鳥羽へと 舵をとるけれど

潮は下げ潮 出しの風

鳥羽で三十日 安乗で二十日

思う的矢で 唯一夜

とかく安乗は 花盛り

沖のとなかの 三本竹は

生まず竹だよ 子がきかぬ

沖のとなかの 三本竹は

うまず竹かよ 子がさかえ

生まず竹では わしゃないけれど

潮にもまれて 子がさかぬ

沖のとなかに わしゃ茶屋たてて

上がり下がりの 船をまつ

親はとゆ竹 子はとゆの水

親が先立ちゃ どこまでも

親のない子に親はと聞けば

親はあります 六月に (極楽)

親のない子は 道の端の草よ

どこのどなたも 踏みつける

私しゃ行くけど 二人の親が

きらいまずぞえ 相撲とりを

相撲になげられ はいからさんに振られ

どこでたつやら わしが身は

相撲に負けても ケガさえなけりゃ

今夜は私が 下になる

妹ほしさに 姉くれというた

姉は婿取り 妹やる

姉もさすかよ 妹もさすか

おなじ蛇の目の 傘をさす

私や兄嫁 位は高い

起きて飯炊け 弟嫁

竹の丸橋 二度渡ろとも

かかろまいどへ 兄嫁に

向井通るは 清十郎ぢゃないか 笠がよく似た すげの笠

お伊勢参りは 皆清十郎

笠がよく似て 清十郎であれば

田川の橋には 日傘が二つ 御礼参りか 頼もしや

寝てもかまんか 植田の中へ

こよいここに寝て 明日のばんはどこに 怒りゃせぬかよ 田の主が

千に一つの 無駄がない

筆の始めは いろと書く

鮎は瀬に住み 鳥は木の枝に

人は情けの 下に住む

器量よいとて けんたかぶるな

小野の小町の 末を見よ

わしの十九の 厄年よりも

明日は田の中 畦まくら

親の意見と なすびの花は

今年始めの 学校でさえも

私しゃ十八 主さんは二十才

来年厄年 検査年

主さん検査が 気にかかる

貴殿百才まで 私九十九まで

共に白髪の 生えるまで

白鷺みたいな ハイカラさんに

惚れて烏みたいな 苦労する

二朱が金なら 三朱は三河

四朱は鳥羽浦 五朱が酒

どうせ行く先は 北海道とさだめ

山田監獄所は 仮の宿

さまよあれ見よ 浅間の山を

金の煙が 三筋立つ

三筋立つのは 何時ものことよ

四筋立つのは そりゃ不思議

伊勢の津よりも 松阪よりも

心残すは 愛の山

愛の山には おすぎにおたま

金をくれよの 三味を弾く

お杉お玉が 百姓の子なら

金の橋かけ 宮川へ

金の橋では 「セキラ」が滑る 架けておくれよ 板橋を

佐渡と越後の 境の桜

花は越後で 実は佐渡へ

わしの主さん 五反田で一人

涼し風吹け 空曇れ

わしとあなたは 浅瀬を渡る

伊豆の下田を あさ夜にまいて 晩は四州の 鳥羽浦へ

遠州浜松 広いよでせまい

宮の熱田の 二十五丁橋は 横に廊が 二丁立たぬ

宮の熱田の ならずの梅は 誰がかけたか 中高に

花は千咲く 実は一つ

向こうに見えるは 淡路島

通う千鳥に 文ことずけて

気になる木になる みかんでさえも

いろずきゃ裸に なるわいな

恋と言う字を 分析すれば

いとしいとしと 言う心

桜と言う字を 分析すれば

二階の女に 木がのこる

こいしおがわで 水くむ女郎が

おけももらんのに そでしぼる

恋しくば 又尋ねておいで

昼は忍田の 森に住む

昼は忍田の 森には住めど

夜は松虫 鳴き明かす ここは播州の 舞子が浜よ

もしも知れたら 須磨の浦

明けりゃお寺の 鐘が鳴る

明けりゃお寺の 鐘が鳴る

鐘としもくが あえば鳴る

月夜鳥と 一膳飯は 森を眺めて 思案する

深くなるほど 帯を解く

殿のくる夜は 宵からわかる

さいてうつむきゃ 花簪が

裏の小池で 鴨が鳴く

落ちて殿ごの 膝に立つ

泣いてうつむきゃ 前かんざしが

落ちてとのごの ひざに立つ

何時も月夜で 夜も八月で

殿も二十五で いればよい

何時も月夜は よいものなれど

今宵一夜は 闇がよい

あの星辺りが 主の宿

格子窓明け 空星眺め

夜中起きすりゃ 夜は深々と

柱時計の 音ばかり

私しゃ浜の松 寝入ろうとすれど

磯の小浪が ゆりおこす

泣くなめんどりさんよ まだ夜は明けぬ

なくなめん鳥 まだ夜は明けぬ

鐘が鳴るかよ しもくが鳴るか

宿を立ち退き 「コオリ」をとりて

登りますぞや 富士の山

今宵一夜は 浦島太郎

登りますぞや 富士の山

富士に登るは なんと言うて登る

こんど来るとき 取ってきておくれ

目出た目出たの 若松様よ

枝も栄えて 葉も繁る

鶴が御門に 巣をかける

白い浴衣に 白い袈裟かけて 明けてくやしや くやしや明けて 明けてくやしや くやしやあけて あけてくやしや 玉手箱 登りますぞえ 富士の山

富士は浅間 大菩薩

御幣吊る人 〆縄を

富士に登りて 御幣を上げて

帰る道にて 「シバ」をとる

枝も栄えて 葉も繁りゃこそ

目出た目出たが 三つ重なりて

富士に参る時きゃ なんと言うて参る

なむやせんげん だいぼさつ

締めておくれよ 両手を廻し

富士のお山の「ナギ」の葉を

祝い目出たと 言うてうたう

さした盃 中見ておくれ

鶴が舞います この家の屋根で

中は鶴亀 五葉の松

ここの座敷は 目出たい座敷

お家ご繁盛の 舞をする

ここの床の間に 茗荷と蕗と

鶴と亀とが

舞をする

茗荷目出たや 蕗繁盛

ここのお庭に 井戸掘りすれば

水が湧かずに 金が湧く

ここの奥さん 福者でござる

黄金たすきで かね計る

旦那大黒さんよ 奥さんは恵比寿

おいたる奉公人は 福の神

(東成志氏提供資料)

一、同(⁴ ⁴ [†]) 志 郡	令 三拾八人	○	含 拾四人	(2.2.) 令 拾四人 大月十一日 大月十一日 大月十一日 大月十一日 大月十一日 大月十一日 大月十一日 大月十一日	(2)オ) 伊勢国分
田野田村 田野田村 田野田村	東黒部村 大百拾八人組 善六殿	先達 松治郎殿 先達	(異華) (異華) 佐右衛門殿 佐右衛門殿	1. 大先立 大先立 一西山善六殿	分
一 六 月 飯十 高 田 郡	(5 月) 一、度会郡	I	一、壱志郡	已六月十四日 日 (4 ⁴) 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 日 日 日 日	
西野 拾 五 人 林 德 藤 專	坂本村	五人	小津村	大き 簑田源四郎殿 久居戸木村 集田源四郎殿 の まま りょう ちゅうしゅ かんしゅう かんしゅ しゅんしゅ しゅんしゅ しゅんしゅ しゅんしゃ しゅんしゃ しゅんしゃ しんしゃ し	先達 牛場金次郎殿
林 德 藤 専助	佐 長 弥八殿 殿	嘉 安 助殿	三之烝殿 新蔵殿		次郎殿
(6 ウ)	一、壱志郡 日六月廿七日		(6 x)	一、安農郡日	(5 ウ)
	竹 原 七 村 人 先 達		先 達	足坂 六村 人	
来 五十治殿 忠七殿 惠王衛殿 曹兵衛殿 門殿	惣 源 蔵 殿	甚 平助殿 整三郎殿	平 善幸 茂八殿 殿 殿 殿	源兵助殿	友八殿
一、壱志郡 垣内村 一、壱志郡 垣内村 一、壱志郡 垣内村 一、壱志郡 垣内村	安水三午 年	一、壱志耶	7 1	一、壱志郡 白	
世内村 垣内村 三 三 三 三 三 毎 三 三 音 領 三 六 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	弐 人	久 居 七 万 人 町		白 子 小 川 村 人 人	
人達	ı	•			

一、 壱志郡 郡	(8 †)	で志群 (郡)	一、 (s z t) 一、 (s z t) (
小 川 九 村 人		小倭上野村 - 六月 四人	下 津 飯浦 間 四 村 人
庄 庄 吉 蔵 殿 殿	利 喜 万 善 三郎 兵衛殿 殿 殿 殿	善四郎殿	同 甚太郎殿 同 基大郎殿 不
安 ₍₁₀ *) 安永六 酉 六月		(9 †)	一、飯月 高郡 ***
水 石 村 人	下 て で で で で で で で で で で で で で		松 坂 横領 野 九 村 人
定 徳 元 庄 七 次 介 在 殿 殿		原清 平 長 源兵 南 殿 衛 殿	兵 平 善 藤 源 専 喜 卯 七七七七七
一、 一、 渡会郡 宮本	(11 t) 一、壱志郡 白子領 上野宿	一、壱志郡 畑村	七月十六日 二見 一、渡会郡 七月廿三日 一、渡会郡 津宿 岩
上下弐人 先達 嘉蔵殿	四人四人中藤作兵衛殿兵介殿	三人 先達 勇介殿 与兵衛殿	H 71 <u>V</u>
(12 [†])		(Î2 청	Î1 †
弐 拾	切 和 原 泉 村 村		
五人 川喜田喜兵衛殿 悦方藤蔵殿	条 利 惣 定 庄 庄 介 八 吉 介 殿 殿 殿 殿	庄 惣 久 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 東 殿 殿	大 又 藤 久 和 茂 三 左 平 嘉 喜 六

14 才	一、飯高郡 桂:	(3 ウ) 水小	一、	(13 対	一、多気郡 佐居 佐居
	桂 瀬村 五 五 人	丸之内村 小川村	原 津 介幡町 下町	ළ 栃 飯 村 村	据 在原村 三人
政 勘 源 藤 専 庄 源	先達	丸屋新六殿中森重郎右衛門殿	·	人 安太郎 源四郎 殿 殿	
(is the state of			一、 一、 老志郡 八知村		
	八人		拾 六 人		
久七殿 年 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	久 六 殿 郎 殿	銀蔵 才之介殿 アルト 殿	平 伝	善蔵殿与三之助殿	弥 亀 伊 庄七殿 歴 殿
	神津佐村	一、渡会郡 亥六月十六日	桑名宿	一 廿 `九 日	
和 儀 茂 久 文 伊 甚 助 介 八 蔵 吉 助 介 殿 殿 殿 殿 殿 殿	先達 長次郎殿 長五郎殿	五人佐藤吉九郎殿	大須七右衛門殿 水谷善六殿 太田文五郎殿	拾壱人 忠五郎殿	新 大 右 衛 門 殿
(17 t) 一、同 一、飯 飯 高 山坂 村 街	(16 t) 一、多気郡 佐田村				(16 t) 一、飯高郡 松坂領
四拾四人 新助殿	諸親 先 達 新 六 殿	幸	藤 半 三之介殿		拾壱人

西野村

文介殿	藤蔵殿	市介殿	要蔵殿	長蔵殿	忠蔵殿	浅七殿	文吉殿	清介殿	佐兵衛殿		利	17个数	宗五郎殿	善蔵殿	与市殿	新助殿	長蔵殿	半蔵殿	勘六殿	文吉殿	文六殿	金蔵殿	伊三郎殿	忠蔵殿	三五郎殿	徳助殿	喜介殿
十九日		川崎町	(19 オ)	一、渡会郡	六月廿六日	安永九子年					津宿	_	亥七月四日	(18 ウ)		上楠村	一、多気郡	亥六月廿八日								11 2	(8)
	三人	田川宗八殿	山口銀兵衛殿	横田屋加兵衛殿			四人	増川文蔵殿	神田弥七殿	横尾定七殿	鈴木平右衛門殿			弐人	三平殿	半蔵殿			三拾七人	与三松殿	久介殿	孝助殿	儀八殿	伊介殿	金七殿	宗介殿	千蔵殿
松坂領	一、飯高郡		<u>.</u>				200 ** **															(19 p) 戸木村	一を志君	十日	上下弐人	白子宿	-,
		手 抢走人	7.1	宗 沙良 展	き 五百 治展	上子分展	护 一般	京裁设	东 方 方 方 一 方	龍蔵殿	藤蔵殿	和介殿	伊代助殿	佐蔵殿	久米右衛門殿	浅七殿	勘助殿	裕介	する。	喜代プ展	写 小介展	請親 親王良属				伊藤銀蔵殿	
一、鈴鹿郡	六月四日	殿村	飯高郡	下蛸地村	新屋鋪村		西黒部村	一、飯野郡	· 一月月日	(21才) 天明元丑年	六人					小川村	一、壱志郡	七月三日	八人	2	0 7						下茅原田村
		竹之内忠蔵殿		奥出佐七殿	坪井庄五郎殿	川口善兵衛殿	中谷常右衛門殿				人	生川吉平殿	田畑与助殿	佐田久介殿	坪井伊右衛門殿	同栄蔵殿	宮崎利七殿	講親	人	源蔵殿	善右衛門殿	石之助殿	弥兵衛殿	善七殿	友七殿	市兵衛殿	五兵衛殿

22 ウ	2															22 3	2				東原村	田丸領	同十一日			亀山宿
寅松殿	庄蔵殿	専次郎殿	甚蔵殿	富之助殿	久次郎殿	三介殿	豊松殿	助三郎殿	才次郎殿	善吉殿	藤蔵殿	徳二郎殿	平蔵殿	勝次郎殿	松太郎殿	金蔵殿	常三郎殿	甚之助殿	佐源太殿	文蔵殿	彦三郎殿			弐人	和七殿	与四郎殿
												2 3	(3)								下仁柿村	松坂領	うし六月廿日			
																			同	同		先達		弐拾四人		
半蔵殿	源七殿	伝次郎殿	利右衛門殿	弥兵衛殿	伝六殿	九介殿	武右衛門殿	長吉殿	善蔵殿	喜右衛門殿	平蔵殿	清蔵殿	才兵衛殿	仙次郎殿	忠蔵殿	忠次郎殿	小七殿	善兵衛殿	弁蔵殿	伝右衛門殿	吉助殿				辰之助殿	万蔵殿
L																										
七月六日		上川村	壱志 郡	(24 [†])	多気郡	六月六日	天明二寅年					233	横野村					深野村	一、飯高郡	うし六月廿一日				2:	3	
7月六日	11 11 11 11 11 11 11 11			<u> </u>	多気郡	六月六日	天明二寅年	拾人				22 %						深野村	一、飯高郡		弐拾七人			22 0	3	
七月六日			-	<u> </u>	f	六月六日	天明二寅年	拾人	五郎市殿	万次郎殿	弥八殿	善兵衛殿		権之介殿	平蔵殿	岩政殿	仁平次殿	深野村宗助殿宗助殿	公友項 一、飯高郡		弐拾七人	伴右衛門殿	伝蔵殿	源蔵殿	忠蔵殿	武兵衛殿
七月六日			-	笠木村 九朗兵衛展	f	六月六日	天明二寅年	拾人 山田野村	五郎市殿 一、壱志郡		弥八殿	善兵衛殿	横野村 伊右衛門殿	権之介殿 一、奄芸郡 六月廿三日		岩政殿	仁平次殿		公友頭 一 一、飯高郡 一 一、飯高郡 - 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一				伝蔵殿 天明卯辰両年 不参也	源蔵殿		武兵衛殿 一、壱志郡

ラリノ日名	だ 月八 申 手	天明七未年	≘ 1 1	◆ み 打匹 丿	(27 [†]) (27 [†])	金あ拾五人	含た拾三人	有意見すっ	き、光合七人	27 才)	合に弐拾七人		西黒部村	一、飯野郡七月八日	天明六午年	26 2 [†]				仓屋	志子寸	一、庵芸郡	ŀ	山田町	1 度会君	七月三日
	•		含百合壱人狙	司丁新屋在耳展	署試山力安	高須長兵衛殿	高須長次郎殿		川原尓介設	同 垣内庄左衛門殿		先達西山善六殿				人	文右衛門殿	林蔵殿	で、意識、展	全	言: 京記 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京		上下四人	松葉次郎太夫殿		
				相賀村	一、渡会郡				2	8877				夏草村	山原新田	六月廿七日								神島村	度会君	- 六月十七日 (28 t) (28 t)
	左兵衛殿	多吉殿	定七殿	久兵衛殿		打四ノ	合写人 伊之財殿	主蔵殿	要蔵蔵	佐兵衛殿	和兵衛殿	松兵衛殿	与四郎殿	新右衛門殿			拾三人	杢右衛門殿	平八殿	久右衛門殿	猶右衛門殿	又左衛門殿	兵左衛門殿	弥重郎殿	先立 文左衛門殿	
			中之庄	一、壱志郡	同 (30 才) 日 オ) オ	上蛸地村	一、飯野郡六月十二日		北藤原浦	一、多気郡	六月十二日	寛政二戌年								山田野村	一、壱志郡	六月廿五日	寛政元酉年	¥	2 3	9
政七殿	松次郎殿	重五郎殿	与三重殿		j J	与八殿		弐拾五人	大島庄兵衛殿	山中和七殿			七人	源吾殿	吉介殿	善吉殿	藤吉殿	新五郎殿	専介殿	弥七殿					藤右衛門殿	伝兵衛殿
					渋見村	一、安濃郡	上 ₃₁ 計 計		庄	一、飯野郡	六月廿六日						井には、井には、井には、中では、中では、中では、中では、中では、中では、中では、中では、中では、中で	一、壱志郡	戈 六月廿二日				市場之庄			
	金蔵殿	吉右衛門殿	庄吉殿	源蔵殿	庄蔵殿		封推力人	司 六郎右衛門殿	先達 四郎兵衛殿			五人	林七殿	弥蔵殿	文蔵殿	嘉蔵殿	弥曾吉殿		in	弐 恰四人	忠兵衛殿	銀蔵殿		講親 市蔵殿	重蔵殿	甚五郎殿

一、壱志郡 茂七月四日 32 才 拾弐人 重内殿 伴蔵殿 和助殿 長三郎殿 庄三郎殿 五兵衛殿 三之烝殿 久米松殿 小兵衛殿 宇助殿 吉兵衛殿 要蔵殿 武助殿 勇介殿 清太郎殿 弥助殿 米蔵殿 藤蔵殿 牧右衛門殿 新吉殿 徳次郎殿 久蔵殿 多蔵殿 八郎兵衛殿 一、度会郡 日四日 一、度会郡 一、度会郡 亥六月廿四日 33 オ 寛政三亥年 上条村 川崎町 神津佐村 六人 伝七殿 久次郎殿 長吉殿 与蔵殿 林吉殿 兵吉殿 兵助殿 林蔵殿 新八殿 善兵衛殿 清助殿 平介殿 与兵衛殿 伝六殿 利八殿 喜蔵殿 庄吉殿 新蔵殿 甚兵衛殿 一、度会郡 田村領 山原村 一、壱志郡 亥七月十六日 34 オ 33 ウ 寛政四子年 星合村 八人 市助殿 伊八殿 甚介殿 半兵衛殿 弥兵衛殿 弥介殿 林介殿 源助殿 与惣次殿 用介殿 半蔵殿 吉太郎殿 藤七殿 久蔵殿 清蔵殿 長蔵殿 甚吉殿 多介殿 徳右衛門殿 万吉殿 大宮田村 一、飯野郡 松坂領 村 一、飯野郡 一、飯野郡 35 才 34 ウ 拾七人 先達 権之介殿 庄吉殿 藤八殿 利兵衛殿 半蔵殿 吉次郎殿 次兵衛殿 文次郎殿 平蔵殿 新蔵殿 栄介殿 栄蔵殿 喜助殿 新介殿 甚蔵殿 善吉殿 定次郎殿 政次郎殿 弥市郎殿 孫右衛門殿 七郎左衛門殿 次兵衛殿 喜三郎殿

一、度会郡 竹ヶ鼻村	六月十五日寛政五丑年九人	35 ウ	一、壱志郡 一、壱志郡 皇合村	(伊 勢 国追者帳)」 一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
喜 庄 吉 兵 久 久 吉殿 殿 殿 殿 殿	人 伝 佐 助 介 殿 殿	長 新 忠 甚 演 老	(1) (1) (1) (2) (2) (3) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4	· · · · · · · · · · · · · ·
六月十一日六月十一日	六月廿二日 一、壱志郡 一、壱志郡 一、壱太 一、壱志郡	寛政六寅年	一、 うし六月 十 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	一、度会郡 勝田村
弐 人	ハ 月 初 り	拾七人	五 人 先 達	拾三人
忠 右衛門 殿	善 次 郎 殿	与左衛門殿 松石衛門殿	青 藤 嘉 喜 勇 哉 蔵 と 殿 殿 殿	股 周 良 兵助 助 介 殿 殿
	一、度会郡 一、度会郡 神島村	一、 壱志郡 野田村	一、 売 売 志郡 甚 目 村	(新文·) 一、飯高郡 山村
直 孝 八 小右衛門殿 岩松殿 殿 殿	五 人	拾弐人	先達 伊八殿 喜右衛門殿	弐拾弐人 三右衛門殿 三右衛門殿
	一、 一、 田丸領 田丸領 九人	(39 t) 字田村 中津浜通	(387)	
宇 三 伊 善 文 三郎 作 殿 殿 殿 殿 兵衛	半右衛門殿	新七殿 基左衛門殿		八 好 半 三 市 林 之 助 嚴 殿 殿 殿 殿

													(40 オ)]]	山原村	一、度会郡	第13十二 集申歳		加田村	一 鈴鹿君	七月朔日	9
孫蔵殿	丈助殿	勘蔵殿	平吉殿	甚吉殿	林内殿	彦太郎殿	宇五郎殿	伊太郎殿	市松殿	為蔵殿	恵吉殿	勇蔵殿	甚之 助 殿	長	徳公殿		2	先達 喜兵衛殿		庚 申歳	ti 克 克 人	を 、	名主久左衛門殿下		弐拾壱人
								船江村	一、飯高郡											和泉村	田丸領田丸領	中六月七日	0		
田畑勘次郎殿	奥野長右衛門殿	山上松次郎殿	伊藤文蔵殿	伊清甚介殿	田村惣太郎殿	井上宗七殿	同 孫右衛門殿	斎藤勇右衛門殿			拾人	ににた。	儀助殿	弥四郎殿	用蔵殿	友蔵殿	伊介殿	万介殿	長三郎殿	庄吉殿			弐拾壱人	文吉殿	文助殿
							(42 7)			御原佐田村	一、多気郡							山原村	田丸領田丸領	中六月十日					
辻松殿	亀蔵殿	伴之烝殿	平蔵殿	弥助殿	銀助殿	文蔵殿	忠蔵殿	丈助殿	直吉殿	清次郎殿		六人	弥兵衛殿	平助殿	清次郎殿	栄次郎殿	普明院様	正伝庵様			拾壱人	長森兵蔵殿	福田市松殿	村田三次郎殿	前川弥八郎殿
一、多気郡							野田村	一、壱志郡	(43才) 藤堂和皂	産品村	一、安濃郡 申六月廿六日					42 ウ	2								
	六人	伊助殿	藤蔵殿	孫右衛門殿	仙吉殿	忠介殿	林助殿		藤堂和泉守様御領分	名 源八殿		弐拾五人	半介殿	栄蔵殿	好吉殿	石松殿	慶蔵殿	平蔵殿	要蔵殿	三之助殿	茂介殿	定五郎殿	佐兵衛殿	丈蔵殿	岩松殿

	含 印	一、 ₍₄₄ t) 飯野一 郡郡		(3 43 ウ)	
あみやい	世話人	西黑部村 先立 五 郡 田 西山善六郎 拾九人		藤原木 村 同 名主	
あみや山腰万蔵殿中谷忠蔵殿	辻 治介殿 北村浅吉殿 北川儀介殿	2. 先立 西山善四郎殿西山善六殿悴 格九人 孫吉殿	新兵 仙 金 宗兵 蔵殿 半蔵殿 宗兵 山吉殿 殿 殿 殿	里 新 伝 多 仙 彦 直 新 吉 殿	
			45 分	(44 ²) 享和二度年 字和二度年 学和二度年 一、飯野郡 西黒部村 西黒部村	
庄之助殿岩七殿	善藤 高殿 殿	浅 虎 次 字 之 助 殿 中 兵 衛 殿 殿	与	無	
殿		殿 殿 殿	版 版 網 網	殿	
	一、渡会郡相嶋村	元 甲 村 子 年	村 亥	一、度会郡 八幡町	
弥 重 郎 殿		· 壱人 長岡金右衛門殿	弐人弐人弐人市右衛門殿市五郎殿市五郎殿	等之	ぎョベンル又
	(47 †)	西 黒 部 村	一、度会郡 日 松	47 *\frac{47}{\pi}	
嘉 新 吉殿	久 清 三 三	西山善三郎殿 善四郎殿 善四郎殿	元右衛門殿 又左衛門殿 三郎治殿 兵左衛門殿 安松殿	徳 藤 善 吉 三 安 鶴 直 吉 松 殿 殿	ヨニゴルズ

刊 和田 乙								
	(48 49 7)	一、渡会郡上丈沢村	六月九日 文化三寅年 五人		次月廿三日 一、飯高郡 六月廿三日	拾八人		
孫十郎 殿	源 茂八殿 殿 殿	勘蔵殿		專五郎	五郎助殿	長 市松殿	卯 清 歳 般 般	文 嘉 五郎 殿
	46 9	王中島村	一、渡会郡 大湊		一、渡会郡 一、渡会郡 御神領			
茂 新次郎殿	半三郎殿	世話人新左衛門殿	宮崎蔵人殿	拾九人 弥吉殿 庄蔵殿	拾六人 先達 林蔵殿	市松殿 溶代松殿	利兵衛殿 吉郎兵衛殿	兵吉殿 林三郎殿
	一、壱志郡 小川村 講親	(500) 文化六己巳年 弐拾七人	山田船井町			(50 才)		
展之介 殿	親 久次郎殿 久七殿	A	源蔵 殿 殿	文 佐 久 竹 長三 文 佐 石 殿 殿 門 殿 門 殿	表 和 七 裁助殿 殿 殿	長蔵殿 文蔵殿	次 宗 源 原 殿	金 新 長介殿
(52 [*] オ)	講報		一、壱志郡 / / / / / / / / / / / / / / / / / / /	(51 ²) 飯高郡 大津村	多気郡 作り木村		一、壱志郡 中之庄村	文化八未年 文化八未年
万 熊 原 殿	問 忠兵衛 殿 忠兵衛 殿			源 利 要介殿 門殿	宗吉殿伊左衛門殿	三四郎殿 三四郎殿 一三四郎殿	弟吉殿	祖

(33 才)	一、渡会郡 泉村	一、渡会市 六月十七 安会郡 山原村	一、 渡会郡 文化九 申 年
藤新重蔵殿殿殿殿	拾六人 医蔵殿	弐拾六人 弐拾六人 先達 平太郎殿 佐平次殿 伝蔵殿 半兵衛殿 半兵衛殿	拾人 拾人 特人 特人 特人 特之 小窪又五郎殿 市右衛門殿 利右衛門殿
一、 一、 一、 一、 表志郡	拾	(SB p) 同日 一、壱志郡 中野庄村 廿	一、 渡 会 郡 津 佐 村
	拾八人 金五郎殿 吉助殿	廿八人組 廿八人組 中 中 中 市 古 殿 中 古 助 殿	拾壱人 拾壱人 先達 朱達 森井要蔵 伝蔵蔵 日本蔵殿 大蔵殿 を もした 一様 一様 一様 一様 一様 一様 一様 一様 一様 一様 一様 一様 一様
(55 オ) 曲 り 村	(文化+1年) 尺六月廿日 一、度会郡 上下〆拾人	一、 六月三日 飯田村	(54 t)
常意蔵殿石衛門殿	先達	拾三人 藤右衛門殿 藤右衛門殿 藤右衛門殿	弐人 弐人 大立 大空 大空 大空 大空 大空 大空 大空 大至 大至 大至 大至 大至 大至 大三 大三 大三 大三 大三 大三 大三 大三 大三 大三 大三 大三 大三
	大月十五日 一、渡会郡 一、渡会郡 神津佐村	(55º) (三/b) 文化十一亥六月廿八日 一、多気郡 色太村 色太村	六月廿三日 一、渡会郡 宇津喜原村 拾人
茂 弟三郎殿 縣 殿	先 磯達 崎	人 政 為 徳 忠 吉蔵殿 改 四郎殿 殿 殿	(大) (大) (基) (基)

	一、壱志郡 松坂領 中之庄村	(56 ウ)	一、飯高郡 松坂額 野村		(56 才)
五 人	七人			拾 六 人	先 用年 蔵先
新 利 文 佐 助 兵	久 太 郎 殿	平	文 新 兵 次 之 縣 殿 殿	伊 庄 良 八 吉 蔵 殿 殿 殿	用蔵殿悴文之助殿 先年先達 長蔵殿 多介殿
一、 文 政 四 年 郡		57 †	小 川 村	一、 売 志 郡	(57 x) 一、壱志郡 黒野村
拾七人豊吉殿弥兵衛殿	善徳 蔵殿 座左衛門殿	忠治郎殿	伊兵衛殿 九兵衛殿	五人 左達 新兵衛殿	冬 永介 殿 三次郎殿
	宫本 嶋, 村	一、渡会郡 未六月廿六日 (^{38 †)} 文政六未年初り 四人	文政五午年 一、安濃郡 岡南村	(88 *)	^{ウッツキハラ} 村 ^ラ
又 森 忠 久 又 太 八 右 吉 殿 殿 殿 殿 門 殿	講親 善太郎殿 茂右衛門殿	不 手信展	引 亀 仙 伴 松 蔵 殿 殿	弥 佐之烝殿 志三郎殿	喜 庄 惣 宗助殿 宗助殿 殿
未七月八日 一、壱志郡 中野庄村	(5 +)	9			(59 才)
文三拾壱人 先達 伴蔵殿 善助殿 勝	猶 富	小治郎殿 五郎松殿	兵岩 長 林 善之 嚴 殿 殿 殿 殿	平 安 善 門右衛門殿	安 又 久 改 改 吉殿 殿 殿

一、渡会郡 山原村	(60 t) 一、渡会郡 中年	
本	拾人	門 梅 仙 国 弥 助 之介 殿 殿 殿 殿
1	61 ₹)	
加 相 酒 参 人 約 本 井	和伊楠善庄長新引助介松七介吉介 殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿	陈 宗 吉 殿
(62 ウ) (62 ウ) 関六月十三日	(62x) (62x) (62x) (62x) (62x) (62x) (62x) (72x	化寸藤十郎投 西黒部村 先達 若林藤助殿 垣内庄左衛門殿
(gd オ) が	● 空印 日本本 ・ 空印 五斗代村 ・ で変十二五歳初 ・ で変十二五歳初 ・ で変十二五歳初 ・ で変十二五歳初 ・ で変十二五歳初 ・ で変十二五歳初 ・ で変十二五歳初	殿 (63 才)
六人 同断名護清吉殿 同断名護清吉殿 伊助殿 市兵衛殿 佐兵衛殿 安庄 蔵殿 於介殿 彦四郎殿 於介殿 於介殿	「同断田畑林七殿「日断田畑林七殿	善整 松 才 德次郎 九平治殿 殿 殿 殿

で (65°) 一、壱志郡 一、壱志郡 一、壱志郡	天保三辰年メ拾	り 卸	(65 才) 富士 山	一、度 宮本 上 条 村	一
名主庄蔵殿下	メ 拾三人	ご 三 石 長七 殿 平太郎殿 殿	勘介殿 三之介殿 明吉殿	先達 大東八郎兵衛殿 甚五郎殿 与作殿	在 (年無之 (本) 大工 (本) 大正 (本) 大工 (本)
(gr *) 天保五午年始り メ拾		(66 ウ)		(66 *) 一、壱志郡 小川村 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	六月廿日 一、壱志郡 野田村
始り 此両年登山なし	孫四郎殿 忠兵衛殿	原 仁 庄 嘉八殿 嘉八殿 野門殿	太吉殿	先 講 達 親	先達
		68 [†])	夏草村	68 オ オ	一、度会郡 一、度会郡 山原村
佐 甚 久言殿 殿 殿	喜兵衛殿 恵吉殿	清太郎殿 五郎助殿 四郎兵衛殿	先達兵吉殿 善善七殿	講元 久 重 重 成	平 庄 善
中之庄木	70 オ) コ・・ ニニナ	一、勢州壱志郡 申六月廿一日 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	(89.2) 追間村	が宿 釜 ^{カマ} 村	(60 光) 堀 切 村
利七殿藤之丞殿	生 養養 忠五郎殿	> 四拾四人 長治郎殿 老之財殿	全 弁 半 寅吉殿 東吉殿 殿 殿	高麗 新 源 新 源	京長孫金弥与要楠 一助 蔵助 助蔵 松 民殿殿殿殿殿殿殿

	一、度会郡	72 72 7		矢 日 村	に 原刊 村	渡。郡	六月三日	(12) 天保十二丑年始	同十一子年	后 十 多 年		司 九支丰	一、 天保八酉年	,								(70° r)	0				
-	平右衛門殿	三人	后 宇吉殿	H	2. 担心方式 老松屋俤三則殿			年始	一同断	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一		于 司斯	* 参詣無	〆拾九人	乙五郎殿	増蔵殿	伊蔵殿	儀七殿	伊兵衛殿	佐吉殿	与三次郎殿	重之助殿	嘉介殿	要助殿	利助殿	亀松殿	喜市殿
								73 才				神津佐村	一、渡会郡	六月十二日	₩				77 †	2						左近山	岡本在
名古庄作殿	向井嘉兵衛殿	磯崎覚右衛門殿	徳田親蔵殿	孫 留	幾 所 是 一 就	短り	日外居庙展	日田司裁と	川村広助毀	句井多助酘	田畑清助殿	浜川吉内殿			拾三人	与吉殿	半七殿	利吉殿	吉左衛門殿	卯吉殿	石松殿	与之助殿	清治郎殿	直右衛門殿	久治郎殿	治郎吉殿	善六殿
	(で 対				小阿坂村	一、一志郡	六月十九日	天保五年始メ〔+脱カ〕					一、庵芸郡 白子村	六月十三日	天保十四卯年始	(47) 天保十三寅年、参詣無之候、	×	<i>V</i> 3	争		槍木原	一 渡会郡	天保十一子年七月朔日	が が が が が が が か が か が か が か が か が か が か			(73 ウ)
嶋吉殿	多蔵殿	常助殿	勝之助殿	礒八殿	伝蔵殿	た 幸			*	忠作殿	十兵衛殿	利助殿	三郎兵衛殿			 		甚九郎殿	市松殿	i 住 松 殿	長治郎殿			五人	桜井又兵衛殿	浜川兵吉殿	森井善吉殿
喜市殿								小阿坂村	松坂在	六月十三日	弘 化三年	(76 z) (76 z)	四日市宿新町	四日行音斤丁	一、三重郡	定人大宮へ	下野川村	一 勢州 一 志君	こと対しまる日本の	一、弘化二巳年	〆拾弐人						
与惣五郎殿	常吉殿	勘松殿	荻松殿	良平殿	岩吉殿	藤五郎殿	為吉殿	善蔵殿					長力良展	きし以近			十三郎殿	<i>勇</i> 丑良殿	<u> </u>			鉄二郎殿	与三次郎殿	金吉殿	桐五郎殿	与八殿	繁松殿

六月十二日 一、渡会郡 アマ 上町	一、 一、 一、 一、 一、 一、 一、 一、 一 一、 一 一、 一 一 一 一 一 一 一 月 十 一 門 十 一 門 十 一 月 十 月 十 月 十 月 十	一、尾州智多郡 同七月十日 富貴村	一、
判 グ 四 人	式 九 人 人 清 礒 七	先 達	八百吉殿 清兵衛殿 谷帯刀塔 谷帯刀塔
嘉 万 増 藤 兵衛 敗 殿	清	嘉介殿 秦右衛門殿 秦右衛門殿 幸 一殿	青殿 六平殿 青殿 源兵衛殿 一般 安吉殿 一十倉十助様
一、渡会郡神津佐村	(78 *) 檜山村 メ弐拾三人	紀 印	一、渡会郡 山原村
同 先達 菊 浅 銀 茂 兵 蔵 声 殿 殿 殿		長源綱 根 甚 桂七 蔵 吉 蔵 助 蔵 殿 殿 殿 殿 殿 殿	是 作 用 升 作
一、度会郡 一、度会郡 神島村 又五郎殿	下津浦村	79 *\frac{1}{2}	
半 三 金 液 蔵 点 成 成 原 財 財 股 財 股 股 財 股 股 日 股 日	京喜市浅政定嘉市作 弁 京太之次吉吉七 蔵蔵蔵 京郎殿殿殿殿殿殿殿	平 甚 兵 伝 七 殿 宏 蔵 殿	銀 多 長 弥 助 殿 長 衛 殿 殿
浪 花 講 与 匹 町	嘉永三戌年始メ (80 ²) 五月廿九日 一、越後国蒲原郡 六月十九日 一、丹後国伽佐郡	野 田 村	第永五子年 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三
メ 弐人 同 由松殿	メ 三 庄	至人	- 初 り イ 治 壱 人 三 三 郎 殿 殿 殿
で 殿	2	辰 桂 貞 次 水 郎 殿 殿	松 政 徳 次 蔵殿 衆 殿

委	
委員長	山梨
ŧ	山梨県富士山総合学術調査研究委員会】
灰京	#
	総
土	台 学
三進(歴史考古民谷郭会・考古班)	術語
足影	查研
三民公	究
台郭公	安員^
-	술
学片	(敬
	(敬称略)
) 陸	

副委員長 多具 紙谷 威廣 1 (歴史考古民俗部会・民俗班 (歴史書)世月俗音名 老古班

員 高 (自然環境部会)

北原 糸子 (歴史考古民俗部会・文献班)

俊元(歴史考古民俗部会·宗教考古班 (文学部会)

隆 (有形文化財部会)

> ○歴史考古民俗部会(建築班) 松田香代子、丸尾 依子

北川 洋、北川 直子

○有形文化財部会

井澤英理子、 近藤 暁子、 鈴木麻里子、

松田美沙子

○文学部会

高室 有子、長谷川豊輝、 堀川

貴司

○自然環境部会 【山梨県富士山総合学術調査研究 調査員】 (敬称略

杉田 内山美恵子、北原 幹夫、中井 中野 隆志、

長谷川達也、馬場

○歴史考古民俗部会(文献班)

晋作、宮崎ふみ子、 宮澤富美恵

石神 孝子、出月 洋文、 植月

河西

晋祐、 新津 篠原 杉本 恵子、 悠樹、

深沢 広太、

和久、

均、 達司、

伊藤 昌光、海老沼真治、 中野 賢治、

○歴史考古民俗部会(考古班・宗教考古班)

学、 櫛原 功一、久保田健太郎

康夫、

宮澤 御山

八卷與志夫

○歴史考古民俗部会(民俗班)

久枝、高橋 晶子、 古屋

秋道 智彌

(事務局)

(山梨県立富士山世界遺産センター)

副所長 本田 晴彦

(調査研究スタッフ)

副主査 堀内 金子 誠司 亨

学芸員 堀内 眞

員 芦沢

員

山梨県富士山総合学術研究

令和二年度活動記録

【歴史考古民俗部会(考古班・宗教考古班)】

○資料調査

・実施日 令和二年八月二十四日

· 対 象 富士吉田市 旧登山道(室道)

· 内 容 巡礼路および信仰関係石造物の調査

○資料調査 (山中湖村との合同調査)

·実施日

令和二年九月七日(月

· 対 山中湖村

内

村内遺跡分布調查

○資料調査

· 実施日 令和二年九月十一日

· 対 象 富士吉田市 旧登山道(室道)

容 巡礼路および信仰関係石造物の調査

○資料調査

· 内

・実施日 象 富士吉田市 令和二年十一月二十四**日** 旧登山道 (室道)

· 対

· 内 容

○資料調査

令和二年十二月十二日

土

巡礼路および信仰関係石造物の調査

·実施日

· 対 · 内 容 象 巡礼路および信仰関係石造物の調査 富士吉田市 旧登山道 (室道

○資料調査

· 対 ·実施日 象 村山口登山道

令和三年二月十日

水

· 内 容 巡礼路の調査

○資料調査

·実施日 令和三年二月十四日 _日

· 対 象 村山口登山道

内 巡礼路の調査

【歴史考古民俗部会(民俗班)】

○資料調査 (富士河口湖町との合同調査)

· 対

· 実施 日

令和二年九月二十日

(日

富士河口湖町

歌謡・縁起類についての現地調査

· 内

【展示解説検討委員会】

○第1回 令和二年七月十四日

○第2回 令和二年九月二十九日 (火)

令和三年三月二十三日**(火**)

○第3回

山梨県立富士山世界遺産センター研究紀要

世界遺産 富士山 第5集

令和三年三月三十一日発行

電話 ○五五五―七二―二三一四編集・発行 山梨県立富士山世界遺産センター

〒四〇一一〇三〇一

山梨県南都留郡富士河口湖町船津六六六三——

印刷・製本 株式会社 島田プロセス

電話 〇五五—二三三—八八二九

〒四○九一三八六七

山梨県中巨摩郡昭和町清水新居一五三四



Bulletin

of the Yamanashi Prefectural Fujisan World Heritage Center

World Heritage Fujisan

vol.5 2021